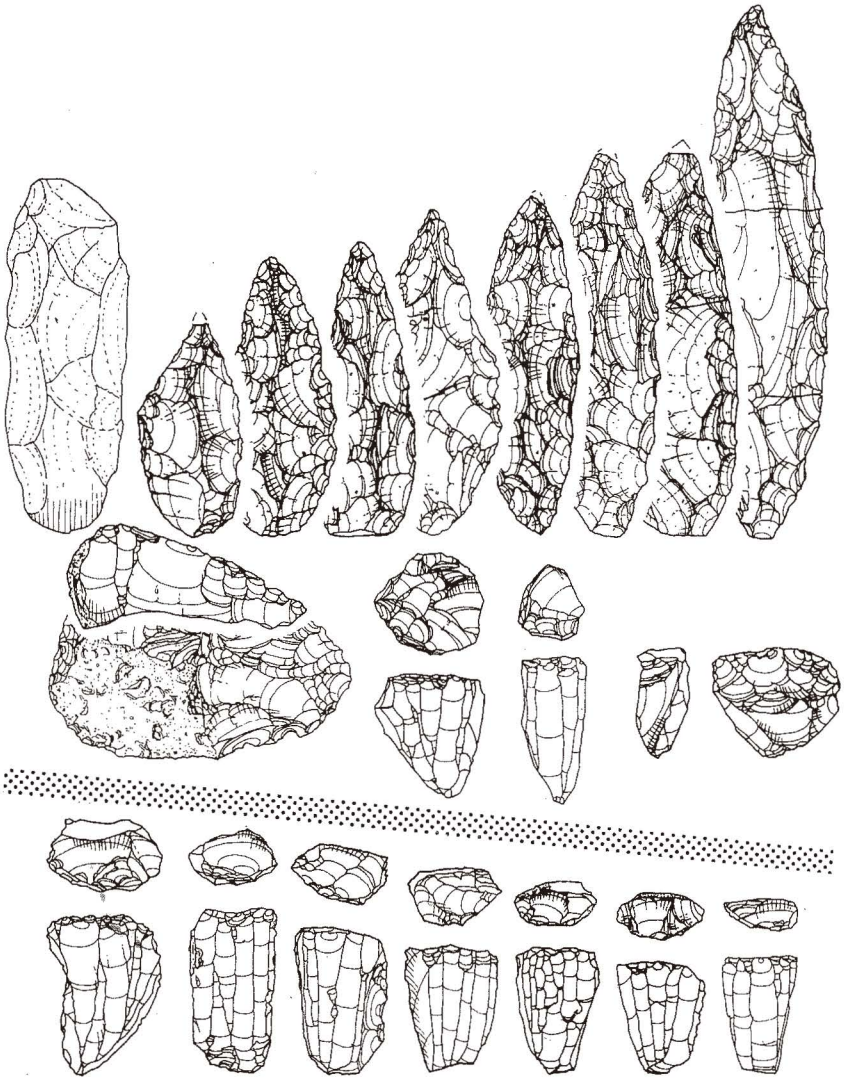
岐宿町文化財調査報告書　第３集

茶園（ちゃえん）遺跡



1998

長崎県岐宿町教育委員会

岐宿町文化財調査報告書　第３集

茶園遺跡

（ちゃえん）

1998

長崎県岐宿町教育委員会

発刊にあたって

このたび平成９年に畑地帯総合改良事業の圃場整備に先立って実施しました茶園遺跡の発掘調査報告書を刊行することになりました。

調査は平成９年５月から６月にかけて実施しましたが，思いもかけず大量の遺物が出土したため改めて９月に再調査を実施いたしました。

調査の結果，旧石器時代のナイフ形石器群から縄文時代早期にかけての各時期の遺物が層位的に確認できるという画期的な成果を収めることができました。特に細石器石器群を開地遺跡において分層できたのは長崎県内では初めてであり，きわめて貴重であります。

茶園遺跡は旧石器時代の遺跡としては日本の最西端に位置しております。そうした地理的な位置からも茶園遺跡下層の細石器石器群はその始源について新たな視点を提供するものとなりました。また上層では細石器石器群とともに石槍・局部磨製石斧が出土しております。それらの系譜も今後の研究課題であります。

最後になりましたが，今回の調査にあたられました県教育委員会文化課，調査に従事された作業員の方々のご協力に深く感謝いたします。

本書が，岐宿町の文化財の保存・顕彰および地域の学習資料として，活用いただければ望外の喜びとするところであります。

平成10年３月31日

岐宿町教育委員会

教育長　　戸野本　三　次

例　　言

1．本報告は平成９年度に実施した畑地帯総合改良事業に伴う長崎県南松浦郡岐宿町に所在する茶園遺跡の緊急発掘調査の報告書である。

2．調査は岐宿町教育委員会が事業主体となり，長崎県教育庁文化課が調査を担当した。
調査は平成７年９月25日から10月６日に範囲確認調査を実施し，その結果に基づいて平成９年５月６日から６月18日および９月29日から10月25日までの間本調査を実施した。

3．調査主体者および担当者は次のとおりである。

調査主体	岐宿町育委員会	教育長	戸野本　三　次
	同	事務局長	弓　川　　彌
	同	社会教育係長	狩　浦　雅　彦
調査担当	長崎県教育庁文化課	文化財保護主事	川　道　　寛
	同	文化財調査員	塩　塚　浩　一(現平戸市教育委員会嘱託)
		文化財保護主事	宇　土　靖　之
		文化財調査員	東　　貴　之
		文化財調査員	荒　木　伸　也

4．橘昌信（別府大学教授）には現地指導をいただいた。

5．放射性炭素年代測定は㈱古環境研究所に委託した。

6．遺構・遺物の実測は，塩塚・宇土・東・荒木伸也・荒木美保・中村ヒロ子・徳永妙子・近藤慶子・松尾美代子・黒川英子・川道が行い，製図は渡辺洋子・斉藤いづみ・近藤千鶴・川道が行った。
写真は調査は川道が，遺物写真は宇土・荒木が担当した。

7．黒曜石の産地同定については自然科学分析が必要であるが，ここでは従来の肉眼的認識に従い，断口面が漆黒で良質なものを牟田系黒曜石，断口面が風化で青灰色および乳白色・灰白色を呈するものを淀姫・針尾系黒曜石と表記することにした。

8．本遺跡の遺物および写真・図面等は長崎県教育庁文化課立山分室で保管している。

9．本書の刊行にあたって多くの方々から援助を受けた。記して謝意を表します。(順不同)
橘昌信（別府大学教授），下川達彌（長崎県立美術博物館次長），白石浩之（神奈川県立埋蔵文化財センター），鈴木忠司(京都文化博物館主任学芸員)，松藤和人(同志社大学助教授)，萩原博文(平戸市企画課平戸市史編纂室係長)，織笠昭（東海大学助教授），長岡信治（長崎大学教育学部助教授），塚原博（小値賀町教育委員会），渡邊康行，杉原敏之（九州歴史資料館），松崎義治（福江市教育委員会），岩永雅彦（多久市教育委員会）

10．本書は第４章を荒木伸也が執筆した。残りは川道が執筆した。

11．本書の編集は川道が行った。

本　文　目　次

発刊にあたって
例　　言
目　　次

第１章　調査の経緯
　第１節　発掘調査にいたる経緯……1
　第２節　発掘調査の経過……1
第２章　五島列島と茶園遺跡
　第１節　五島列島の旧石器時代から縄文時代草創期研究史素描……2
　第２節　茶園遺跡の地理的・地形的環境……3
　第３節　層　　位……4
　第４節　遺　　構……7
　第５節　遺物分布……8
第３章　石器群の変遷
　第１節　第VI層石器群……8
　　(1)　遺物分布……8
　　(2)　石器群の組成……10
　第２節　第Ⅴ層石器群（細石器石器群）……13
　　(1)　遺物分布……13
　　(2)　主要石器の分布……14
　　(3)　石器の組成……15
　第３節　第IV層石器群（縄文時代草創期）……26
　　(1)　遺物分布……26
　　(2)　主要石器の分布……26
　　(3)　母岩別資料……28
　　(4)　石器の組成……29
　　(5)　縄文時代草創期の土器……44
第４章　縄文時代早期文化
　第１節　土　　器……48
　第２節　石　　器……50
第５章　茶園遺跡に関する考察
　第１節　茶園遺跡石器群の編年……53
　第２節　茶園遺跡第Ⅴ層石器群の扁平細石核について……57
付編　岐宿町，茶園遺跡の年代測定……63
図版……65
抄録……77

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置図と周辺の遺跡分布
第２図　調査区配置図……1
第３図　遺跡周辺の表層地質図……3
第４図　Ｄ区北壁土層断面図……5
第５図　Ｂ・Ｃ・Ｄ・Ｅ区西壁土層断面図……6
第６図　配石遺構……7
第７図　土　　壙……7
第８図　調査区全体の遺物分布……9
第９図　第VI層の遺物分布……10
第10図　第VI層石器群の石器①……11
第11図　第VI層石器群の石器②……12
第12図　第Ｖ層の遺物分布……13
第13図　第Ｖ層の細石器関係遺物分布……14
第14図　第Ｖ層石器群の細石刃長幅グラフ……16
第15図　第Ｖ層石器群の細石刃……17
第16図　第Ｖ層石器群の細石核①……19
第17図　第Ｖ層石器群の細石核②と細石器関連石器……22
第18図　第Ｖ層石器群のその他の石器①……23
第19図　第Ｖ層石器群のその他の石器②……24
第20図　第Ｖ層の遺物分布……26
第21図　第IV層の細石器関連遺物分布……27
第22図　第IV層の石槍・局部磨製石斧の分布……27
第23図　母岩別資料……28
第24図　第IV層石器群の細石刃長幅グラフ……30
第25図　第IV層石器群の細石刃①……31
第26図　第IV層石器群の細石刃②……32
第27図　第IV層石器群の細石刃③……33
第28図　第IV層石器群の細石核……35
第29図　第IV層石器群のブランク類……37
第30図　第IV層石器群の細石器関連石器……38
第31図　第IV層石器群の石槍①……40
第32図　第IV層石器群の石槍②，石鏃と局部磨製石斧……41
第33図　第IV層石器群のその他の石器①……43
第34図　第IV層石器群のその他の石器②……44
第35図　縄文時代草創期の土器……44
第36図　縄文時代の土器……49
第37図　縄文時代早期石器①……51

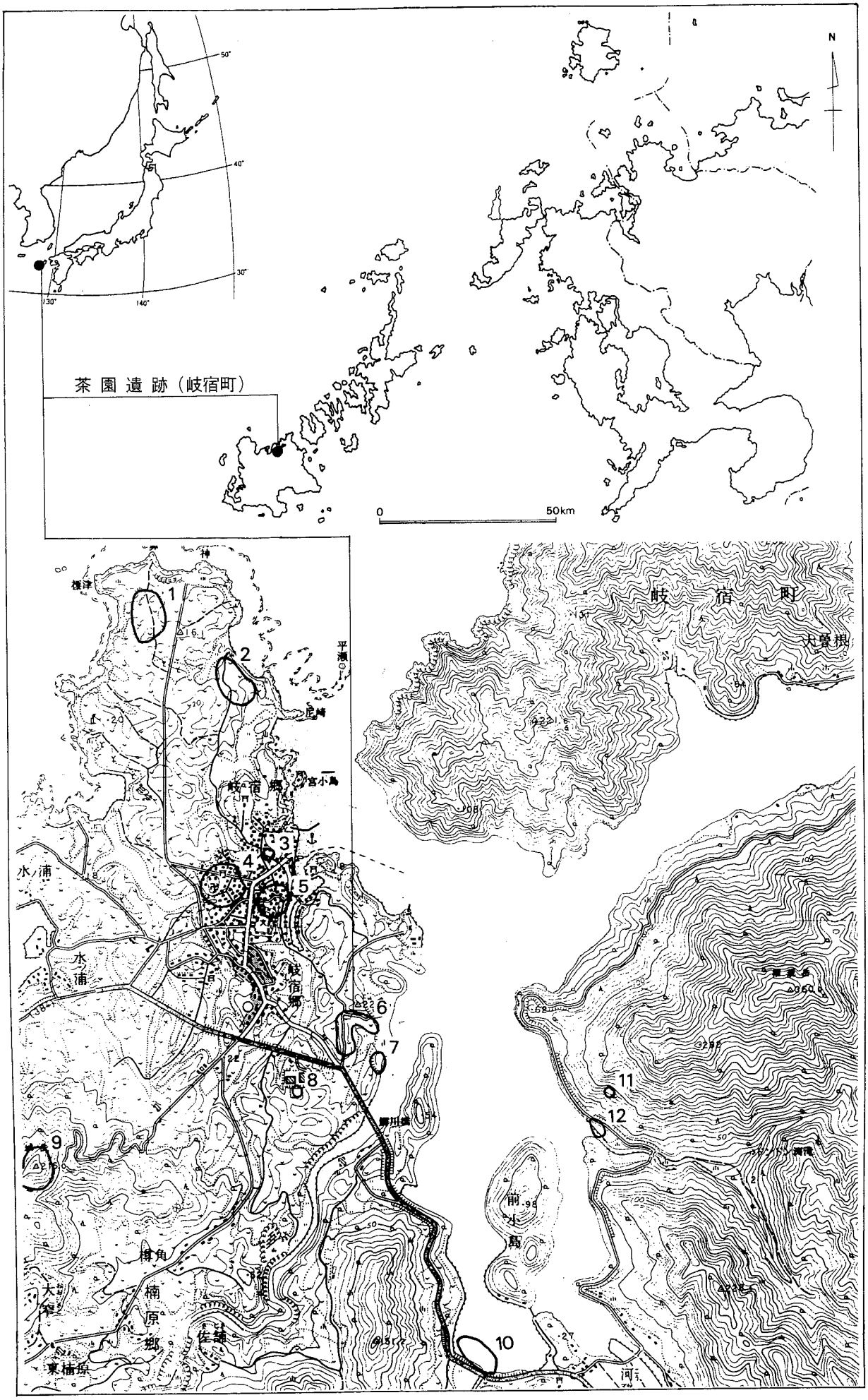
第38図　縄文時代早期石器②……52
第39図　茶園遺跡編年図……55
第40図　扁平細石核の分布……59
第41図　茶園技法（上段）と位牌塔技法（下段）……60

表　目　次

第１表　遺物計測表①……13
第２表　遺物計測表②……24
第３表　泉福寺洞穴の細石刃完形例平均値……30
第４表　層位別細石刃計測表……34
第５表　遺物計測表③……45
第６表　層位別遺物組成表……53
第７表　扁平細石核出土遺跡地名表……59

図　版　目　次

図版１　遺跡遠景，調査風景，土層断面……67
図版２　遺構，遺物出土状態……68
図版３　第VI層石器群の石器（上段），第Ⅴ層石器群の細石刃……69
図版４　第Ⅴ層石器群の細石核，第Ⅴ層石器群の細石器関連石器とその他の石器……70
図版５　第IV層石器群の細石刃，第IV層石器群の細石核とブランク……71
図版６　第IV層石器群の細石器関連石器とその他の石器……72
図版７　第IV層石器群の石槍，局部磨製石斧，礫器……73
図版８　第IV層石器群の石鏃，縄文時代草創期の土器……74
図版９　縄文時代の土器……75
図版10　縄文時代早期の石器……76



第１図　遺跡位置図と周辺の遺跡分布

第１章　調査の経緯

第１節　発掘調査にいたる経緯

茶園遺跡の所在する岐宿町では岐宿地区県営畑地帯総合土地改良事業が計画実施されてきた。茶園遺跡は当該事業区内にあり，盛土によって調査を回避することになっていたが，その後計画変更によって発掘調査することとなった。調査は岐宿町教育委員会が事業主体となり，長崎県教育庁文化課が担当した。範囲確認調査を1995年９月25日から10月６日に実施した。２×２ｍの試掘坑を19箇所設定し，合計76m²を調査した。第１・３試掘坑から遺物が出土し，第３試掘坑では良好な細石器包含層を確認した。その結果，第３試掘坑を中心とする 350m²を本調査の対象範囲とした。協議の末，一旦は盛土等の設計変更で対応することになったが，その後事業が見直され，最終的に緊急発掘調査やむなしにいたり，1997年５月６日から６月18日および９月29日から10月25日までの間本調査を実施した。

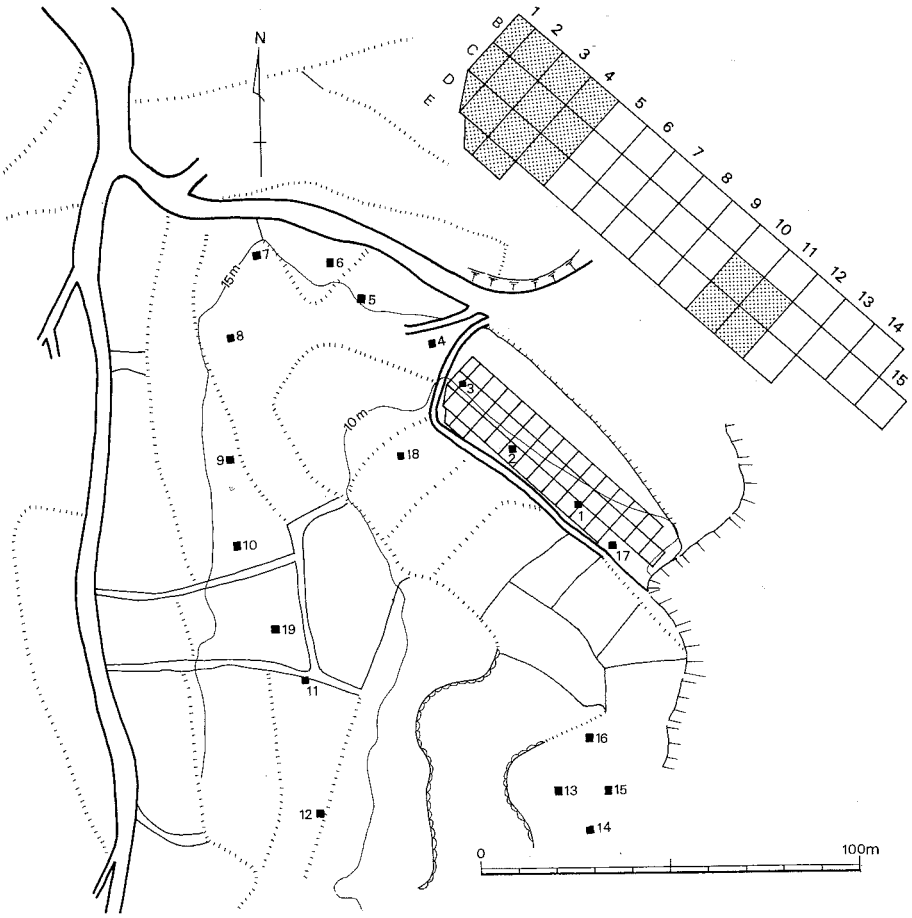
第２節　発掘調査の経過

本調査は細長い畑地の緩斜面に５×５ｍの方眼を組み，短軸方向にＡ・Ｂ・Ｃ・Ｄ・Ｅ，長軸方向に１・２・３…とし，Ｂ－２区のように表記した。試掘調査でもっとも良好な状態であった第３試掘坑の周辺に調査の主眼をおき，第３試掘坑を取り込むＣ－１・２区から調査した。Ｃ－２区は思いもかけず豊富な遺物を出土した。この調査区だけで総計3000点にのぼった。記録は５×５ｍの調査区をさらに１ｍメッシュにわけて手作業で記録を取ったために膨大な遺物の出土は作業の進行に影響を来した。そのため本来の調査期間では到底終わることは不可能となり，岐宿町教育委員会および長崎県五島支庁を交えて対応を協議した結果，秋に改めて発掘調査を実施することとなった。

第１試掘坑周辺に設定したＣ・Ｄ－10・11区は包含層の残りが貧弱で，ほとんどの遺物が表土層からの出土であった。

９月の再発掘では作業の効率化を図るために，表土から第Ⅲ層までをバックホーを使って除去した。主に調査したＤ－２・３区，Ｅ－２・３区からも遺物の出土が相次ぎ，調査は逼迫したが，好天にも恵まれ，所期の日程で調査を終了した。

Ｅ－２・３区の湿地帯側への拡張は，生活道路や調査期間とのかねあいで，実施できなかった。遺物分布図からみて，その広がりは若干ではあろうが拡大することは疑えない。



第２図　調査区配置図

第２章　五島列島と茶園遺跡

第１節　五島列島の旧石器時代から縄文時代草創期研究史素描

五島列島における旧石器時代から縄文時代草創期にかけての研究は，戦後直後から始まった瀬尾泰平による宇久島城ヶ岳平古遺跡を中心とする資料収集活動に端を発した。城ヶ岳平子遺跡は旧石器時代の細石器を出土することはいち早く島外の研究者の注目するところとなり，古くは桑山龍進によって昭和20年代末から30年代初めにかけて調査されている。1963年に実施された五島遺跡総合調査団による「五島一般調査」を担当した桑山は，城ヶ岳平子遺跡の小発掘を試み，「小礫磧状をなした黒耀石を材料として打割ったもの非常に豊富，従って自然礫面を残した細石核が多数採集されている。甘藷麦の交互作の畑の表面観察では，土器の細片は未だ発見なく，細石核・細石刃及び石鏃等の採集状態よりして包含層は浅く，特に日本の細石器文化と石鏃出現の問題に関し注目すべき遺跡である」と報告している。

1965年には麻生優が細石器文化についての論考を発表している。氏は城ヶ岳平子遺跡の細石核にみられる特徴を「円錐形」と認識し，その編年的位置として半円錐形→円錐形→半舟底→舟底という時間軸のなかで円錐形の代表的遺跡とした。細石核の形態によるこの編年観に対しては反論も寄せられ(鈴木1971など）ており，その編年的位置や製作技法の解明は該期石器群の緊急課題であった。こうした問題に終止符を打つべく下川達彌が中心になって城ヶ岳平子遺跡の発掘調査が実施された。調査は開地遺跡における良好な細石器文化の検出という明確な問題意識のもとに実施され，多くの成果を上げたがなかでもその最大のものは，従来不明であった城ヶ岳平子遺跡の編年的位置を，土器との共伴や細石核製作技法が西海技法であることなどから縄文時代草創期と確定した（下川・立平1983）ことであろう。

小値賀では塚原博によって近年調査された属島の斑島の大坂（おおさこ）遺跡が重要である。層位的には若干問題を抱えるもの細石器石器群と木葉形の石槍・局部磨製石斧が共伴して出土しており，茶園遺跡ときわめて類似した組成を示している。細石核は楔形を呈している。木葉形の石槍は安山岩製で胴下半部に最大幅をもつ。局部磨製石斧は２点あり，１点は玄武岩製で茶園遺跡とほぼ同類で，福岡県門田遺跡に類例をもつ。こうした石槍と局部磨製石斧は「神子柴文化」を代表する石器と考えられてきたものである。九州地方の細石器文化の終末期の課題の一つに「神子柴文化」の波及という問題があることは周知の事実である（栗島1993，綿貫1992･93)。大坂遺跡はその問題に一石を投じる可能性をもっている。また文様は明らかではないが，土器片も数点出土しており，草創期の可能性が高い。胎土などからみてその気配が濃厚である。

中五島から福江島にかけての地域では，この時期の発掘調査は皆無である。下川達彌による集成があるのでそれを引用する（下川1979)。中通島では丸尾遺跡と赤尾遺跡のナイフ形石器･台形石器，細石器が報告されている。出土地点は明らかではないが若松島から基部裏面加工の柿崎型ナイフ形石器が出土している。福江島では鬼岳の北西にあたる福江市下大津地区の豆坂遺跡などから採集されたナイフ形石器や角錐状石器などが図示されている。これより早く豆坂遺跡の尖頭器は，賀川光夫によって紹介されている(賀川1971)。岐宿町関係では，寄神貝塚の周辺の津間田遺跡で採集された細石核が報告されている。また同町では寄神貝塚周辺遺跡の発掘調査が実施されている。攪乱が激しく良好な包含層は検出できなかった。出土した遺物としては，基部裏面加工のある二側辺加工のナイフ形石器と，横からの打面調整を施した細石核のほか石槍らしきものもある(小野1990)。このように中五島から下五島にかけての地域は，茶園遺跡の調査までは旧石器時代・縄文時代草創期のほとんど実態が明らかではなく，空白地帯であった。

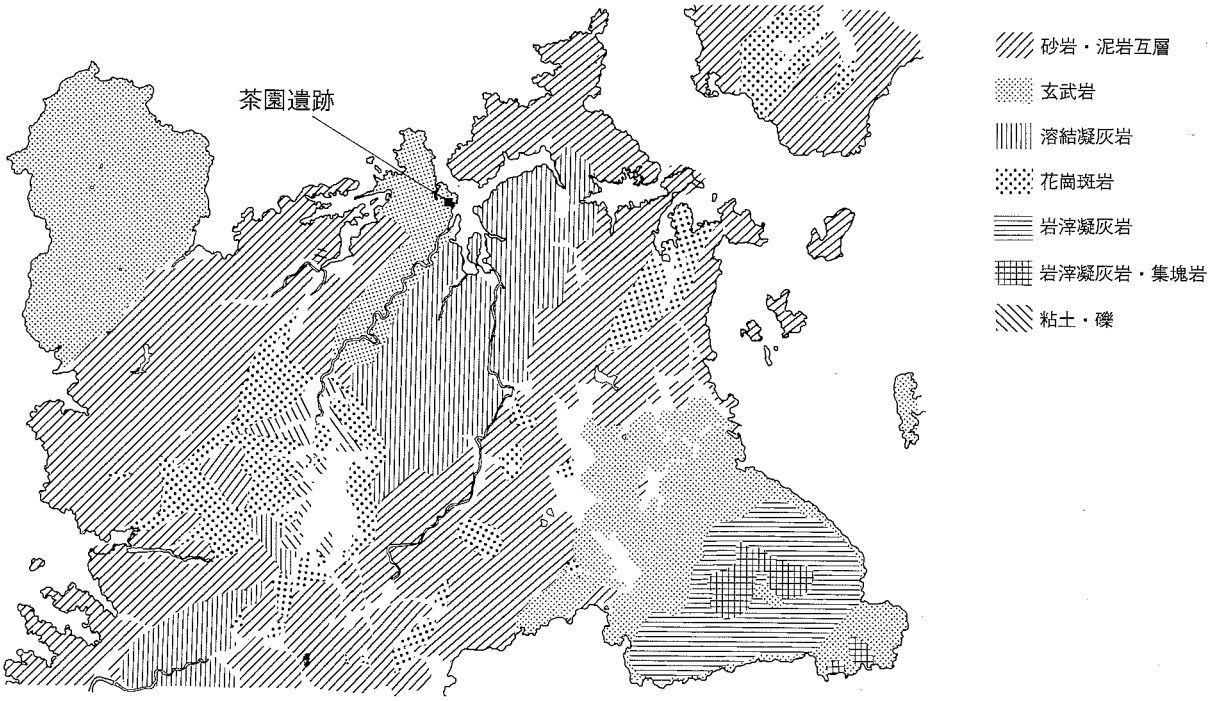
第２節　茶園遺跡の地理的・地形的環境

岐宿町の大部分は新第三紀の五島層群という堆積岩からなり，町南部の父ヶ岳（標高460.8m）を最高点にして起伏に富んでいる。ところが遺跡の所在する町の北部は様相を異にする。更新世に噴出した玄武岩の溶岩は，鰐川に沿って北東方向に細長く発達したのち，鰐川河口付近で向きを北に転じ，北端は海中に没している。全体的に低平な溶岩台地で，遺跡の周辺では標高10～20m程度である。この低平な溶岩台地は，樹枝状に浸食されて開析が進んでおり，小支谷になった低地の部分は谷奥からの湧水を利用して水田が営まれている。また台地の尾根筋および樹枝状の丘陵部は馬鈴薯等の畑作に利用されている。最近の年代測定によればこの溶岩の噴出年代は約70万年前というデータがある。

茶園遺跡は鰐川河口近くに立地しており，低平な台地の尾根部から南向きの緩斜面に遺跡は展開する。遺跡から現海岸線まではわずか数10mである。唐船之浦とよばれる奥深い入江が湾入しているが，遺跡の周辺では鰐川の沖積作用によって土砂が堆積しており，干潮時には相当広範囲に干潟が広がる。

茶園遺跡の立地を微視的に見ていくと，溶岩台地の縁辺が開析して小さい谷が形成されている。谷奥には小さな湧水があり，水田として利用されていたが，現況は湿地帯と化している。その谷筋の湿地帯に沿って南向きに細長い丘陵が展開する。遺跡はその丘陵から湿地帯に続く緩い斜面に立地する。

最終氷期最寒冷期（ＬＧＭ＝Last Glacial Maximum）には海水面は現在よりも100mあまり下がったとされている。－100mの等深線を結ぶ（第40図）と，五島列島は陸化し九州本島の西に突出する半島となる。海岸線は現海岸線から20km前後も前進し，現在の五島灘や玄界灘は広大な草原もしくは森林となっていたものと思われる。こうした居住域の拡大は当然狩猟民の活動場所の拡大と連動するはずであるから，現海面下には現在とは比較にならない数の遺跡が水没している可能性がある。こうしたことから見かけ上の分布論では意味をもたないのではと言う指摘もある。ところでＬＧＭ後の海水面上昇は13,000年前に始まり，6,000年頃に現海面とほぼ同様になるという。海面の上昇はほぼ等速度であり，1,000年あたり15mであったといわれる。五島列島と九州本土の海深をみると，平戸の南東方向で－70mほどの部分がもっとも深い。ここに海水が流入し海峡化する時期は，11,000年前ごろで，茶園遺跡第Ⅳ層石器群の終末期に該当しよう。九州本土から切り離された五島列島には南北に二つの



第３図　遺跡周辺の表層地質図

拠点遺跡が形成される。宇久島の城ヶ岳平子遺跡と岐宿の茶園遺跡である。石器群の内容や土器などからほぼ同時期の遺跡と判断できるものの，違いも顕著である。茶園遺跡が島嶼化したのちも西北九州本土と密接な関係を維持していたらしいのに対して，城ヶ岳平子遺跡は石器素材である黒曜石の安定供給が途絶したために在地系の小円礫を素材とする細石核を作り出すにいたったらしい。

第3節　層　　位

本遺跡の層序は次のとおりである。

第Ⅰ層：表土（畑作耕作土）。黒褐色を呈し，粘性をもたずパサパサする。親指大の小石を多く含み，植物の根が繁茂する。平均層厚10cm。

第Ⅱ層：茶褐色土層。旧耕作土で，平均層厚20～30cm程度。しまりがなく，乾燥するとぼろぼろに崩れる。縄文時代早期・後期の遺物に混じって近世陶磁器を含む。

第Ⅲ層：茶褐色土層。Ⅱ層に比べて粘性に富む。若干砂質を帯びるもののしまりはよい。乾燥するとブロック状に固まる。縄文時代早期（押型文土器）の包含層である。拳大程度の玄武岩風化礫を少量含む。

第Ⅲ'層：暗茶褐色粘質土層。黒色の粘土塊が混在するために色調が黒味を帯びる。この層の上半は縄文時代早期（押型文土器）の遺物を主体とするが，下半では細石器を混在している。下半は部分的にラミナ状に薄くはがれクラックが入るところもある。しかし上半と下半を明確に分離することは困難であった。

第Ⅳ層：明茶褐色粘質土層。粘性に富み，きわめて堅くしまった土層である。風化礫を若干含む。C－2区を中心に，調査区のほぼ全体に堆積している。縄文時代草創期の単純層であり，大量の木葉形の石槍と西海技法をもつ細石器群が共伴する。

第Ⅴ層：暗灰白色粘質土層。遺跡の東側のC－2区，C・D－3区側を中心ににほぼ水平に堆積している。土層の色調は暗灰白色を呈し，ガチガチの粘土層となり，部分的にクラックが見られる。土器を伴わない旧石器時代の細石器石器群の単純層である。

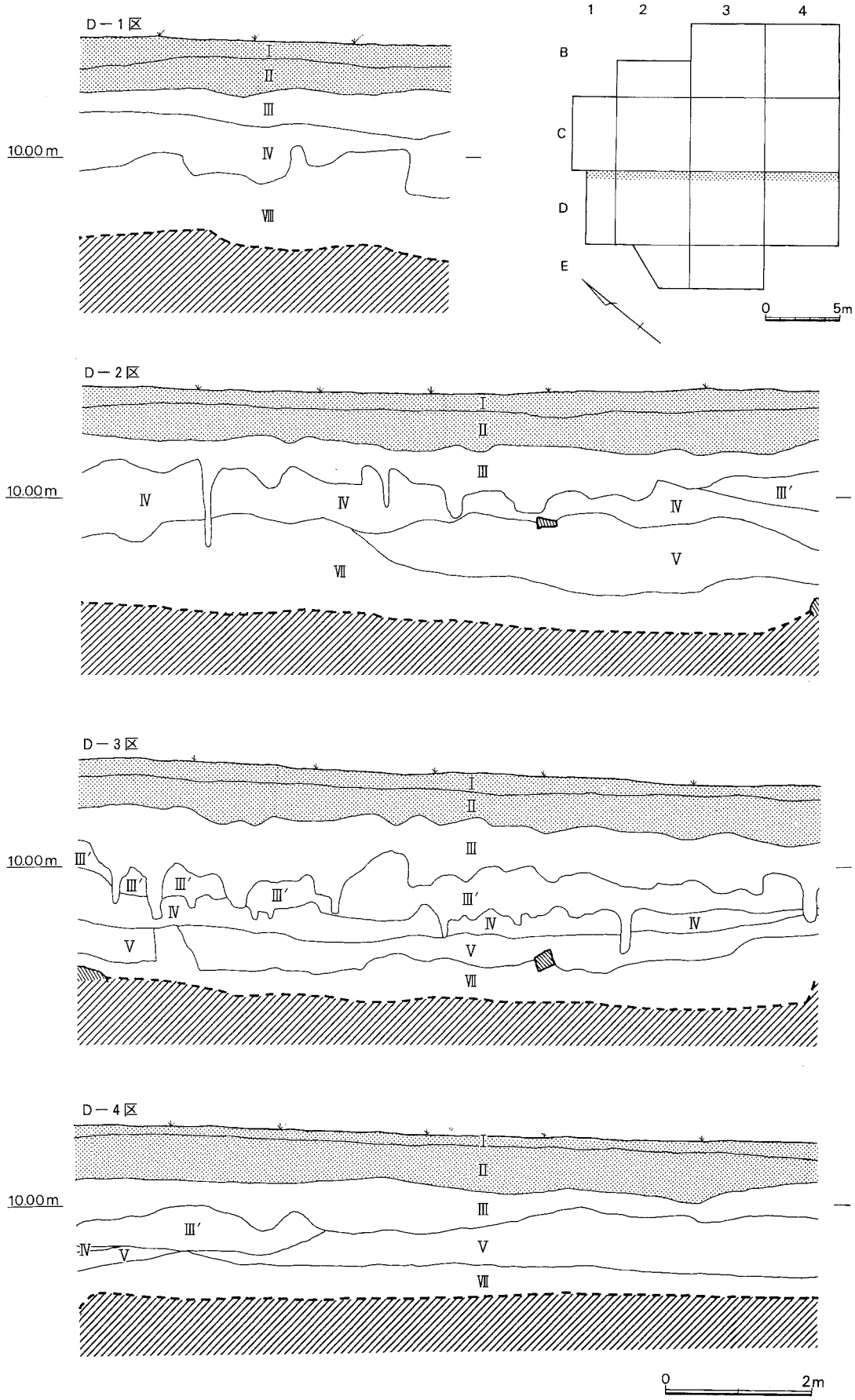
第Ⅵ層：茶褐色粘質土層。粘性が高くきわめてしまりがよい。D・E－3区に限定してみられる土層である。遺物としては細石器もみられるが，本来はナイフ形石器群の時期である。第Ⅴ層との境界に黄褐色の鉄分（もしくはマンガン）の沈着が見られる。

第Ⅶ層：地山。玄武岩の風化土層。玄武岩の巨礫を含む。

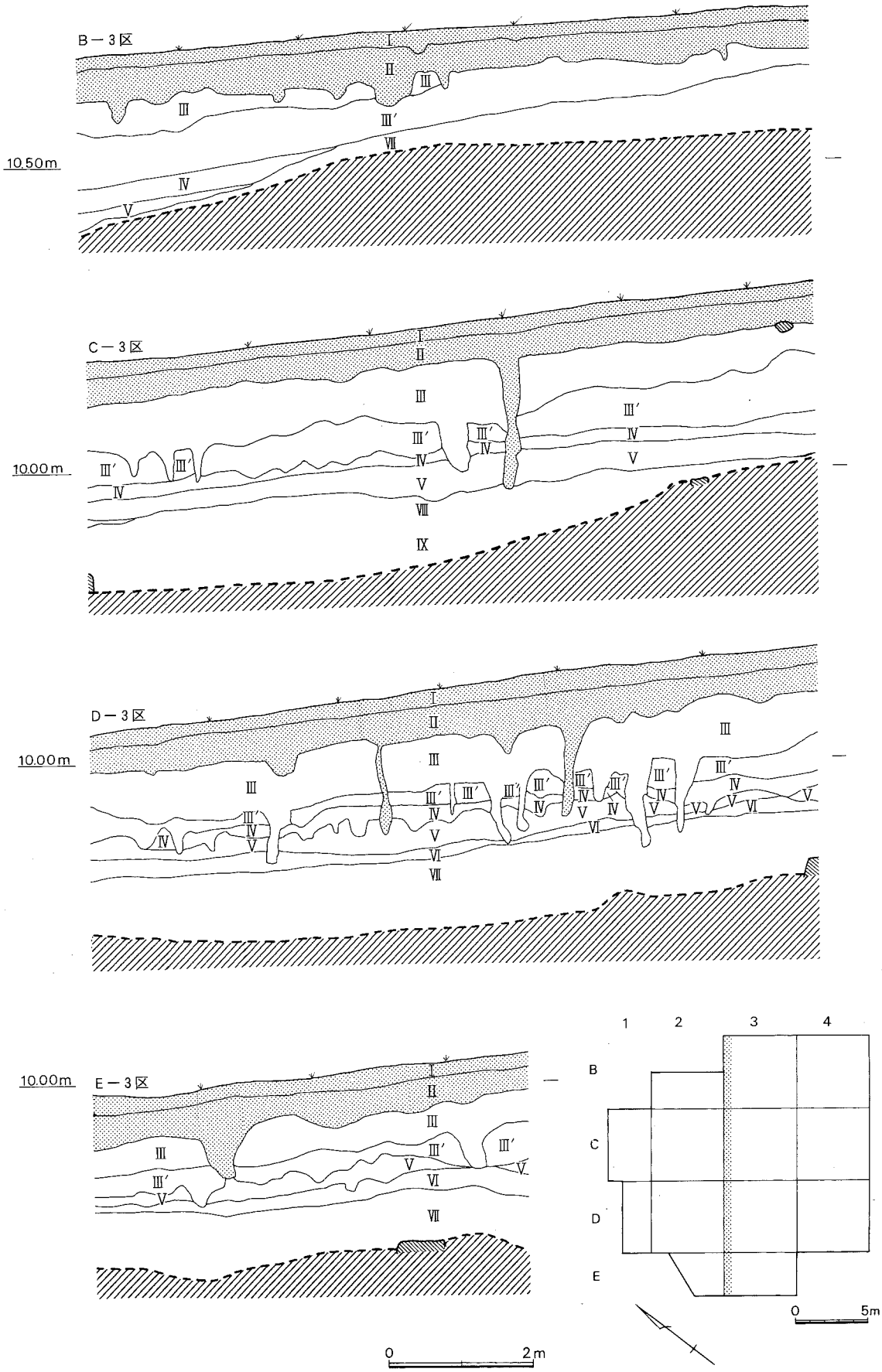
土層の傾斜と分布

遺跡は南面する緩傾斜の丘陵にあるために，土層の傾斜は東北から南西方向に向かって平均斜度度で南向きに標高を下げるが，D区中央部を境にしてその傾斜は緩くなる。北西から南東方向では，C－3区・D－3区付近では傾斜はなくなりほとんど水平である。

土層の傾斜からみて流れ込みがあったことは十分考えられるが，遺物には摩滅したものは少なく移動したとしてもそれほど長距離の移動は想定できない。それは遺跡周辺の地形景観からもいえることで，調査地点の北東側（A区側）には遺物包含層は存在していない。またその北側は小崖標高が高くなるがその地点は一段高くなっており傾斜の継続はない。また土層の状況からみても，B区の上半部には包含層は認められない。遺物の水平方向での移動は，遺物分布からみればそれほど大きい移動があったとは思えない。クラックや樹痕などによって生じる上下に移動した遺物は，取り上げ時に留意したつもりであるが，若干の取り上げミスは致し方ないところである。



第4図　D区北壁土層断面図



第5図　B・C・D・E区西壁土層断面図（S=1/100）

第4節　遺　　構

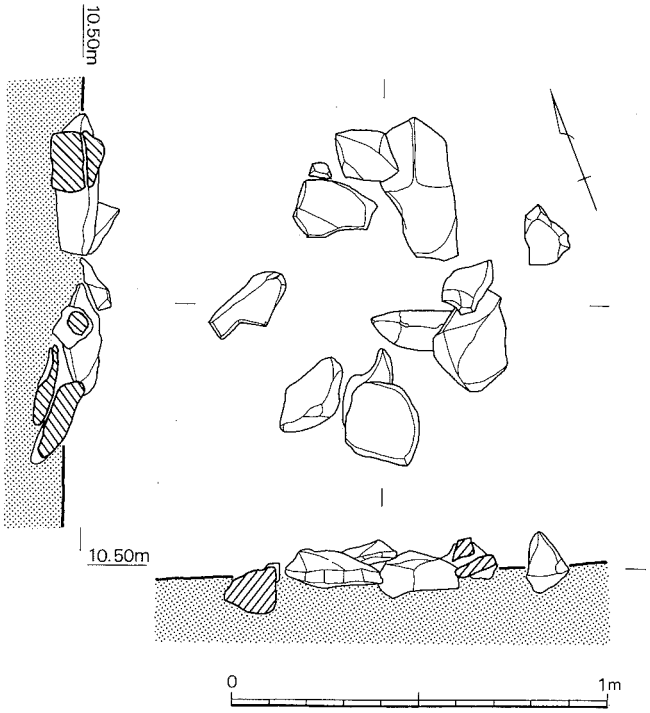
検出された遺構は第Ⅴ層中に構築された配石遺構と土壙である。第Ⅴ層中に構築されていることから旧石器時代終末の細石器石器群の遺構と考えられる。

(1)　配石遺構

配石遺構は，D－3区の北寄りの地点で検出した。その層準は第Ⅴ層のほぼ中位にあたる。使用された礫は地山の風化礫である玄武岩で，その形状や大きさは変位に富むが，大きいもので40×20cmから，小さいものでは15×10cmまである。基本的は座りのよい平らな面を下にして配置している。平面のプランは長軸が90cm，短軸75cmで，南西方向に開口するコの字状を呈している。掘り込みのラインは確認できず，また焼土や炭化物などは検出できなかった。また配石の内部の覆土はその周囲の土壌と比較して明瞭な差はなかった。こうしたことからここでは本遺構を配石遺構として扱うことにしたが，本来は配石炉跡と思われる。

この時期の配石炉跡の例として県内では，諫早市鷹野遺跡と宇久町城ヶ岳平古遺跡がある。前者は茶園遺跡とほぼ同時期の所産である。規模は茶園のものより大きく1.5×1.5m程度。使用された石材は砂岩の板状石と玄武岩礫である。礫は被熱を受けて赤変しており，また炭化物も検出されている（副島1986）。

城ヶ岳平子遺跡の炉跡は，縄文時代草創期のもので，平面プランは楕円形を呈し，長軸80cm短軸60cmで，20cm程度の掘り込みがなされている。土壙の底には平たい角礫が敷かれており，土壙の掘り込みの縁にほぼ円形に角礫を配していた。被熱を受けた痕跡のあるところから炉跡と評価している（下川・立平1983）。

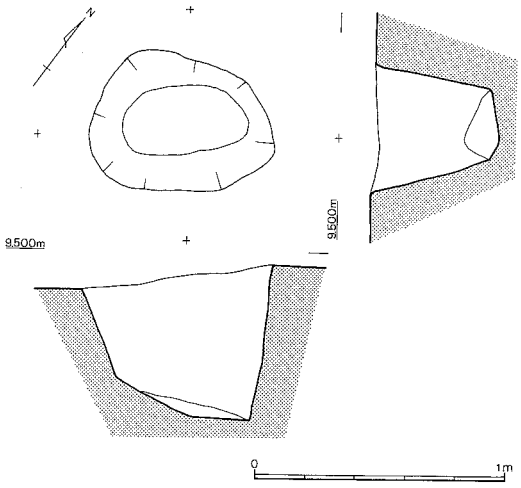


第6図　配石遺構

(2)　土　　壙

土壙はD－3区のほぼ中央部，配石遺構からは約2mほど離れた地点で検出した。掘り込み面は配石遺構とほぼ同じと思われ，時期的にも同時期とみて大過ないものと思われる。その規模は上面で長径75cm 短径50cmの若干いびつな楕円形を呈する。深さは40cmほどで底部は長楕円形である。堀り方のラインは覆土が白みを帯びた土壌であったために識別は容易であった。覆土の白い土壌はきわめて粘性に富み，有機物らしい黒い粒子も混ざっていた。

土壙内部から出土した遺物は，スポールが1点と砕片が3点である。



第7図　土　　壙

第5節　遺物分布

第8図は第VI層から第IV層までの全遺物の分布図である。遺物は満遍なく出土するわけではなく，もっとも遺物が集中するのはC－2区で，全遺物の約半数が出土する。C－3区，D－2区，D－3区，E－2区でも遺物の出土は多いものの，場所によっては空白地帯も生じており，遺物の偏在性も指摘できる。遺物の出土する範囲は，東側はB－2・3区およびC－4区でほぼ包含層自体がなくなるところからほぼ東限と考えられる。南限は調査区の関係でE－2・3区が拡張できなったために確認することができなかった。しかし幅1.5m程度の道路を挟んで湿地帯（水田）になっており標高も段差がつくことから，遺跡の範囲はそれほど広がることはないものと思われる。同じように西限および北限も包含層の追求はほぼ確認しており，これ以上広がることは考えられない。こうしたことから判断して，ブロックの大部分は発掘したものと思量される。

次に遺物の垂直分布をみてみる。遺物の出土量が多く，土層が傾斜していることなどを考慮して，網掛け部分のみの垂直分布を示した。なお垂直分布は距離を2倍にして強調して表現している。

東西方向（西側が標高が下がる）ではC－3区からD－3区の中央付近までは土層の傾斜が約11度でかなりの角度をもっており，しかも包含層の厚さも第V層・第IV層あわせて30cm以上ある。この垂直分布に明確な線を入れることはできないが，おおよその上下関係はつかめる。遺物の量からすればこの部分では第V層が第IV層を上回ることは層位ごとの遺物分布図をみれば了承されよう。ついで，D－3区中央部らから西側のE－3区にかけては，土層の傾斜が約6度と東側の半分程度まで緩やかになる。遺物包含層は若干薄くなり，第VI層と第V層あわせて20cm程度であるが，垂直分布をみると遺物の傾斜の違いと層順の上下からある程度の分層が可能である。

南北方向をみてみると，C－2区では第IV層の傾斜は約9度でかなりの傾きを有している。層厚は約25cm程度であるが，遺物の量は多い。第V層とは明確に分離することは難しいが，深度的に下位に分布するものの傾斜角が約2度とかなり水平に近くなることからみてその違いは明らかであろう。一方C－3区は，がらりと様相が変化する。遺物の傾斜角は約2度弱で，ほとんど水平堆積と表現できるほどである。包含層は第IV層と第V層が認められ，層の厚さは50cm程度である。垂直分布の傾斜角度が大きく変わり第V層がほぼ水平に堆積している。

第3章　石器群の変遷

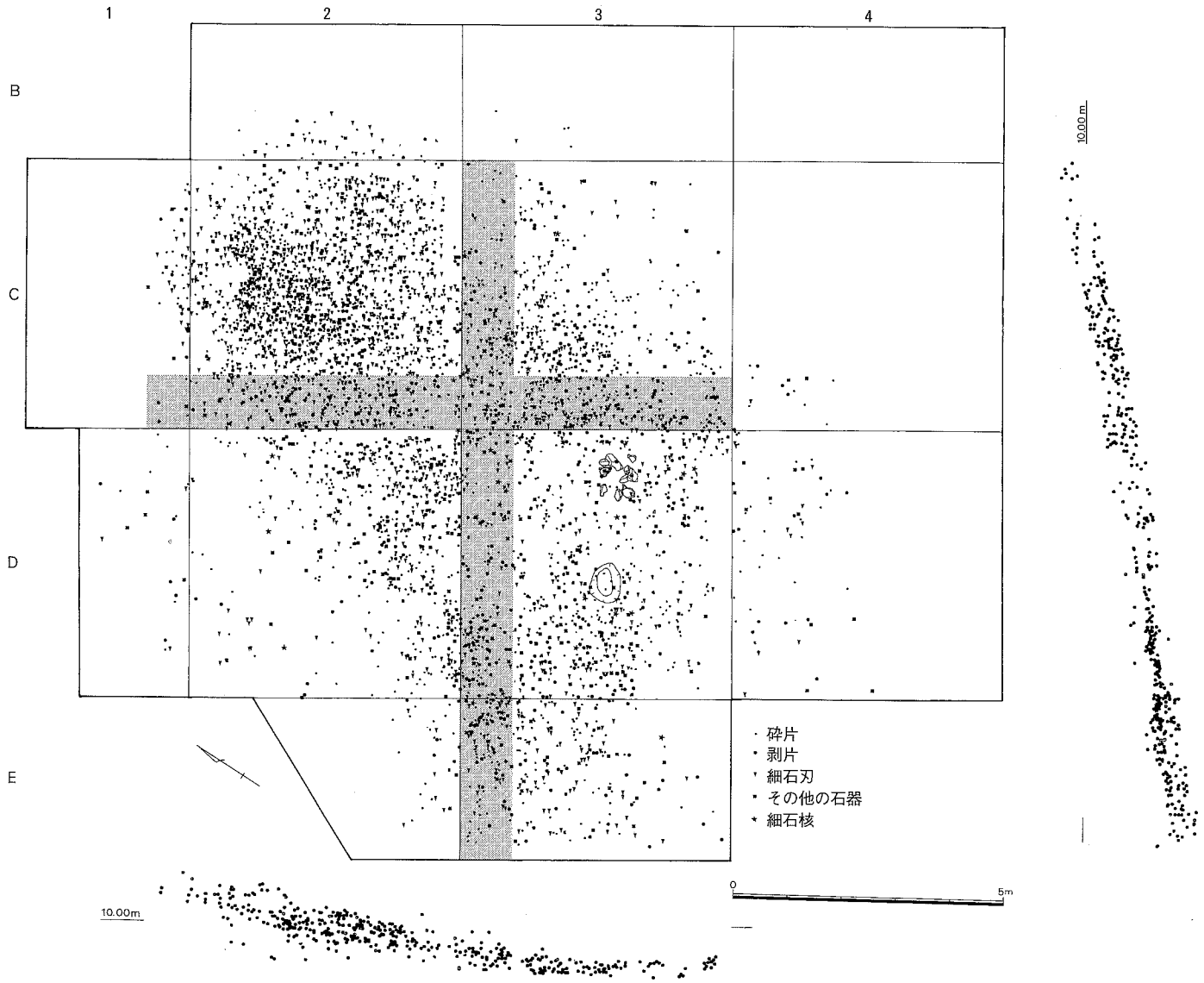
第1節　第VI層石器群

(1)　遺物分布

第VI層はD－2，D－3，E－2，E－3区に堆積した土層である。その層厚は薄く，それ故に遺物の出土量もきわめて少ない。その帰属層準はナイフ形石器群に当てることができる。平面分布をみると，D－3区を中心として一つのブロックを認識できる。ブロックの規模は径3×4mの楕円形で，遺物の分布はやや密な部分と散漫な部分とがみられる。もう一つのブロックは，E－3区にある。このブロックは西南側へ広がることが予想される。

当該時期の所産と考えられるナイフ形石器など，型式学的に弁別可能な石器は，第VI層の堆積していないC－2区など上層から出土している。第VI層は本来全体的に堆積していたものが，流出して標高の低いD・E区に堆積したことも考えられよう。

ナイフ形石器などの数量の貧弱さや，石器製作に係わる石核や剥片類もほとんど出土していないことなどからみて，この石器群は時期にはそれほど長期に安定した居住が営まれたとは考えにくい。少なくとも拠点になるような遺跡とは評価できない。

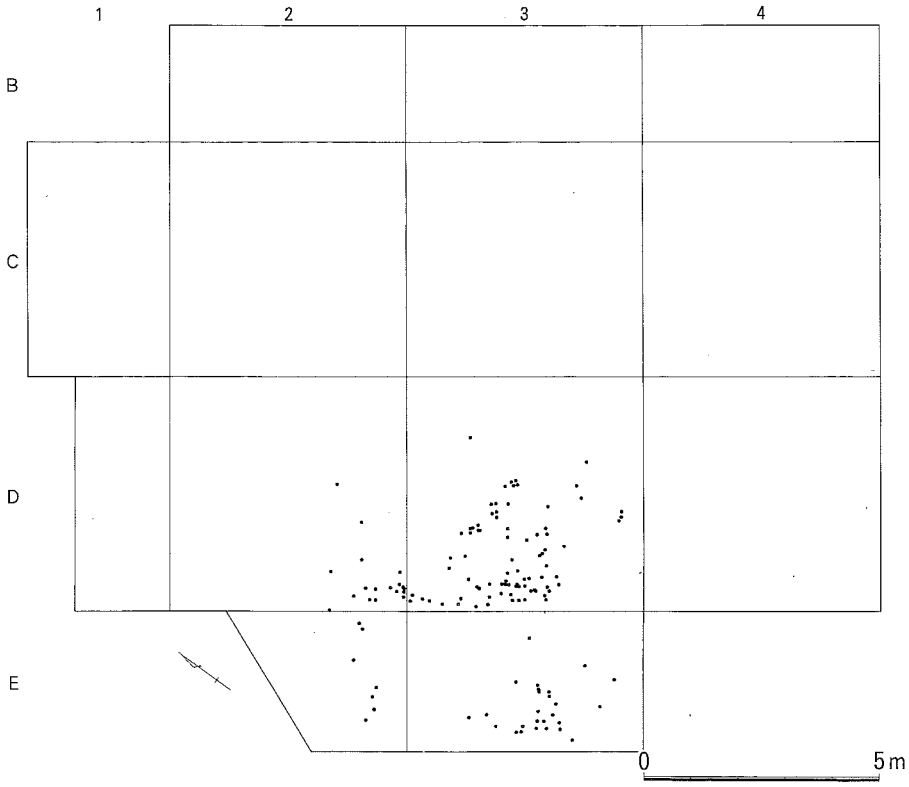


第8図　調査区全体の遺物分布

(2) 石器群の組成

①ナイフ形石器（1～9）

1は縦長剝片を素材とするが，下半部を欠損する。2は縦長剝片を素材とする二側辺加工のナイフ形石器。基部裏面加工が認められるところから柿崎型ナイフ形石器であろう。3は横長剝片を素材とし，一側辺と基部に刃潰し加工が施されたナイフ形石器。基部裏面加工が施され，刃部には使用痕と思われる微細剝離がみられる。4～8は今峠型ナイフ形石器である。4は打点部が除去されており打面調整は不明である。調整加工は左側辺に集中し，刃部にリタッチがみられる。5は打点部が除去されているために打面調整は看取できないが，整形加工が基部左側に施されている。6は黄色の流理の入った黒曜石を素材とし，粗い打面調整を施している。打点がほぼ真横にあり剝片は横長である。整形加工は左右の基部付近に集中して施されるが左は細かく右は粗く大きい剝離である。7は不純物を多く含む灰白色黒曜石を素材とする。打点をほぼ真横にとる。細調整によって基部を作り出している。8は黄色の流理が卓越する漆黒黒曜石を素材とする。9は横長の分厚い剝片を素材とし，二側辺に刃潰し加工が施された小形の切出状のナイフ形石器である。



第9図　第Ⅵ層の遺物分布

②台形石器（10～12，14）

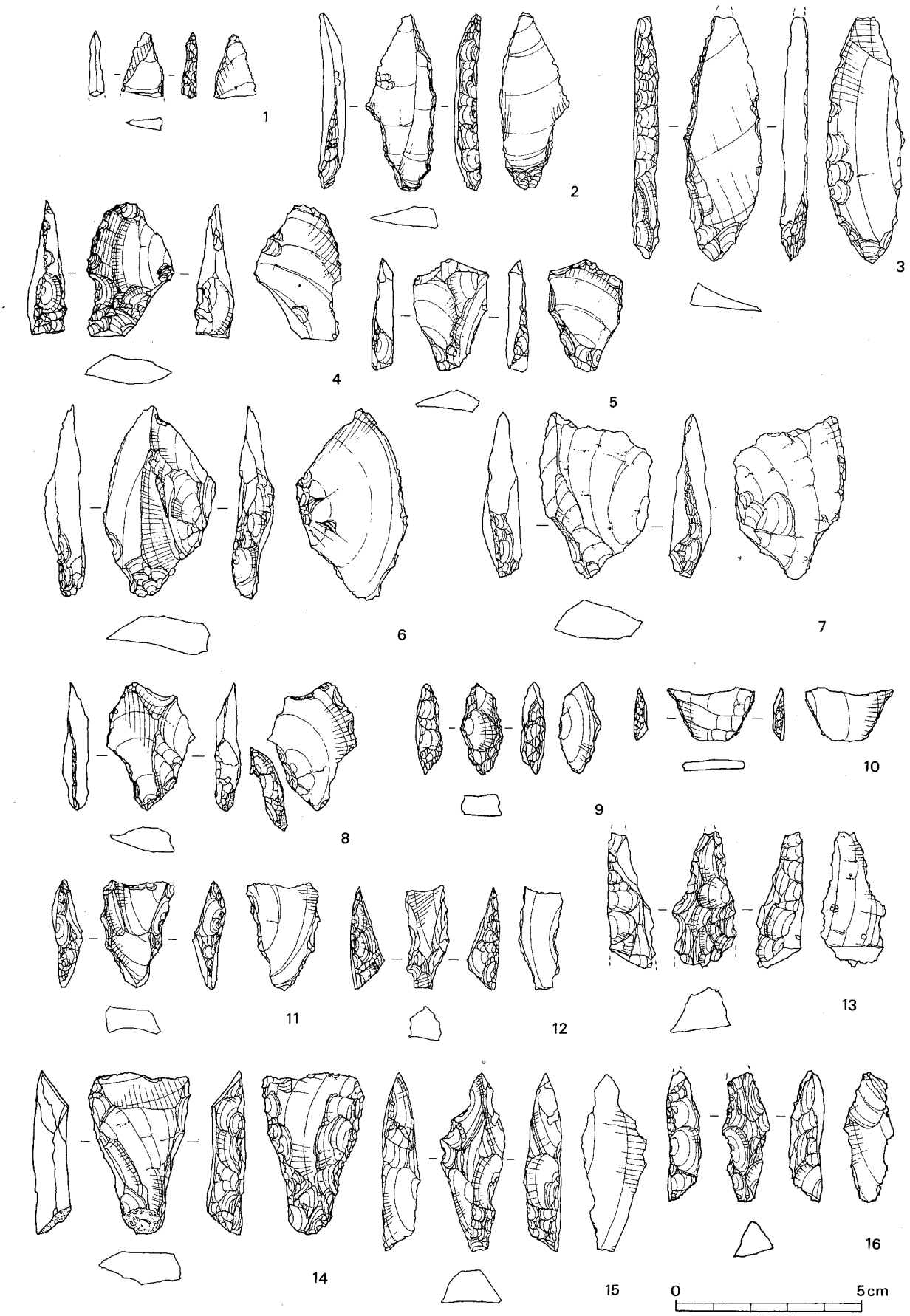
10は百花台型台形石器。縦長剝片を素材とし，両側辺に刃潰し加工を施し，刃部を角状に突出させる。平面形は逆台形状である。百花台型としては大形である。11は刃部に小剝離痕がみられ，二側辺に丁寧な刃潰し加工が施される。12は分厚い剝片を素材とし，二側辺に丁寧な刃潰し加工が施される。幅が狭く刃部も短い。14は大形の台形石器で，基部には自然面を残す。側辺は片方が急斜な刃潰し加工，他方は平坦剝離である。

③角錐状石器（13・15・16）

13は横長剝片を素材とする角錐状石器で，先端部と基部を欠損する。断面形は台形を呈し，二側辺に急斜な粗い刃潰し加工が施されている。裏面は主要剝離面である。15は横長剝片を素材とする。粗い調整剝離が施されている。16は横長剝片を素材とする小形の角錐状石器である。

④尖頭器（17）

先端部にみられる調整は掻・削器類の刃部と類似しており，その可能性も否定できないが，ここでは先端部を意識した加工から尖頭器として判断した。牟田系黒曜石を素材とし基部に自然面を有する。尖頭器とすれば未製品であろう。



第10図　第Ⅵ層石器群の石器①

⑤掻器（18・19）

18はやや大きな弧を描く抉入掻器。抉入の刃部は一見刃潰し加工的であり，それと対峙する側は丁寧な調整剥離によって尖頭部を作り出すが，その先端部は未加工である。複数の機能を有する石器であろう。19はやや縦長の剥片の末端部を利用したもので，抉入気味である。

⑥削器（20）

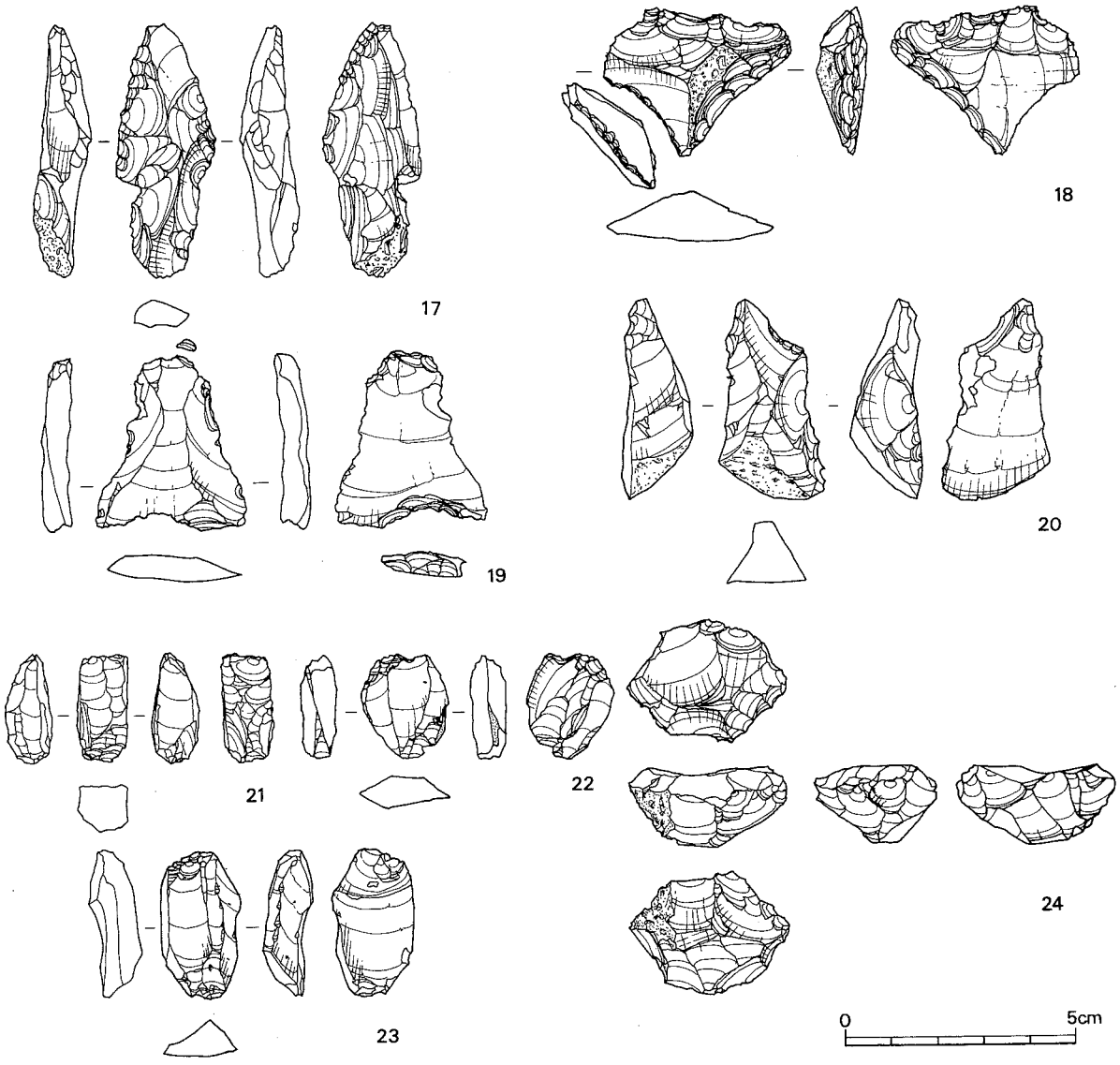
20は分厚い剥片を使用した縦形削器でその調整は粗い。

⑦楔形石器（21～23）

21は分厚い剥片を素材とし，上下端に鱗状剥離が入る。側面観は上端が薄くなり楔状を呈する。両側辺は縦方向の剥離によって截断されている。22・23も分厚い縦長剥片を素材とする。表面の上下に微細な剥離がみられる。

⑧石核（24）

打面は不整形ながらも求心的な調整でなされており，ほぼ平坦である。剥片の剥出は，下端に向けて行われ，側面観は一見舟底状を呈している。



第11図　第Ⅵ層石器群の石器②

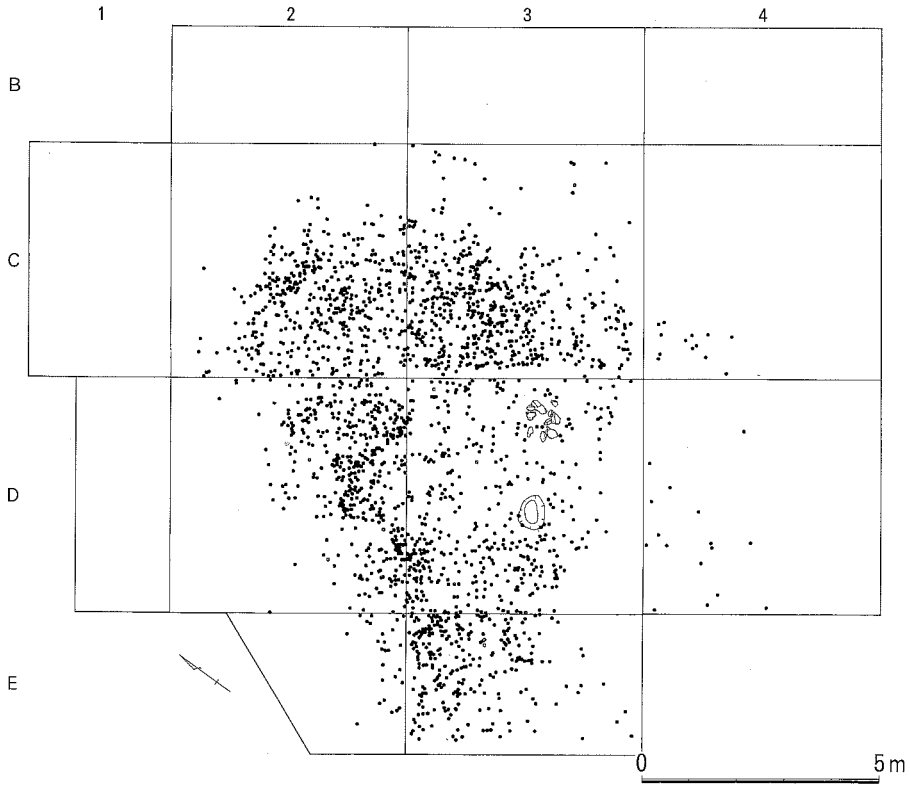
番号	区	遺物番号	層位	標高(m)	器種	石材	重さ(g)	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	備考
1	C3	606	Ⅴ	9.62	ナイフ形石器	淀姫針尾系黒曜石	0.62	1.71	1.16	4.20	先端部
2	D2	Ⅴ層表採	Ⅳ		ナイフ形石器	牟田系黒曜石	4.80	4.76	1.85	0.62	
3	D4	70	Ⅴ	9.70	ナイフ形石器	淀姫針尾系黒曜石	8.79	6.60	2.02	0.63	横長
4	D3	708	Ⅵ	9.03	ナイフ形石器	牟田系黒曜石	6.11	3.61	2.38	0.94	今峠型
5	C3	240	Ⅴ	9.77	ナイフ形石器	牟田系黒曜石	2.86	3.07	2.05	0.63	今峠型
6	D2	415	Ⅳ	9.60	ナイフ形石器	牟田系黒曜石	11.61	5.21	3.10	0.90	今峠型
7	C3	608	Ⅴ	9.66	ナイフ形石器	淀姫針尾系黒曜石	11.24	4.58	3.03	0.95	今峠型
8	E3	156	Ⅵ	9.15	ナイフ形石器	牟田系黒曜石	3.20	3.45	2.42	0.59	今峠型
9	D2	表採			ナイフ形石器	淀姫針尾系黒曜石	1.79	2.48	1.12	0.61	
10	C3	676	Ⅳ	10.05	台形石器	淀姫針尾系黒曜石	0.85	1.43	2.36	0.26	百花台型
11	D2	646	Ⅴ	9.45	台形石器	牟田系黒曜石	3.17	2.92	1.89	0.68	
12	E2	1	Ⅴ	9.48	台形石器	淀姫針尾系黒曜石	2.27	2.78	1.16	0.86	分厚い・刃部短い
13	C2	1605	Ⅳ	10.25	角錐状石器	淀姫針尾系黒曜石	5.92	3.83	1.86	1.05	折損
14	D3	14	Ⅵ	9.68	台形石器	淀姫針尾系黒曜石	10.94	4.43	2.69	0.85	分厚い・礫面をもつ
15	D2	674	Ⅵ	9.32	角錐状石器	淀姫針尾系黒曜石	5.58	4.82	1.74	0.89	
16	D2	表採			角錐状石器	淀姫針尾系黒曜石	3.11	3.53	1.29	0.85	
17	D4	43	Ⅳ	9.56	尖頭器	牟田系黒曜石	8.72	5.37	2.02	0.97	
18	E3	243	Ⅵ	9.10	スクレイパー	淀姫針尾系黒曜石	8.20	4.03	3.23	1.03	抉入
19	E3	293	Ⅵ	9.13	スクレイパー	淀姫針尾系黒曜石	5.47	3.68	3.21	0.50	抉入
20	E3	285	Ⅵ	9.13	スクレイパー	淀姫針尾系黒曜石	8.92	4.35	2.22	1.25	礫面
21	D3	546	Ⅵ	9.33	楔形石器	淀姫針尾系黒曜石	3.10	2.38	0.99	1.14	
22	E3	136	Ⅵ	9.29	楔形石器	淀姫針尾系黒曜石	4.14	3.12	1.72	0.88	
23	E3	174	Ⅵ	9.13	楔形石器	淀姫針尾系黒曜石	2.62	2.17	1.75	0.74	
24	E3	110	Ⅵ	9.30	石核	淀姫針尾系黒曜石	12.12	3.45	2.70	1.73	礫面

第１表　遺物計測表①

第２節　第Ⅴ層石器群（細石器石器群）

(1)　遺物分布

第Ⅴ層石器群は，茶園型細石核と呼称する形状が扁平な細石核を主体とする石器群で，土器出現以前の旧石器時代終末期の細石器石器群として位置付けられる。第12図がその平面分布である。1900点を超える遺物が出土しており，おおよそ２つのブロックに認識できよう。一つのブロックはC－２区の南側，C－３区の西側，D－２区の東側とD－３区にかけて分布する径約６ｍの大きな遺物集中範囲である。ほぼ満遍なく遺物が出土する。このブロックの南端には配石遺構がある。この周辺の遺物密度は同遺物集中範囲の他の地点よりも密集度が低い傾向にある。このブロックには細石核が18点含まれる。その他ブランクや打面再生剥片・打面調整剥片なども大量に出土しており，細石刃製作に係わる作業が営まれると同時に，配石を介した生活空間が想定できよう。もう一つのブロックは，D－３区の西側からE－２区にかけて分布する。径径５ｍほどで，中



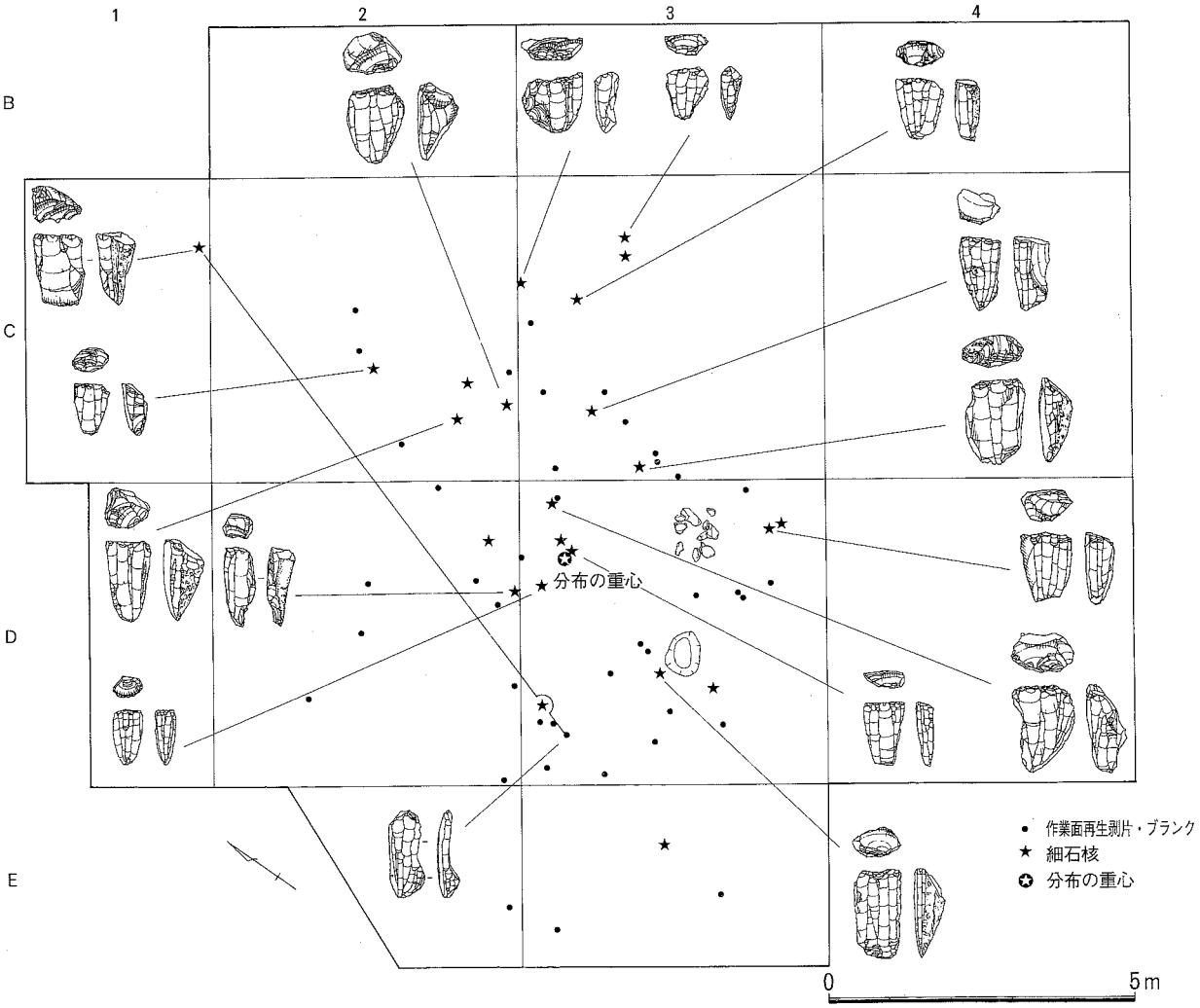
第12図　第Ⅴ層の遺物分布

央部に遺物が密集し，外延部は希薄になる傾向がある。このブロックの北端には土壙が掘り込まれている。その用途は明らかではないが，生活関連の装備である可能性が高いこのブロックの細石核は3点にすぎず，前者とは量的には比較にならない。両者のブロックの性格の違いの分析は，それぞれのブロックの石器群の組成の違い等から検討すべき課題ではあるが，今回は時間的にそこまでできなかった。後日稿を改めて検討したい。

(2) 主要石器の分布

第13図に細石核を中心としてブランク・打面再生剥片・作業面再生剥片など細石器に関連する遺物の分布図を示した。白抜きの☆印の位置が，これらの遺物の重心になる。D－3区の左手上部と表現しておく。この分布図の目的は，今回の調査で検出した茶園型細石核と称することになる扁平細石核の一群が，上層の細石器と区分できることを論証するためである。

第21図の第Ⅳ層石器群の細石器関係遺物分布図および第22図の第Ⅳ層石器群の石槍などの分布図と比較すると，その差はより一層顕著となる。主要石器の分布域がC－2区を離れて，より周辺に拡散していく傾向から，第Ⅳ層石器群の分布と一部では重複するものの上下関係などを加味すれば，両者を異なる分布と読みとることができよう。第Ⅳ層石器群の稿でもう一度検証する。



第13図　第Ⅴ層の細石器関係遺物分布

(3) 石器の組成

①細石刃

第Ⅴ層石器群では総数420点の細石刃が出土している。ここでは計測できた402点について分析した。部位別では，完形36点，頭部135点，中間部170点，先端部61点である。総計に占める各部位の比率は完形9.0%，頭部33.6%，中間部42.3%，先端部15.2%となり，中間部と頭部で約４分の３を占める。使用された石材としては黒曜石に限定され，青灰色の淀姫・針尾系黒曜石が375点（93.3%）を占め，漆黒色の牟田系黒曜石は27点（6.7%）に過ぎず，その割合は１：13.9である。こうした傾向は細石刃を作り出す細石核にもいえることで，その割合は牟田系黒曜石：淀姫・針尾系黒曜石１：13となりほぼ同一の数字であろう。なお計測値はそれぞれの部位の最大を求めた。

完形（**25～28，50～52**）

完形は36点で，牟田系黒曜石３点，淀姫・針尾系黒曜石33点でその比率は１：11である。長さの範囲は33.9㎜～12.9㎜にあり，平均値は22.4㎜である。頻度は平均値を頂点とするが，ばらつきが大きい。３㎝を超える長めのものも数点ある。幅は12.2㎜～3.9㎜の範囲にあり，平均7.2㎜である。厚さは5.4㎜～1.2㎜の範囲にあり，平均2.7㎜である。重量は0.94ｇ～0.11ｇの範囲にあり，平均0.36ｇである。

頭部調整が施されたものが多く，側面は若干弧を描く。稜線は１ないし２本が大半を占めるが，なかには３本のものもある。

頭部（**29～45，69～75**）

頭部は135点で，牟田系黒曜石11点，淀姫・針尾系黒曜石124点でその比率は１：11.3である。長さの範囲は31.2㎜～9.0㎜にあり，平均値は17.1㎜である。頻度のピークは13㎜と17㎜の二つあるが，ほぼ正規分布を示す。完形品の最大長に近いものもあるが，それは先端部をわずかに折ったものを頭部に含めたためである。幅は13.6㎜～4.0㎜，平均7.4㎜である。厚さは6.1㎜～1.1㎜の範囲にあり，平均2.1㎜である。重量は0.83ｇ～0.04ｇの範囲にあり，平均0.28ｇである。

作業面調整が入念になされた結果，打点部が丸みを帯びる頭部調整がみられるものが多い。側面観はほぼ直線に近くなる。稜線は完形品と同じ傾向であるが，４本もつものもあった。

中間部（**46～49，53～68**）

中間部は170点で，牟田系黒曜石９点，淀姫・針尾系黒曜石161点でその比率は１：17.9である。長さの範囲は33.9㎜～6.8㎜にあり，平均値は15.2㎜である。頻度のピークを12㎜と15㎜の二つあるが，10㎜から17㎜のもので７割を超えており斉一性が高い。幅は14.3㎜～3.7㎜，平均7.2㎜である。厚さは9.0㎜～0.7㎜の範囲にあり，平均2.1㎜である。重量は1.50ｇ～0.01ｇの範囲にあり，平均0.26ｇである。

中間部は使用を前提に折り取られていると思われ，斉一性が要求される部位である。データ的にも裏付けられる結果が出ている。

先端部（**76～82**）

先端は61点で，牟田系黒曜石４点，淀姫・針尾系黒曜石57点でその比率は１：14.3である。長さの範囲は27.6㎜～9.1㎜にあり，平均値は16.3㎜である。先端部の長さの頻度をばらつきが大きく斉一性がない。幅は10.2㎜～4.1㎜，平均6.4㎜である。厚さは3.7㎜～0.9㎜の範囲にあり，平均2.0㎜である。重量は0.58ｇ～0.04ｇの範囲にあり，平均0.20ｇｇである。

先端部は量的に少なく，厚さの差が大きいため側面観の変異も大きい部位である。

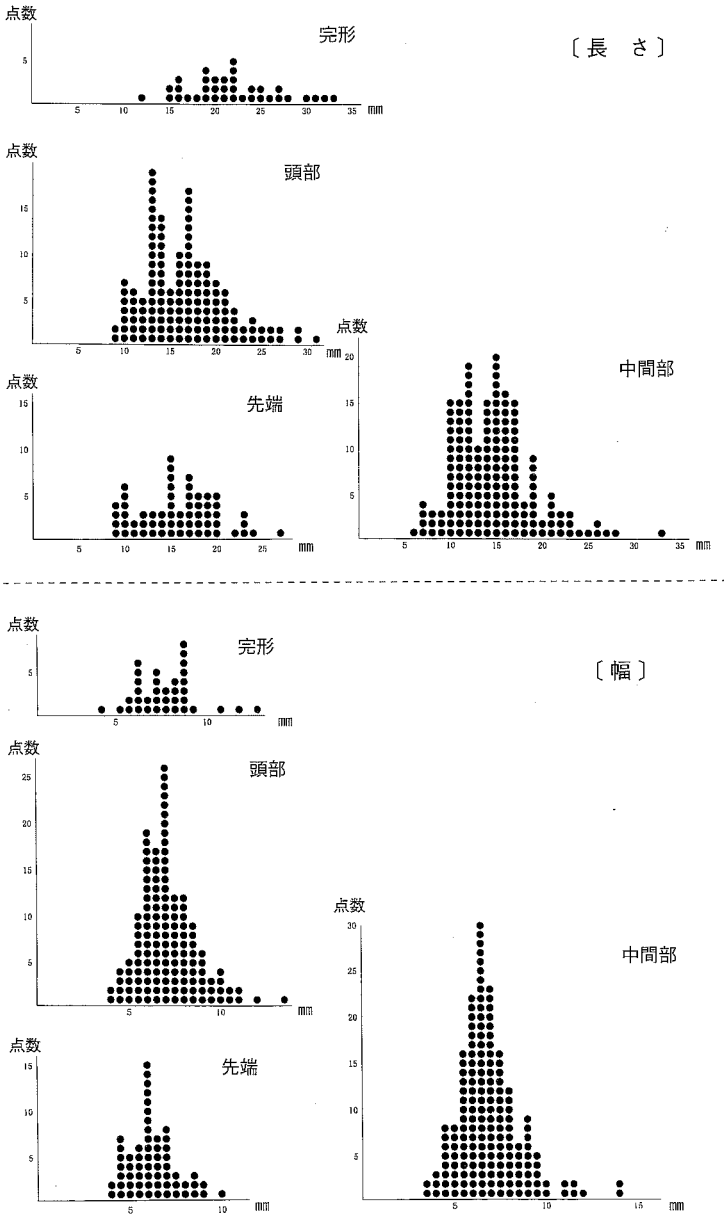
第Ⅴ層石器群の細石刃は，織笠の集成した日本の細石刃の姿に照らしてみる（織笠 1993）と，完形品の長さは，土器出現以前の代表的な遺跡である長野県矢出川遺跡よりも大形で，静岡県休場遺跡より小形である。九州地方では土器出現以前の良好な遺跡がなく比較することはできない。縄文時代草創期の泉福寺洞穴10Ｃ層（豆粒文土器），同８Ｃ層（隆起線文土器）よりも長い。幅は，どの部位をみても10㎜を超える幅広のものがある。細石刃剥離作業時に偶然剥出された可能性と，作業面再生の可能性を指摘しておきたい。

細石刃は使用方法としては，木製や骨角などの軸（シャフト）に溝を彫り，そこに埋め込むといわれている。そのために細石刃の側面の直線化が意図され，折断という作業によって規格化されたとされる（杉原19??）。茶園遺跡第Ⅴ層石器群の細石刃は，折断によって分割されたことは確実であるが，いくつかの問題点が指摘される。

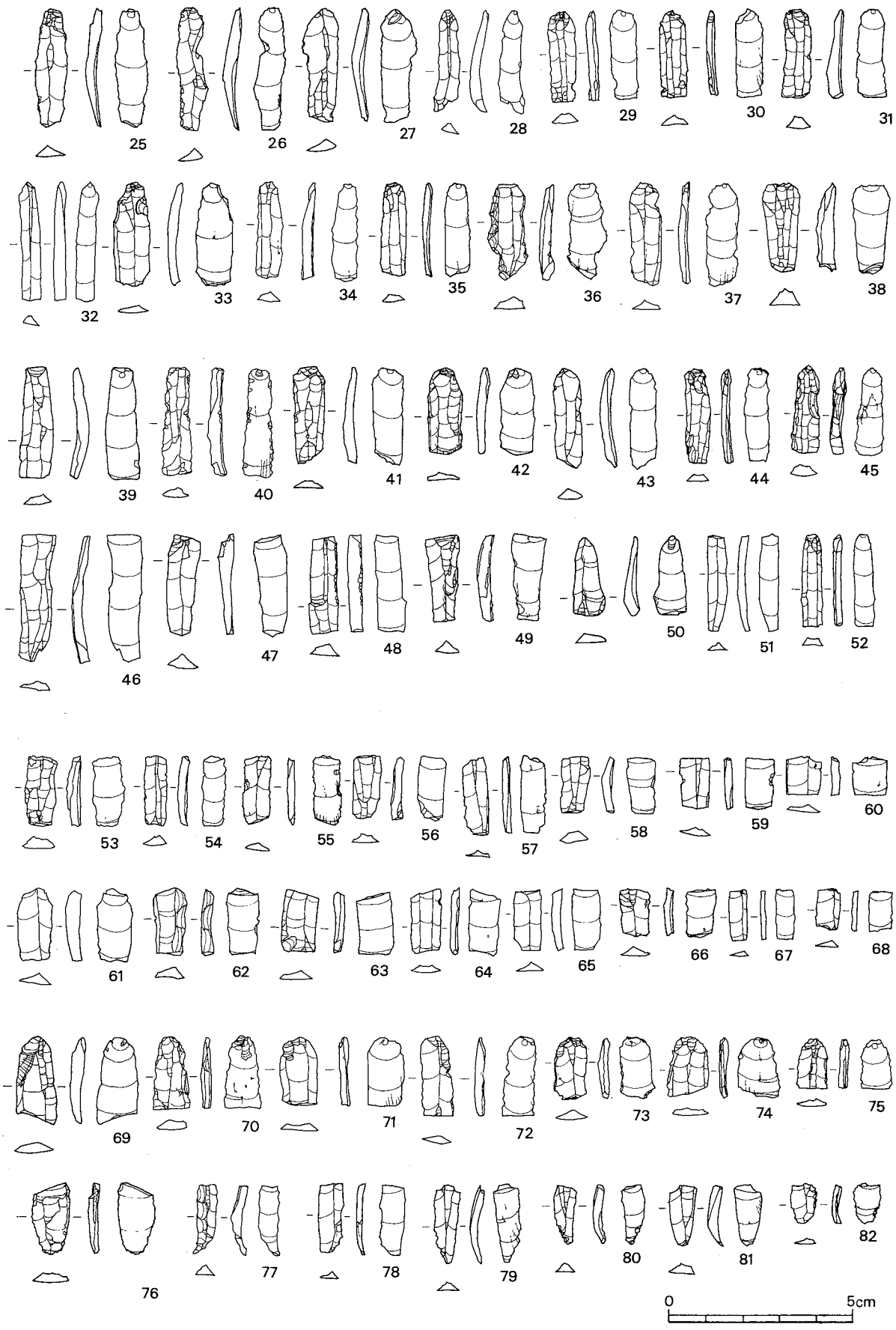
一つは先端部の問題である。先端部はもっとも変異の幅の大きい部位といえよう。「しの字」状を呈することも多く，末端部が肥厚することも多い。当然シャフト装着には難があるといえる。とすれば出土する先端部の量は，他の部位に比べてあまりにも少なすぎる感は拭えない。サンプリングエラーの可能性を考慮しても，あまりにも少なすぎるというのが偽らざるところである。本来は中間部と匹敵するか，それを凌駕するだけの量が期待できるにもかかわらず，先端部がこれほど少ないということの意味は奈辺にあるのか。今後の重要な検討課題である。

もう一点は，幅が１㎝を超える細石刃の存在である。１㎝という数字は細石刃と小石刃とをわける目安とされてきた。幅の極端に大きい細石刃を剥出することが可能な石核は，出土品でみる限り通有の細石核しかないことは自明である。偶発的に幅広の細石刃が剥離された考えるのが妥当な線であろうか。ナイフ形石器はその終末期に小形化する傾向が指摘されており，石核の小形化も同時に進行するらしい。細石器のナイフ形石器からの自生説の根拠ともなる点でもあり，今後慎重な分析が必要であろう。

細石刃の分析では折断面の観察も欠かせないが，残念ながら淀姫・針尾系黒曜石では風化のために観察できなかったことをお断りしておく。



第14図　第Ⅴ層石器群の細石刃長幅グラフ



第15図　第Ⅴ層石器群の細石刃

②細石核

第Ⅴ層石器群の細石核は，大きく２つに分類できる。まず第一のグループはいわゆる扁平細石核と呼ばれている一群で，背面の状態により２つに小区分できる。第二のグループは従来野岳・休場型細石核とよばれている稜柱型の一群である。

Ⅰ類：扁平細石核 ─┬─ａ類：茶園型細石核
　　└─ｂ類：位牌塔型細石核

Ⅱ類：稜柱型細石核 ────────野岳・休場型細石核

Ⅰａ類（**83**～**93**）

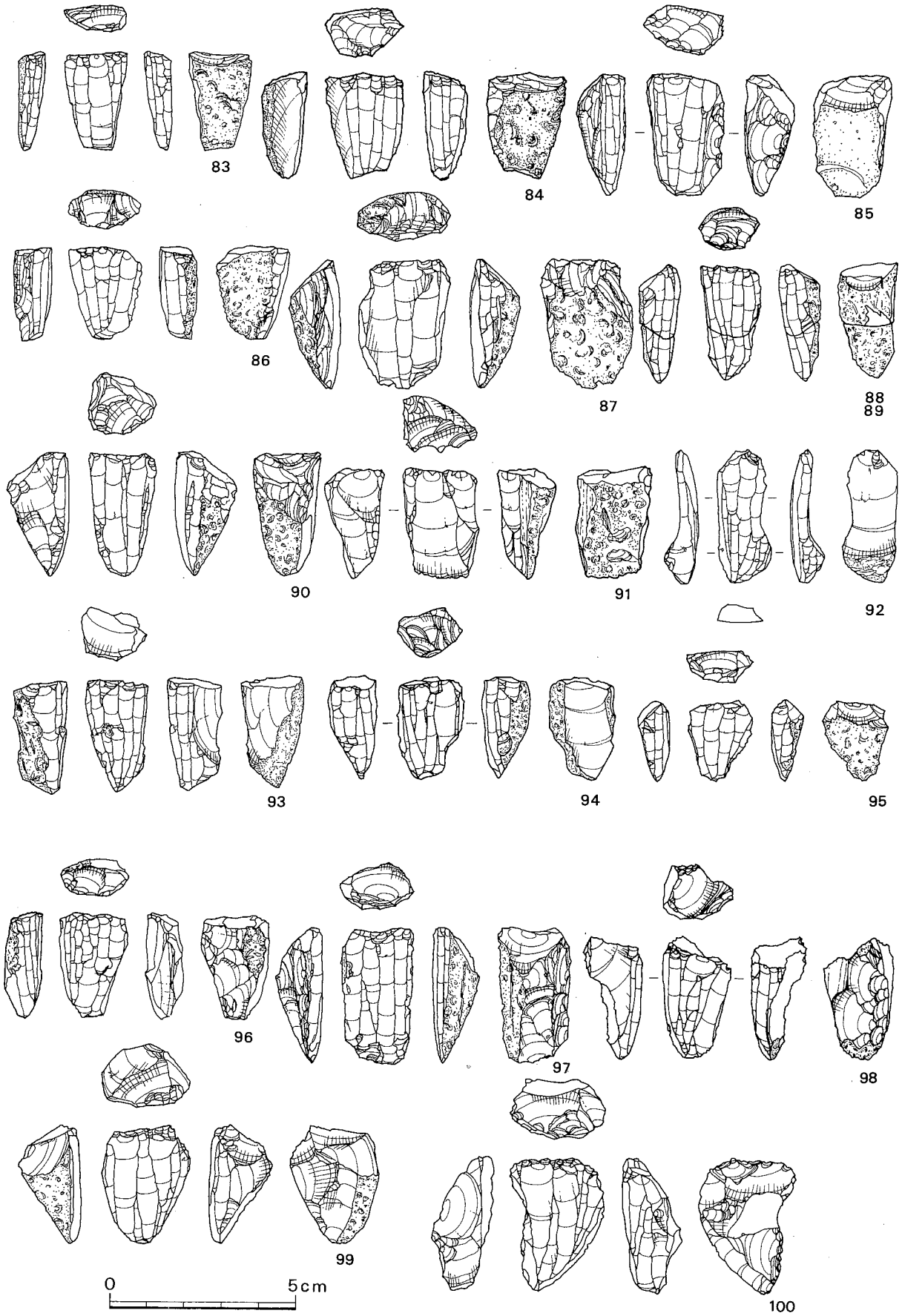
背面（細石刃剥離作業面の反対側）が自然面で構成されることを特徴とする。円礫状の黒曜石から剥出された剥片を素材とする。側面調整は施されるものと施されないものに分けられる。打面は88のように水平に近いものもあるが，概して急斜なものが多い。打面はブランクの形成時点で確保されており，背面を自然面のまま保持することは細石刃剥出時の細石核固定と密接に関係するものであろう。また側面をみると背面はほぼ直線となっており，円礫の剥片のうち平坦な自然面をもつ部分を選択的に素材としている。

83は背面がほぼ平坦で，限界に近く細石刃剥離が進行しており，最終段階のものである。左側縁に主要剥離面をごくわずかに留める。打面調整はほとんどない。**84**は２cm程度の厚さの分厚い輪切り状の剥片を素材とし，両側面に主要剥離面を残しており，打面調整は丁寧である。**85**は角礫に近いものを素材とし，背面と打面の一部に自然面を残す。側縁調整は左側辺は細石刃剥離前になされ，右側縁は背面側から施されている。打面調整は細石刃剥離作業面側から丁寧になされている。**86**は**84**と同じような円礫の輪切り状の厚手の剥片を素材とし，右側縁に主要剥離面を残している。打面は平坦に近く，両側縁からも施されている。**87**は自然面を大きく残し，打面形成は横方向からなされており，急傾斜である。**88**・**89**は折れ面で接合した資料である。自然面が側面まで回りこんでおり，作業面が縦長である点が特徴である。打面調整は丁寧である。**90**も**88**・**89**と同じように作業面の長いタイプ。背面には横方向の調整がみられ，Ⅰｂ類との中間形態である。**91**は**92**と接合することで細石核と認識できた資料である。作業面中央には**92**の剥離痕が大きく残るが，両側縁には打面側からの再調整が施されており細石核としての再生が試みられたものの最終的には放棄したものであろう。**93**は本来の細石刃剥離作業面は右側面に表現した部分であったものが，背面の打面からの剥離によって細石刃剥離作業面を移動させたものと思われる。**94**は輪切り状の剥片を素材とする。打面はほぼ平坦で調整は顕著である。**95**はおそらく折れた細石核を再生したものと思われる。打面調整は丁寧になされている。

Ⅰｂ類（**96**～**103**）

背面調整が施されるタイプでいわゆる「位牌塔型細石核」。背面調整は基本的には側面から水平方向に施される。打面は急傾斜で，調整は細石刃剥離作業面に限定して施される。背面には自然面の一部を残すものもある。側面観は下膨れで最大幅の位置が胴部下半にあり，洋梨形を呈する（**100**）ものが位牌塔型の典型例である。

96は背面の自然面を横方向の調整剥離によって大部分を除去したものである。その結果下半部がやや下膨れになっている。**97**は平面形が長方形で急斜な打面をもつ。背面は左半分に自然面を，右には調整剥離が施されている。**98**の背面調整はあたかも打面調整と見まごうもので特殊である。**99**は自然



第16図　第Ⅴ層石器群の細石核①

面を右側縁に残す。背面は調整剥離で自然面を除去している。打面調整は顕著である。**100**は大形のもので自然面をもたない。背面には横方向の調整が入る。打面調整は顕著である。最終剥離の細石刃は幅が1cmを超える。**101**は素材の用い方に特徴があるもので，打面は細石刃剥離作業面の進行に伴って背面の自然面に対してなされている。**102**はこの類に含めることに躊躇するが，全体の形状から入れることにした。作業面の幅が長さよりも長い。**103**は**95**と同じように折れた細石核を再生したものであろうが，背面に調整がみられることからＩｂ類とした。

II類（**104**～**107**）

いわゆる野岳・休場型とよばれる一群。基本的には稜柱形を呈するものであるが，その変異の幅は大きい。Ｉ類との違いは作業面幅と打面の長さがほぼ等しいところである。

104は分厚い輪切り状の剥片を素材とする。背面の一部を剥離しており，そこから側縁調整を入れる。打面はほぼ平坦である。**105**は牟田系黒曜石を素材とし，細石刃剥離作業面がきわめて長い。**106**は細石刃剥離が進行してほぼ全周にわたったもので弾丸状を呈している。**107**は背面が自然面でありＩａ類に類似するが正面観が楔状をなす点に大きな相違がある。打面調整も丁寧に施される。

③細石刃剥離作業面再生剥片（**92**・**108**・**109**）

細石刃剥離作業面の再生を企図したものと思われる。先端が肥厚する「しの字」状を呈しており，背面側に自然面をもっていることから細石核のＩａ類に伴う可能性が高い。**92**は**91**と接合することによってそれを実証した。しかし細石刃剥離に失敗した可能性もないではない。

④打面再生剥片（**110**～**112**）

いずれも細石核の打面部分を輪切り状に再生したもので，細石刃剥離の樋状剥離面を一端に残している。その形状から「野岳・休場型」細石核にともなうものであろう。

⑤ブランク（**113**～**115**）

細石核の母型である。**113**は細石核Ｉａ類のブランクである。背面には自然面で形成しており，急斜な打面を保持している。**114**・**115**は輪切り状の剥片を素材とする。**114**は自然面を打面にすると考えられるもので，下縁調整を施して側面観を楔状にしている。**115**は自然面を側面とする。

⑥掻器（**116**～**118**，**120**）

九州地方の細石器石器群の組成の特徴として貧弱な器種構成が指摘される(織笠1984)。本遺跡でもその例を免れることはできない。そうした中で特筆できるのが掻・削器類の充実である。**116**は分厚い剥片を素材とするラウンドスクレイパー。刃部の一部を欠損する。**117**は**116**よりも分厚く大きめの剥片を素材とする削器である。**118**はやや大振りの剥片を素材とする刃部が緩く弧を描く掻器である。上下端に相対する平坦剥離がみられることから楔形石器という認識もできよう。**120**は小形の掻器。刃部は急斜である。

⑦削器（**119**，**121**，**122**）

119は剥片の両側辺に鋸歯状の刃部を作り出している。打点側に丁寧な調整剥離がみられる。**121**は分厚い横長剥片を素材とし，自然面に刃部を形成している。**122**は薄手の縦長剥片を素材とする削器。左側辺に薄い刃部が作られている。右側辺には細かいリタッチがみられる。この種の薄い剥片を使用する掻・削器類が基本的な姿である。

⑧彫器（**123**・**124**）

掻・削器類に比べると彫器は貧弱である。**123**はスポール的な剥片を素材とする。表面は自然面で覆われており，彫刀面は左側辺の打点側にある。右側辺には主要剥離面が残る。**124**は縦長剥片を素材とする。彫刀面は先端部に施されている。

⑨オール（125）

寸詰まりの縦長剥片を素材とする。剥片の形状を大きく変容させず，左側先端に細かい調整を加えて刃部を形成する。

⑩不明石器（126・127）

良質の水晶の結晶の稜線を使って対象物を擦過した石器と思われ，稜線は摩滅して潰れて透明感をなくし白濁している。管見にあたったが類例はみあたらなかった。擦過する対象物が何であったか今後の研究課題である。

⑪楔形石器（128～131）

剥片の上下端に相対する鱗状の平坦剥離があるものを楔形石器とした。その形状の変異の幅は大きい。128は一見両面加工石器のようにみえるが，楔形石器とした。129・130は長幅がほぼ等しいもので，一側辺に截断面をもつ。131は分厚い縦長剥片を素材とするもので，左側辺に両端から剥離が入る。

⑫使用痕のある剥片（132・133）

自然面を残す縦長剥片の左側辺に使用痕を残す。132は横長剥片。自然面を大きく残す。

⑬剥片（134）

134は135と接合する資料である。横長剥片で打瘤部は除去されている。こうした定形化していない横長剥片は掻・削器類の素材になる可能性が高い。

⑭砕片（135）

135は134から剥出した砕片である。

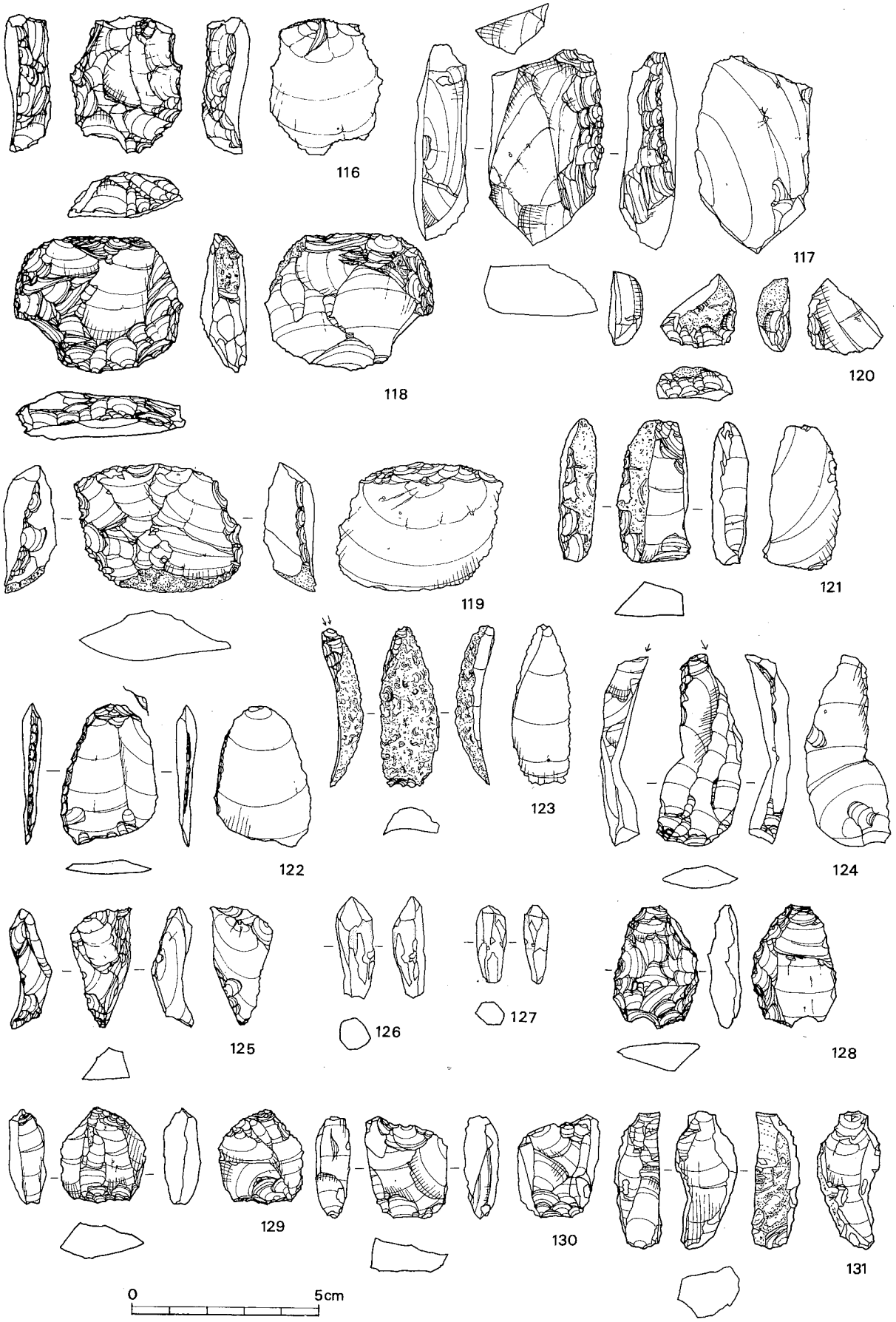
⑮石核（136）

半裁程度の円礫を素材とする石核。打面は数回移動しており，剥出した剥片の形状は変異に富む。本遺跡では石核はきわめて貧弱で，図面化できるものは本例くらいのものである。

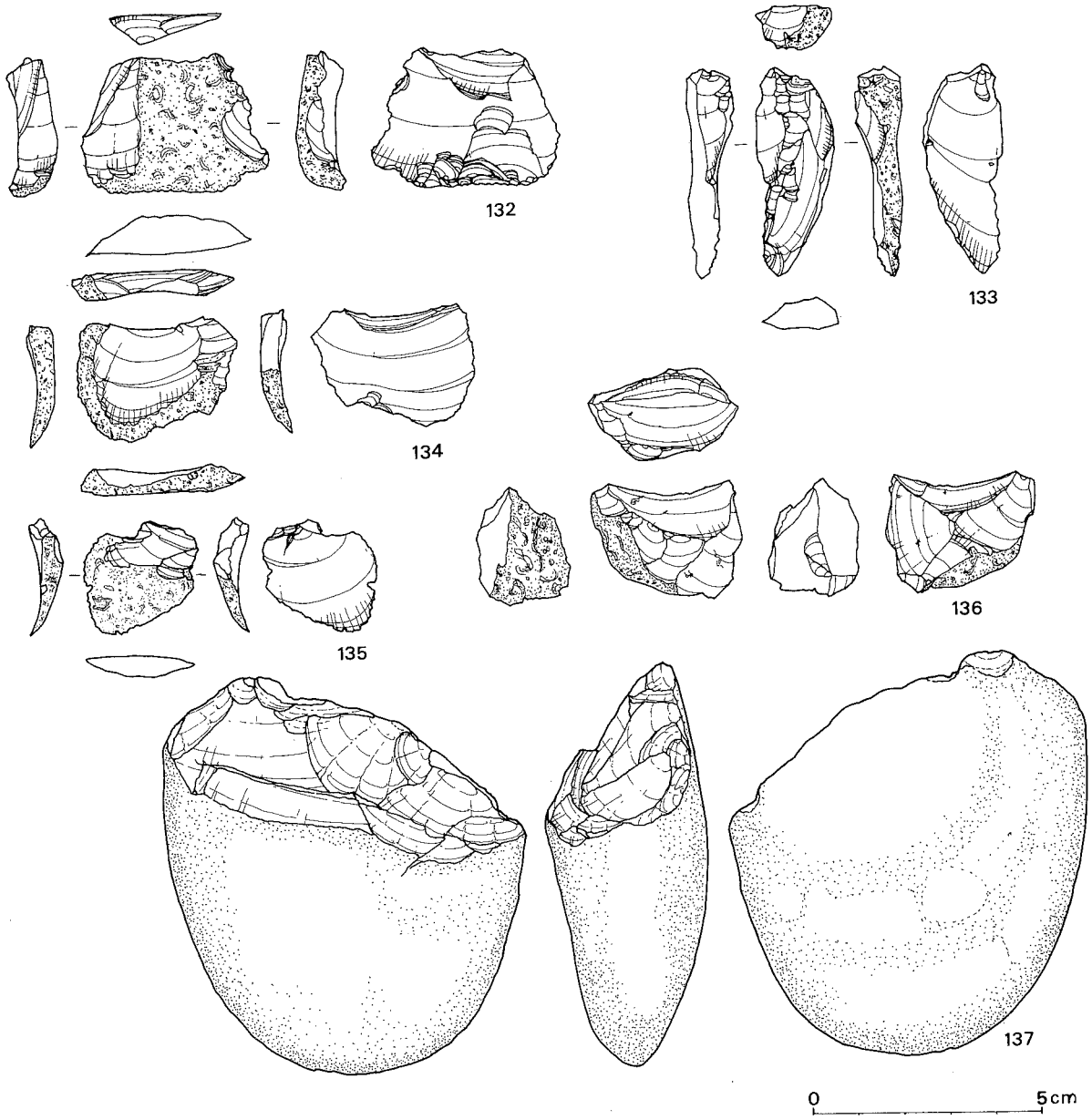
⑯礫器（137）

本例はもともと磨石であったものと思われ，両面に部分的に滑らかな研磨痕がみられる。最終的な形状は，一端から連続的に剥離されて片刃の礫器に転用されたものである。

第17図　第Ⅴ層石器群の細石核②と細石器関連石器



第18図　第Ⅴ層石器群のその他の石器①



第19図　第Ⅴ層石器群のその他の石器②

番号	区	遺物番号	層位	標高(m)	器種	石材	部位	重さ(g)	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	備考
25	E3	61	V	9.35	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	完形	0.57	3.10	0.83	0.30	
26	C2	2655	V	9.95	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	完形	0.51	3.27	0.62	0.29	
27	E3	139	V	9.25	細石刃	牟田系黒曜石	完形	0.64	2.99	0.95	0.26	
28	C2	2329	V	9.93	細石刃	牟田系黒曜石	完形	0.30	2.40	0.58	0.21	
29	C3	163	V	10.08	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	頭部	0.47	2.43	0.75	0.24	
30	C2	2156	V	9.97	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	頭部	0.40	2.29	0.70	0.20	
31	D3	394	V	9.30	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	頭部	0.57	2.35	0.75	0.33	
32	C2	2559	V	9.81	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	頭部	0.42	3.12	0.51	0.29	
33	D2	688	V	9.54	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	頭部	0.43	2.70	0.90	0.16	
34	D3	196	V	9.36	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	頭部	0.52	2.51	0.66	0.27	
35	D2	651	V	9.46	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	頭部	0.32	2.47	0.63	0.15	
36	D3	359	V	9.39	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	頭部	0.79	2.53	1.00	0.32	
37	D3	480	V	9.37	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	頭部	0.54	2.72	0.84	0.21	
38	C2	2300	V	10.03	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	頭部	0.93	2.33	0.95	0.44	
39	E3	88	V	9.25	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	頭部	0.68	2.94	0.80	0.26	
40	E3	172	V	9.12	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	頭部	0.77	2.86	0.79	0.32	
41	C3	545	V	9.73	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	頭部	0.58	2.60	0.83	0.26	
42	C3	566	V	9.61	細石刃	牟田系黒曜石	頭部	0.40	2.24	0.86	0.18	
43	D3	513	V	9.30	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	頭部	0.51	2.65	0.75	0.25	
44	C3	402	V	9.72	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	頭部	0.23	2.53	0.68	0.21	
45	C3	176	V	10.03	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	頭部	0.57	2.32	0.73	0.35	
46	C2	2301	V	10.06	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	中間部	0.79	3.39	0.90	0.25	
47	E3	149	V	9.21	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	中間部	0.61	2.64	0.80	0.36	

第２表　遺物計測表②

番号	区	遺物番号	層位	標高(m)	器種	石材	部位	重さ(g)	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	備考
48	C2	2259	V	9.94	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	中間部	0.75	2.53	0.76	0.32	
49	E3	195	V	9.00	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	中間部	0.62	2.23	0.88	0.32	
50	D2	511	V	9.49	細石刃	牟田系黒曜石	完形	0.26	2.03	0.79	0.26	
51	C2	2378	V	9.96	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	完形	0.26	2.53	0.49	0.23	
52	C2	2360	V	10.02	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	完形	0.30	2.46	0.54	0.21	
53	E3	42	V	9.27	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	中間部	0.44	1.84	0.81	0.30	
54	C3	280	V	9.98	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	中間部	0.31	1.84	0.63	0.23	
55	D3	471	V	9.43	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	中間部	0.24	1.75	0.70	0.07	
56	D3	573	V	9.24	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	中間部	0.35	1.65	0.70	0.27	
57	D3	615	V	9.30	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	中間部	0.26	2.02	0.64	0.17	
58	E3	182	V	9.08	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	中間部	0.27	1.46	0.77	0.22	
59	E3	33	V	9.33	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	中間部	0.20	1.35	0.77	0.18	
60	D2	665	V	9.46	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	中間部	0.19	1.00	0.90	0.21	
61	C2	2574	V	9.98	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	中間部	0.60	1.91	0.88	0.42	
62	D3	249	V	9.38	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	中間部	0.48	1.75	0.83	0.30	
63	D3	328	V	9.50	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	中間部	0.40	1.63	0.93	0.26	
64	C2	2415	V	9.83	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	中間部	0.29	1.68	0.79	0.17	
65	D3	643	V	9.22	細石刃	牟田系黒曜石	中間部	0.26	1.60	0.70	0.24	
66	D2	479	V	9.55	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	中間部	0.21	1.26	0.80	0.25	
67	C3	540	V	9.76	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	中間部	0.10	1.31	0.48	0.12	
68	C3	373	V	9.76	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	中間部	0.12	1.06	0.59	0.13	
69	D2	420	V	9.60	細石刃	牟田系黒曜石	頭部	0.57	2.05	1.06	0.27	
70	C3	678	V	10.16	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	頭部	0.42	1.94	0.97	0.23	
71	D2	425	V	9.47	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	頭部	0.46	1.79	1.04	0.19	
72	E3	117	V	9.29	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	頭部	0.41	2.11	0.79	0.25	
73	C3	336	V	9.69	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	頭部	0.31	1.63	0.88	0.20	
74	E3	341	V	8.96	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	頭部	0.36	1.57	1.12	0.21	
75	C3	538	V	9.78	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	頭部	0.23	1.30	0.81	0.19	
76	C3	174	IV	9.98	細石刃	牟田系黒曜石	先端部	0.69	2.33	1.27	0.31	
77	C2	2313	V	10.04	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	先端部	0.21	1.82	0.51	0.29	
78	D2	503	V	9.42	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	先端部	0.13	1.83	0.62	0.14	
79	E3	333	V	8.96	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	先端部	0.23	2.07	0.64	0.21	
80	D3	676	V	9.14	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	先端部	0.14	1.53	0.55	0.22	
81	E3	130	V	9.29	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	先端部	0.30	1.58	0.63	0.31	
82	C3	457	V	9.81	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	先端部	0.12	1.05	0.70	0.19	
83	D3	474	V	9.40	細石核	淀姫針尾系黒曜石		2.95	2.65	1.66	0.65	茶園型・背面礫面
84	D3	316	V	9.58	細石核	淀姫針尾系黒曜石		8.15	2.94	2.09	1.27	茶園型・背面は礫面・打面調整あり
85	D2	V層表採	V		細石核	淀姫針尾系黒曜石		9.10	3.33	2.04	1.25	茶園型・礫面
86	C3	363	V	9.83	細石核	淀姫針尾系黒曜石		5.22	2.51	1.96	0.96	茶園型・礫面
87	C3	666	V	9.56	細石核	淀姫針尾系黒曜石		10.19	3.43	2.43	1.28	茶園型のブランク・礫面
88	C2	2258	V	9.89	細石核	淀姫針尾系黒曜石		3.65	1.88	1.53	1.03	C3-669と接合・礫面
89	C3	669	V	9.61	細石核	淀姫針尾系黒曜石		1.43	1.47	1.26	0.85	C2-2258と接合・礫面
90	C2	2333	V	9.87	細石核	淀姫針尾系黒曜石		8.64	3.34	1.77	1.37	茶園型・打面調整あり・背面は礫面
91	C2	918	V	10.50	細石核	淀姫針尾系黒曜石		8.64	2.92	2.02	1.52	礫面
92	D3	385	V	9.33	面取端再生剝片	淀姫針尾系黒曜石		3.12	3.65	1.44	0.84	「しの字」状・C2-918と接合・礫面
93	C3	212	V	9.83	細石核	淀姫針尾系黒曜石		6.34	3.03	1.75	1.53	野岳型・背部を欠損・礫面
94	E3	262	V	9.07	細石核	淀姫針尾系黒曜石		6.50	2.73	1.69	1.21	打面調整丁寧・側面礫面
95	C3	425	V	9.84	細石核	淀姫針尾系黒曜石		2.72	2.15	1.73	0.80	茶園型・背面は礫面
96	D3	197	V	9.37	細石核	淀姫針尾系黒曜石		5.34	2.88	1.83	0.92	位牌塔型・背面平坦調整・単設打面・礫面
97	D3	406	V	9.36	細石核	淀姫針尾系黒曜石		7.91	3.68	1.91	1.17	位牌塔型・打面急斜・側面礫面
98	D3	表採			細石核	淀姫針尾系黒曜石		6.63	3.38	1.83	1.40	位牌塔型
99	C3	526	V	9.75	細石核	淀姫針尾系黒曜石		10.50	3.21	2.38	1.81	打面調整は面取端付近・礫面
100	D3	79	V	9.62	細石核	淀姫針尾系黒曜石		12.90	3.73	2.42	1.43	位牌塔型・打面急斜・打面調整はない
101	D2	198	V	9.84	細石核	淀姫針尾系黒曜石		5.71	3.47	1.64	1.13	下縁調整あり・打面は急斜・礫面
102	C2	2716	V	10.08	細石核	淀姫針尾系黒曜石		5.35	2.39	2.54	0.87	打面調整顕著
103	C2	2578	V	9.94	細石核	淀姫針尾系黒曜石		2.61	2.16	1.48	0.93	打面転移
104	D3	395	V	9.31	細石核	淀姫針尾系黒曜石		17.42	3.60	2.22	2.17	打面平坦・礫面
105	D2	627	V	9.62	細石核	牟田系黒曜石		4.69	3.30	1.29	1.02	稜柱状
106	D3	447	V	9.48	細石核	淀姫針尾系黒曜石		2.47	2.24	1.18	0.84	円錐形・面取端が全周に及ぶ
107	D3	288	V	9.55	細石核	淀姫針尾系黒曜石		7.10	2.94	1.89	1.60	背面は礫面・打面調整顕著
108	D2	225	V	9.82	面取端再生剝片	淀姫針尾系黒曜石		1.76	2.84	0.98	1.51	しの字状
109	D2	63	V	9.89	面取端再生剝片	淀姫針尾系黒曜石		0.68	1.78	0.90	0.78	しの字状・C2-918と接合・礫面
110	D3	661	V	9.21	打面再生剝片	淀姫針尾系黒曜石		5.79	1.12	2.27	2.12	背面礫面
111	C3	54	V	10.14	打面再生剝片	淀姫針尾系黒曜石		8.68	5.67	2.67	3.52	面取端から加撃・礫面
112	D3	257	V	9.32	打面再生剝片	淀姫針尾系黒曜石		6.32	2.88	2.63	0.86	面取端から加撃
113	C3	532	V	9.62	ブランク	淀姫針尾系黒曜石		10.62	2.98	3.04	1.41	茶園型のブランク
114	D2	683	V	9.63	ブランク	淀姫針尾系黒曜石		8.21	2.75	2.17	1.06	礫面
115	C2	2427	V	10.04	ブランク	淀姫針尾系黒曜石		7.47	2.72	2.18	1.10	礫面
116	E3	4	V	9.36	スクレイパー	淀姫針尾系黒曜石		15.15	3.68	3.08	1.21	ラウンド・礫面・被熱
117	E2	表採			スクレイパー	淀姫針尾系黒曜石		28.20	5.34	3.08	1.41	
118	C2	2672	V	9.97	スクレイパー	淀姫針尾系黒曜石		20.09	3.71	4.51	1.06	
119	C2	2230	V	10.12	スクレイパー	淀姫針尾系黒曜石		19.15	3.57	4.61	1.39	分厚い横長剝片・礫面
120	D2	498	V	9.43	スクレイパー	淀姫針尾系黒曜石		3.33	2.20	1.62	0.85	エンド・礫面
121	D2	676	V	9.35	スクレイパー	淀姫針尾系黒曜石		8.26	3.86	1.90	0.99	礫面
122	D3	814	V	9.52	スクレイパー	淀姫針尾系黒曜石		4.80	3.80	2.61	0.52	サイド
123	D3	262	V	9.38	彫器	淀姫針尾系黒曜石		4.79	4.37	1.64	0.69	礫面
124	E3	325	V	9.08	彫器	淀姫針尾系黒曜石		7.23	5.17	2.13	0.80	
125	D3	210	V	9.55	オール	牟田系黒曜石		3.56	3.26	1.65	0.82	側辺に使用痕
126	D2	262	V	9.84	水晶石器	水晶		2.62	2.75	1.06	0.83	稜摩滅
127	D3	56	V	9.51	水晶石器	水晶		1.27	2.09	0.79	0.59	稜摩滅
128	C2	2148	V	9.96	楔形石器	淀姫針尾系黒曜石		4.67	3.29	2.25	3.79	
129	D3	690	V	9.22	楔形石器	牟田系黒曜石		5.05	2.62	2.32	0.99	
130	C2	2715	V	10.08	楔形石器	淀姫針尾系黒曜石		5.05	2.70	2.23	0.82	截断面をもつ
131	C3	216	V	9.78	楔形石器	淀姫針尾系黒曜石		7.65	3.59	1.18	1.64	礫面
132	C2	2395	V	9.84	加工痕のある剝片	淀姫針尾系黒曜石		10.81	3.07	4.09	0.85	礫面
133	C2	2275	V	10.02	使用痕のある剝片	淀姫針尾系黒曜石		5.41	4.49	1.70	0.99	礫面
134	E3	161	V	9.21	剝片	牟田系黒曜石		3.84	2.58	3.54	0.48	D2-405と接合
135	D2	405	V	9.65	砕片	牟田系黒曜石		2.25	2.77	2.43	0.48	E3-161と接合
136	D3	187	V	9.41	石核	淀姫針尾系黒曜石		13.83	3.53	2.57	2.09	礫面
137	C3	424	V	9.73	礫器	玄武岩		288.60	8.99	7.81	3.50	

第2表　遺物計測表②（つづき）

第３節　第Ⅳ層石器群（縄文時代草創期）

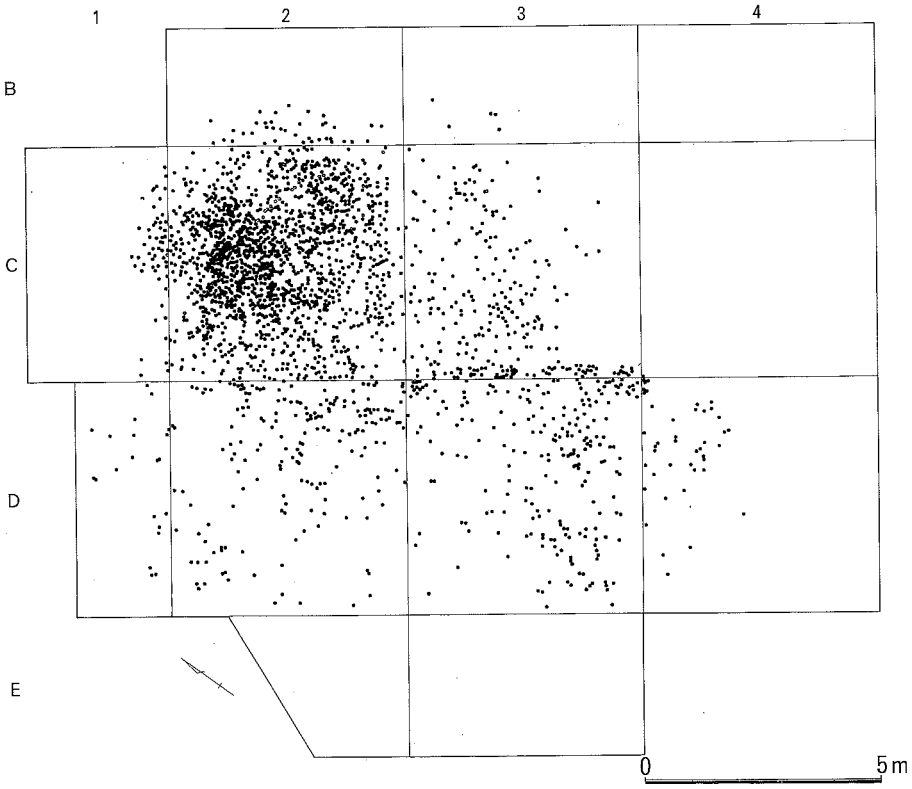
(1)　遺物分布

第Ⅳ層石器群は，縄文時代草創期の西海技法をもつ細石核やいわゆる「野岳・休場型」細石核などの細石器と安山岩製の石槍・局部磨製石斧を主体とする石器群である。第20図がその平面分布である。2600点を超える遺物が出土しており，おおよそ３つのブロックに認識できよう。

中心となるブロックはC－２区のほぼ全域からC－３区にかけての径８×６ｍほどの楕円形の大きなブロックで，非常に多くの遺物が出土しており，C－２区の中央部ではまさに密集という表現がふさわしい。

D－３区に広がる径５ｍほどのブロックは遺物の密度は密集するところと散漫なところがある。

D－２区に散漫に広がるブロックは，まとまりが認められない。



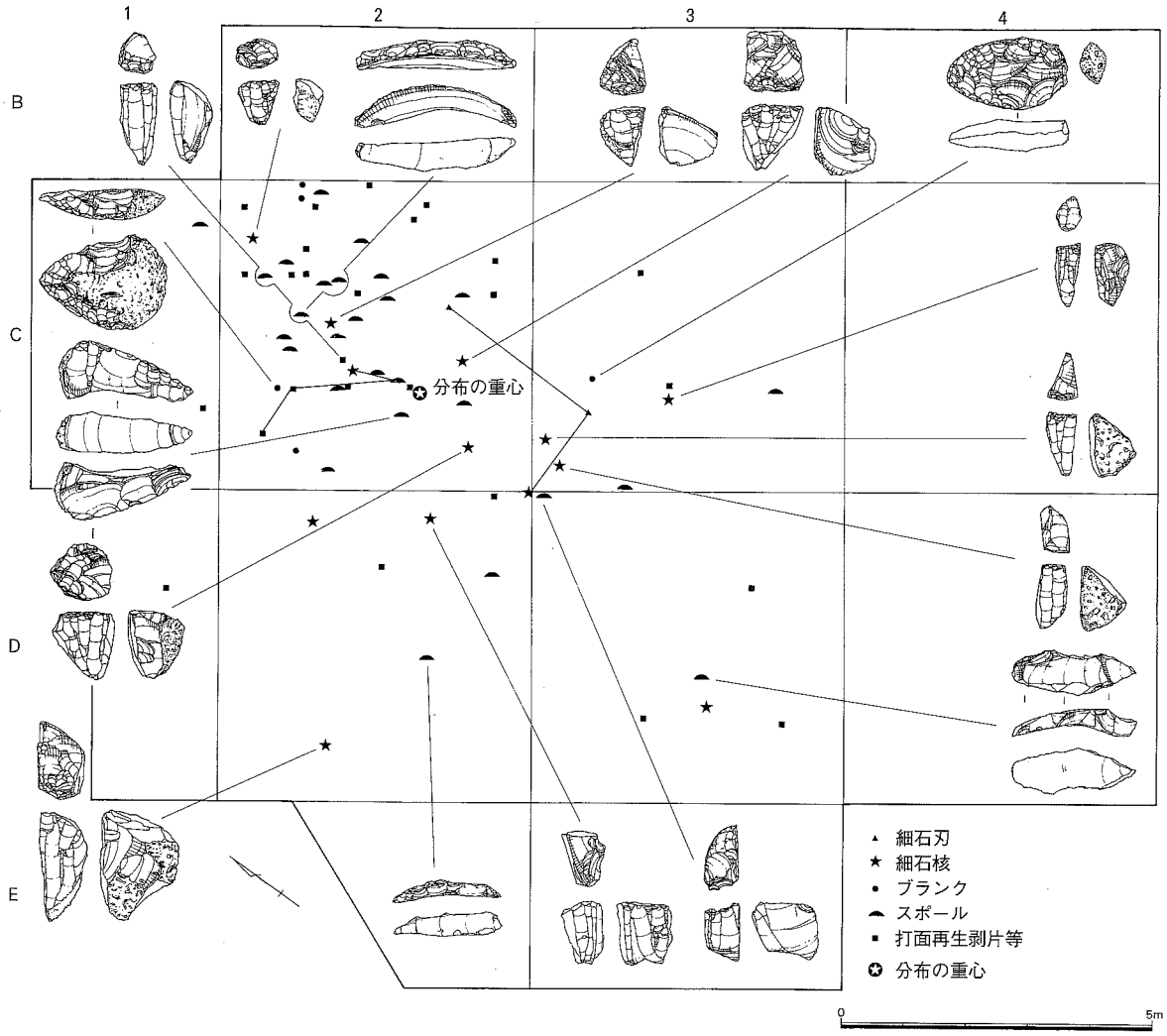
第20図　第Ⅴ層の遺物分布

(2)　主要石器の分布

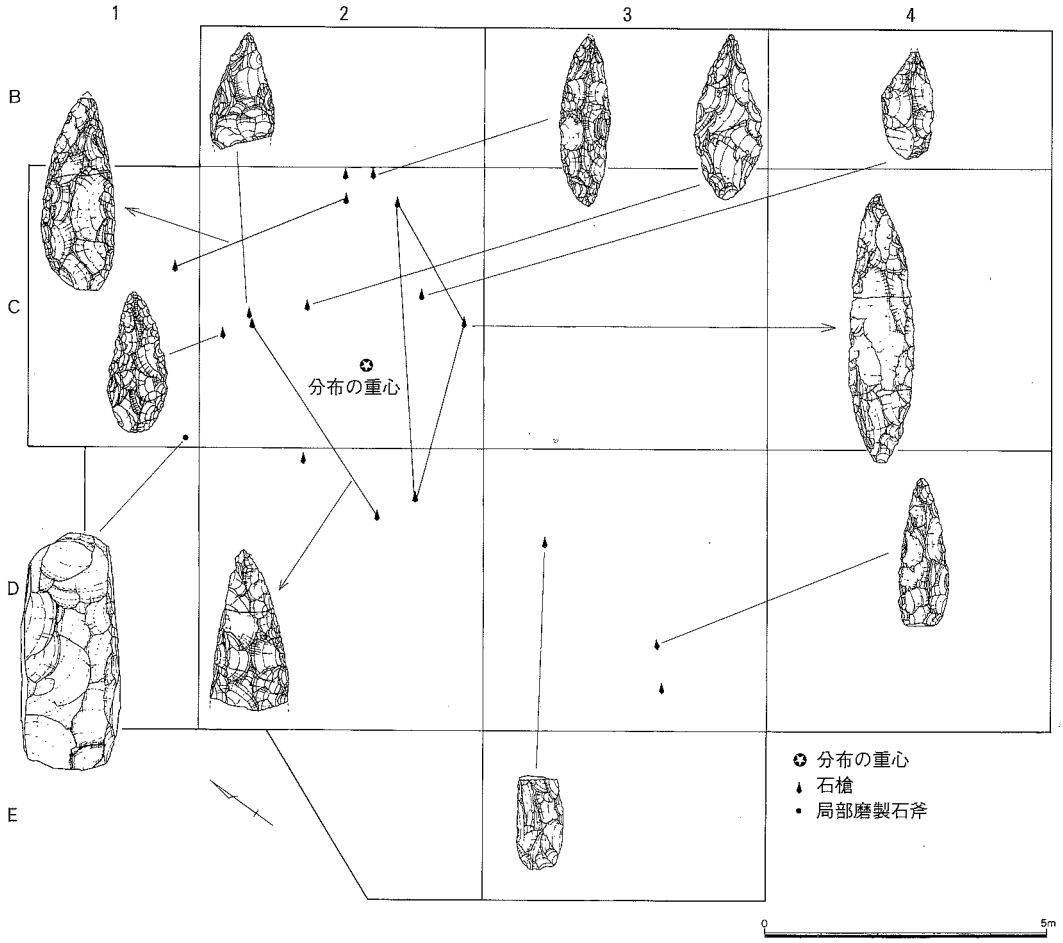
第21図は第Ⅳ層の縄文時代草創期の細石核・スポール・ブランク・打面再生剥片など細石器関係遺物の分布図である。C－２区を中心とするブロックに大半の主要石器が帰属している。接合資料も２点を図示したが，いずれもブロック内で収束しており，細石核の製作から細石刃剥出までの全工程が集中して行われたらしい。D－３区のブロックは細石器関係の遺物は少ないものの，石槍も出土するなどまとまりがある。

さて細石器関連遺物の分布の重心をみるとその位置はC－２区にある。前述した旧石器時代の第Ⅴ層での重心の位置に比べると，約４ｍ程度北側に移動している。この距離の差は，両者の分布が基本的に重複しないことを意味しよう。

第22図には石槍・局部磨製石斧の分布を図示した。その分布のあり方はC－２区のブロックではブロックの中心というより周辺部に位置する場合が多そうである。局部磨製石斧も分布のはずれにある。そうした偏在は指摘できるものの，分布の重心を求めるとその位置は細石器関連遺物の重心とほぼ一致する。これは両者が非常に親和性の高い関係にあることを示している。図示できなかったが，垂直分布では，石槍のグループが若干上位から出土する傾向はあるものの，同一水準で共伴して出土することは確実である。



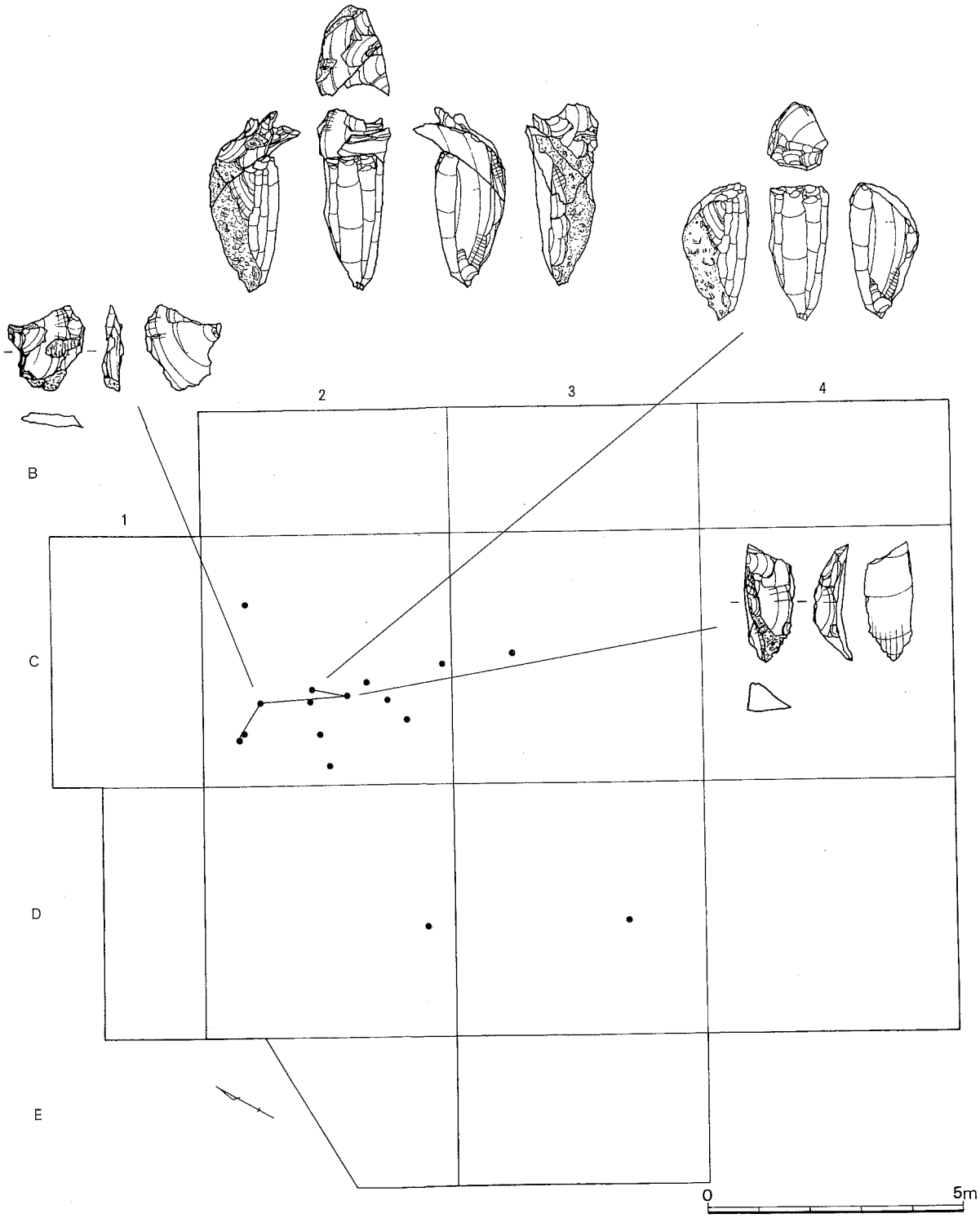
第21図　第Ⅳ層の細石器関連遺物分布



第22図　第Ⅳ層の石槍・局部磨製石斧の分布

(3) 母岩別資料

旧石器時代の研究に果たす母岩別資料の分析の有効性は論を待たない。しかし西北九州地方のような黒曜石原産地を後背にもつ遺跡では，石材の大部分が黒曜石であるために接合作業は困難を極める。本遺跡でも例数は少ないものの，接合関係および肉眼による同定作業から同一母岩と認識できた資料が一例検出できた。



第23図　母岩別資料

・石材：青灰色黒曜石

・石質：縞状の流理がみられ，風化面はざらついている。いわゆる淀姫・針尾系黒曜石とは異なる要素もある。

・素材：細石核の大きさや，自然面および主要剥離面の状況から判断して，拳大程度の円礫から剥離した厚さ1.5cm程度の自然面をもった剥片を素材としたらしい。

資料：細石核１点，打面再生剥片１点，打面調整剥片２点，細石刃１点，剥片４点，砕片10点の合計19点からなる。細石核は自然面を残す分厚い剥片を素材とするもので，一見稜柱形にみえるものの，接合資料によって西海技法の所産と確認できる。残された打面は，細石刃剥離作業面から背縁にかけて縦方向の打面である。打面再生剥片は縦長である。再生する以前の打面をみると横位の打面調整がみられる。その横位の打面調整剥片が２点確認される。その他剥片や砕片があるが，いずれも小さい。

接合資料：細石核（**330**）と打面再生剥片（**371**）と打面調整剥片（**370**）が接合する。本文執筆中に**370**に接合する打面調整剥片（遺物番号Ｃ２-1163）を確認したが図示できなかった。

この母岩別資料は，基本的には細石核製作に係わる資料であり，打面再生剥片と細石核の細石刃剥離作業面の位置関係から，相当数の細石刃が剥出されたと推測される。しかし同一母岩と思われる細石刃は，流理構造を明瞭に把握できず，可能性のあるものは数点あるが確定するにはいたらなかった。

分布：Ｃ―２区に分布の中心があり，細石核の打面調整および打面再生がほぼ同一の場で行われたことが想定できる。打面再生剥片と細石核の現細石刃剥離作業面とは約１cm程度の空間があり，細石刃剥離が進行したこと示している。

また細石核の周辺に分布する剥片・砕片は厚さが薄く小形であり，自然面を有するものもあることなどからみて，細石核の製作に係わるものと思われる。

(4) 石器の組成

①細石刃

第Ⅳ層石器群では総数738点の細石刃が出土している。ここでは計測した680点について分析した。部位別では，完形77点，頭部218点，中間部290点，先端部95点である。総計に占める各部位の比率は完形11.3%，頭部32.1%，中間部42.6%，先端部14.0%となり，中間部と頭部で約７割５分を占める。第Ⅴ層石器群の細石器と比べて若干ではあるがその割合が減少している。使用された石材としては黒曜石に限定され，青灰色の淀姫・針尾系黒曜石が648点（95.3%）を占める。漆黒色の牟田系黒曜石は32点（4.7%）に過ぎない。こうした傾向は細石刃を作り出す細石核にもいえることでその比率は牟田系黒曜石：淀姫・針尾系黒曜石１：７である。

なお計測はそれぞれの部位の最大値を求めた。

完形（**138～149**）

完形は77点で，牟田系黒曜石７点，淀姫・針尾系黒曜石70点。その比率は１：10である。長さの範囲は34.4mm～12.3mmにあり，平均値は22.1mmであるが，長さの頻度はばらつきが大きくまとまりがない。幅は12.0mm～3.5mm，平均6.9mmである。厚さは6.8mm～1.1mmの範囲にあり，平均2.3mmである。重量は1.06ｇ～0.03ｇの範囲にあり，平均0.33ｇである。

頭部（**150～176，261～307**）

頭部は218点で，牟田系黒曜石11点，淀姫・針尾系黒曜石207点でその比率は１：18.8である。長さの範囲は3.05mm～8.0mmにあり，平均値は16.4mmである。16mmを頂点に正規分布し，まとまりがある。幅は12.7mm～2.9mm，平均7.0mmである。厚さは6.7mm～0.8mmの範囲にあり，平均2.0mmである。重量は

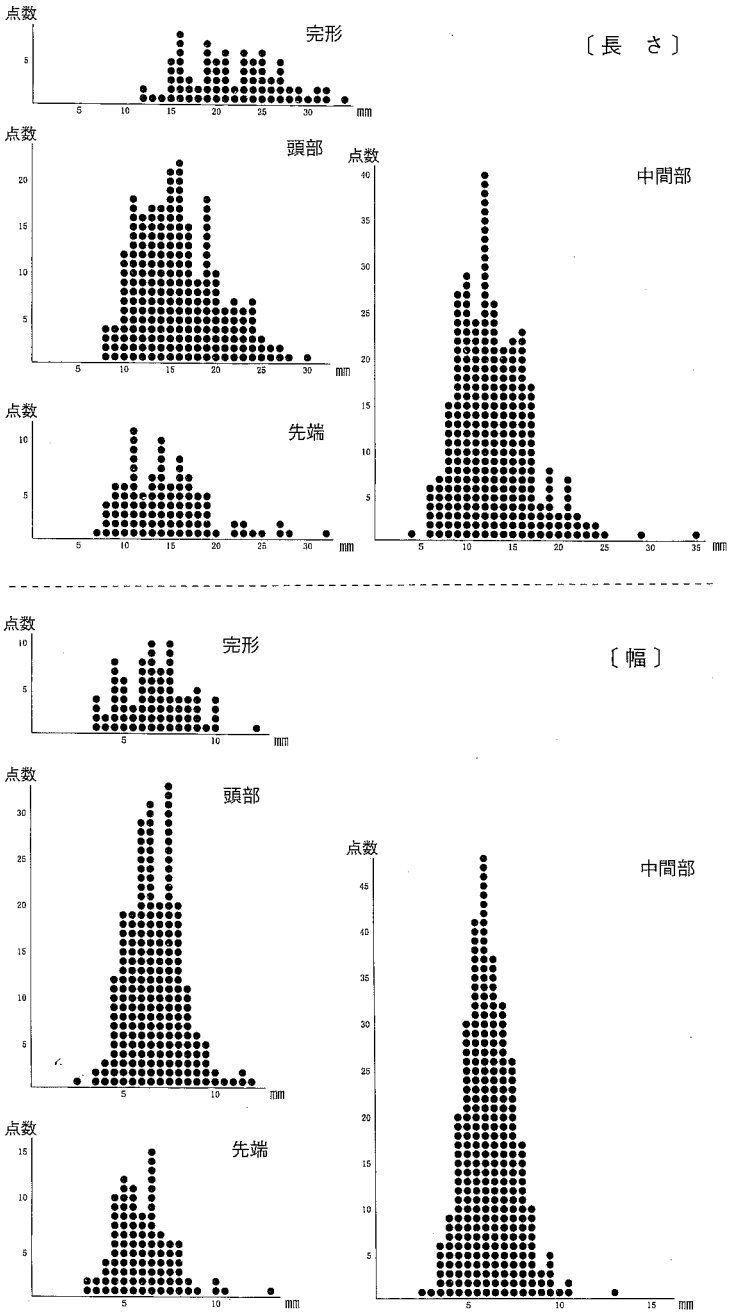
1.12ｇ～0.01ｇの範囲にあり，平均0.24ｇである。頭部には先端部をわずかに欠くという資料を含めている。

中間部（**183～260**）

中間部は290点で，牟田系黒曜石９点，淀姫・針尾系黒曜石281点でその比率は１：31.2である。長さの範囲は35.4㎜～4.5㎜にあり，平均値は13.5㎜である。12㎜を出現頻度の頂点として，８㎜から17㎜の間に87％が帰属する。幅は13.4㎜～2.8㎜，平均6.5㎜である。厚さは5.0㎜～0.6㎜の範囲にあり，平均1.8㎜である。重量は0.89ｇ～0.01ｇの範囲にあり，平均0.18ｇである。

先端部（**177～182，308～326**）

先端は95点で，牟田系黒曜石５点，淀姫・針尾系黒曜石90点でその比率は１：18である。長さの範囲は32.2㎜～7.3㎜にあり，平均値は15.2㎜である。11㎜と14㎜にピークがあるが，９㎜から19㎜の間に87％が集中する。完形の平均値より長いものが８点あるがいずれも頭部を若干欠いたものである。幅は13.0㎜～3.0㎜，平均6.3㎜である。厚さは7.1㎜～0.8㎜の範囲にあり，平均2.0㎜である。重量は1.54ｇ～0.01ｇの範囲にあり，平均0.20ｇである。



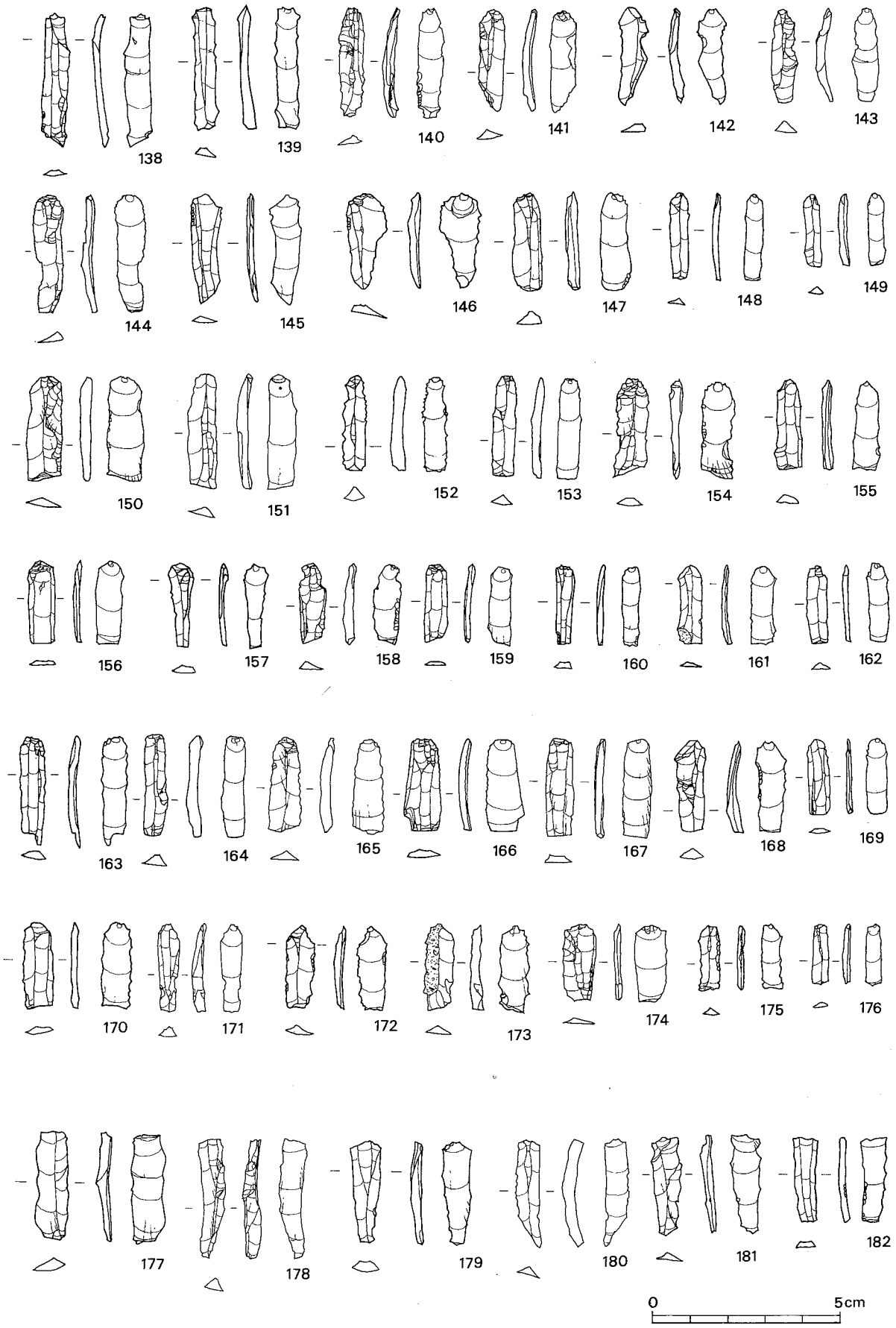
第24図　第Ⅳ層石器群の細石刃長幅グラフ

第Ⅳ層石器群の細石刃の姿を，土器出現期の遺跡と比較してみよう。

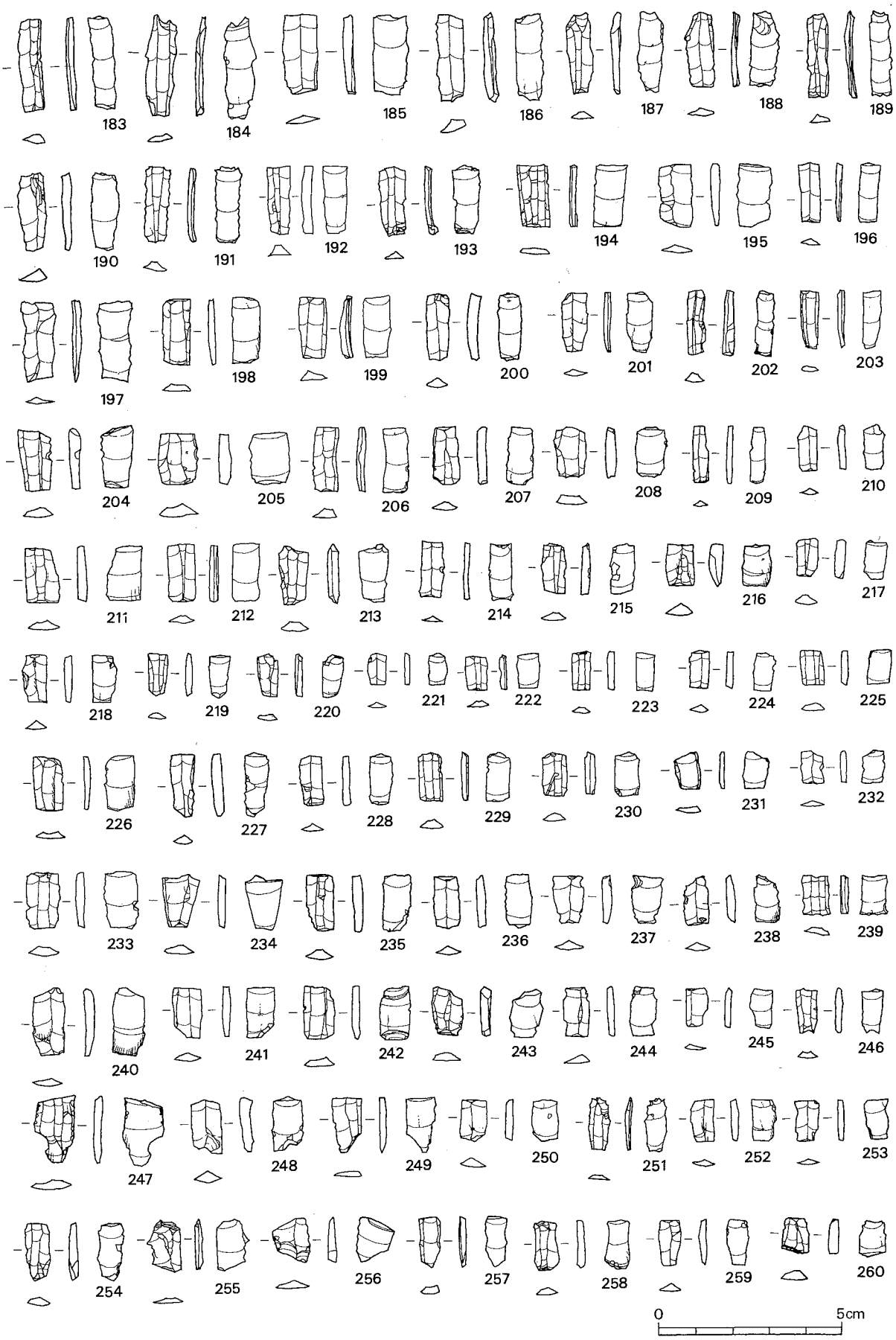
縄文時代草創期の代表的遺跡である佐世保市泉福寺洞穴では膨大な量の細石刃が出土している。それらの細石刃は詳細な分析がなされており，データは完備している。完形の長さを層位的にみると，豆粒文土器段階が平均の長さではもっとも短く，時代が新しくなるにつれて次第に長くなる傾向がある。単純に数値だけみると，茶園遺跡第Ⅳ層の細石刃は泉福寺洞穴７層の数値に近い。城ヶ岳平子遺跡の長さは19.5㎜と短い。これは素材の影響された結果であろう。鹿児島県の加治屋園遺跡では21.8㎜と茶園遺跡第Ⅳ層とほぼ同じ長さである。しかしもっとも大きな特徴は長さではなく，幅にあるといえる。茶園遺跡第Ⅳ層の細石刃の

10ｃ層	（豆粒文土器）	19.9㎜
８ｃ層	（隆線文土器）	20.8㎜
７　層	（隆線文土器）	22.7㎜
６ｂ層	（爪形文土器）	24.7㎜
５ｄ層	（押引文土器）	26.8㎜

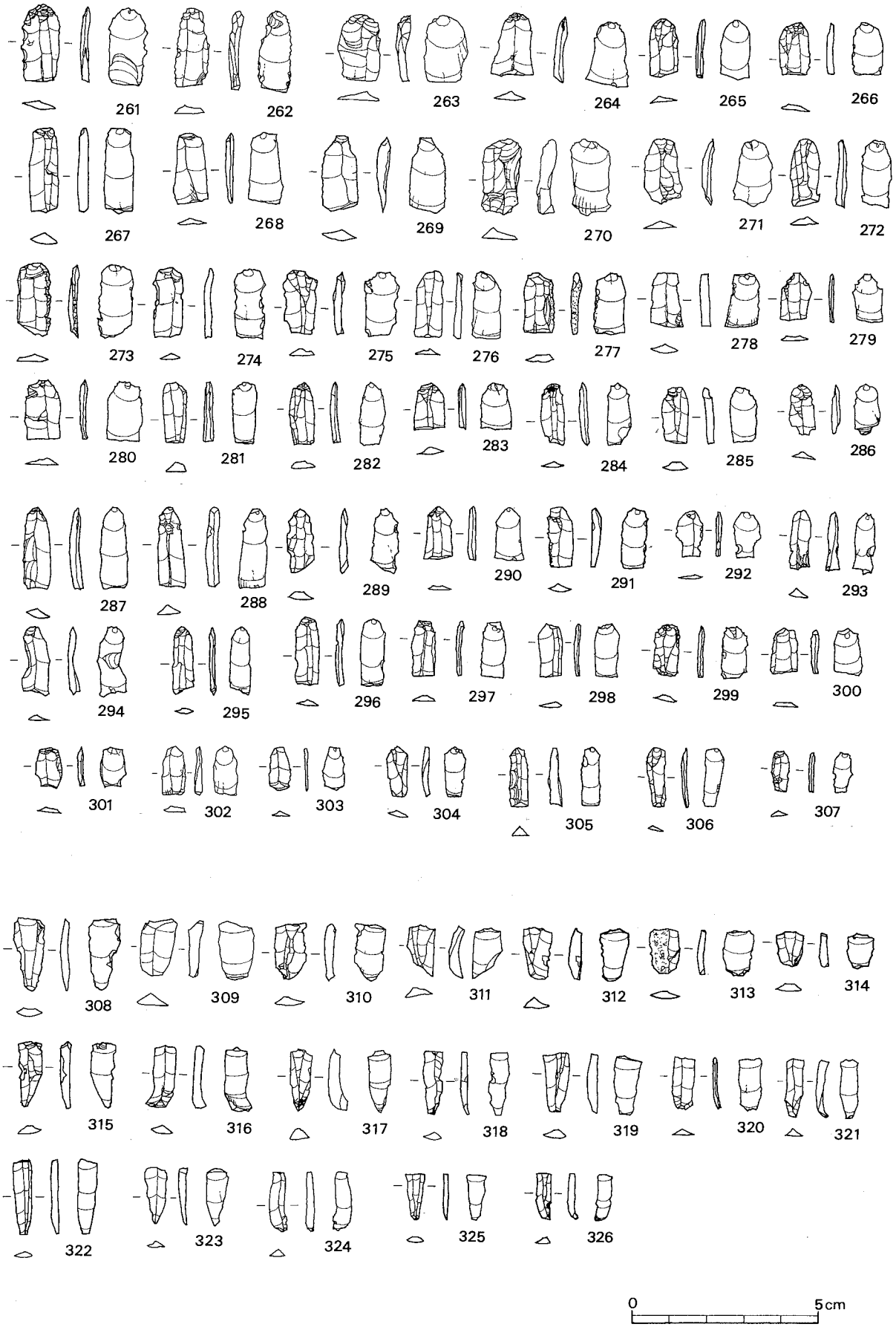
第３表　泉福寺洞穴の細石刃完形例の平均値



第25図　第Ⅳ層石器群の細石刃①



第26図　第Ⅳ層石器群の細石刃②



第27図　第Ⅳ層石器群の細石刃③

幅は6.9㎜で，ここで比較した泉福寺洞穴などよりも１ないし２㎜程度も広い。概して茶園遺跡の細石刃は大形の部類に入るものといえよう。

これを茶園遺跡第Ⅴ層石器群の細石刃と比較すると，いずれの数値も第Ⅳ層石器群が第Ⅴ層石器群の細石刃より下回る。完形の長さではそれほど顕著な差はみられないが，いずれの部位においても幅の値が小さくなっており，細石刃の狭小化の傾向を読みとることができよう。このことは茶園型に代表される扁平細石核から剥出される細石刃が幅広であり，第Ⅳ層の小口に作業面をもつ西海技法の細石核の一群の細石刃の幅が狭くなることを意味し，層位的に細石核の形態が変化することを示している。

	完　形			頭　部			中間部			先端部		
	長さ	幅	厚さ	長さ	幅	厚さ	長さ	幅	厚さ	長さ	幅	厚さ
第Ⅴ層石器群	22.4	7.2	2.7	17.1	7.4	2.1	15.2	7.2	2.1	16.3	6.4	2.0
第Ⅳ層石器群	22.1	6.9	2.3	16.4	7.0	2.0	13.5	6.5	1.8	15.2	6.3	2.0

㎜

第４表　層位別細石刃計測表

②細石核

この石器群の細石核は大きく三つに区分できる。第Ⅴ層石器群の細石核との混同を避けるために，Ⅲ～Ⅴ類と表記した。

Ⅲ類：細石刃剥離作業面が小口にあり打面よりも短いグループ。

Ⅳ類：細石刃剥離作業面が打面よりも長いグループ。

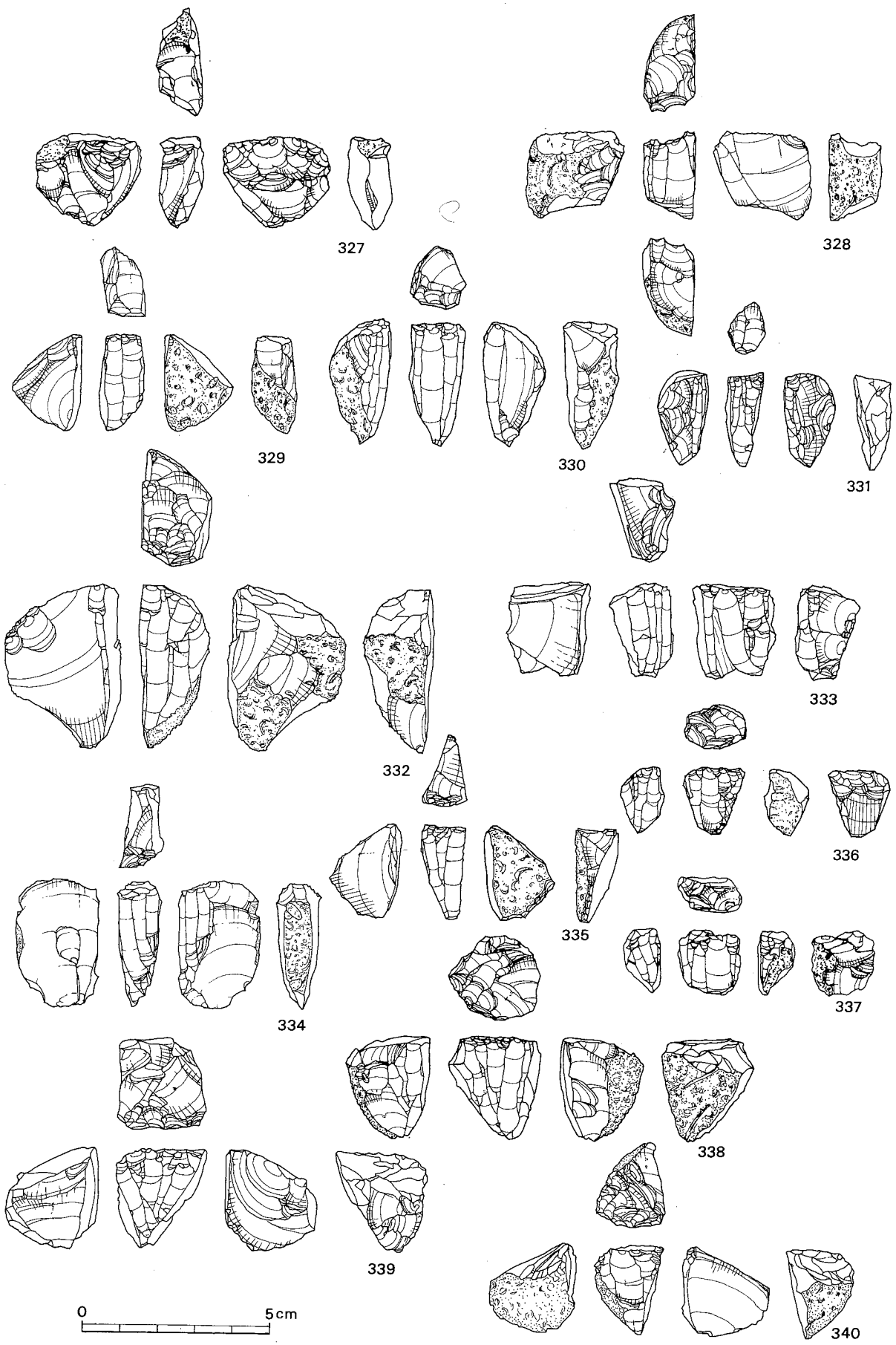
Ⅴ類：従来「野岳・休場型」といわれてきた稜柱型のグループ。

Ⅲ類（**327**～**331**）

327は舟底形を呈し，打面は細石刃剥離作業面側からの長い単打面。側辺調整は主として打面側から下縁側に向かって施されており，船野型にも類似する。下縁調整は顕著ではなく，背縁の一部に自然面を残す。**328**・**329**は分厚い剥片素材を利用し，側面調整はほとんどなされず自然面の曲線を有効に活用している，他面は主要剥離面である。打面調整は横打で，西海技法の範疇の包括される。**328**の下縁調整は主要剥離面側から横打ちされているため正面観が台状を呈する。最後に剥出した細石刃は末端で分厚く肥厚する「しの字」状を呈し，下縁を大きく取り込んでいる。**329**の打面は細石刃剥離作業面から縦方向に入るが，打面の一部や接合する打面再生剥片をみると横位の打面調整が看取できる。**330**は一見すると野岳･休場型のような稜柱形であるが，接合する打面調整剥片や縦長のスポールなどから技術的には**328**・**329**と共通するところが多い。

331は小形縦長の楔形を呈する細石核。側面調整は背縁から丁寧に施されている。もう一面は主要剥離面を大きく残す。打面は細石刃剥離作業面側から２回背縁方向に実施されている。**332**は本遺跡で最も大きい細石核。大きく分厚い剥片を素材とする。正面観は素材となる礫の形状を反映しておりＤ字状を呈する。側面は主要剥離面と自然面からなり，自然面側には調整剥離が施されるが，主要剥離面側には若干打面から鱗状の剥離が入る程度である。打面調整は細石刃剥離作業面から背縁方向（縦方向）に丁寧に施されている。

333～**335**は板状の剥片を素材とするが，その利用の仕方は一様ではない。**333**は分厚い剥片を素材とする。側面は一面が打面部からの調整，片面は主要剥離面である。細石刃剥離作業面の幅よりも背面が大きく，背面には位牌塔型細石核に特徴的な横方向の調整剥離がみられる。**334**は自然面を背縁とするいわゆる輪切り状の剥片を素材とする。側面調整は認められない。打面調整も顕著ではなく，細石



第28図　第Ⅳ層石器群の細石核

刃剥離作業面の角度は鈍角である。**335**は原礫の平坦に近い部分を素材としており，素材の時点で背縁側が薄くなり楔形をしている。両側面ともに調整剥離は認められない。下縁には削器状の刃部が施されており転用された可能性もある。

Ⅳ類（**336・337**）

336・337は細石刃剥離作業面の幅が，打面の長さよりも大きいもの。第Ⅴ層石器群の扁平細石核と形状的に似るところもあるが，細石刃剥離作業面の長さが短く，背面調整がみられない点また打面調整が入念に施されるなど相違するところも多い。

Ⅴ類（**338～340**）

338～340は稜柱形のいわゆる野岳・休場型の一群。ともに素材には円礫の二分割ないし四分割の剥片を用いる。**338**は分厚い剥片を素材とする。細石刃剥離作業面は正面に限定され，打面はほぼ平坦で調整は丁寧である。背面は自然面である。**339**は角柱状の細石核である。細石刃剥離作業面はほぼ平坦であり，被熱の痕跡が顕著である。右側面で斜めに大きく割れている。**340**は4分割の剥片素材の細石核で，自然面を大きく残す。打面調整が顕著である。

③ブランク（**341～350**）

341・342は下縁調整を施し舟底型を呈するが，その調整は粗い。打面は横方向であるが細調整はみられない。**343**は肉厚な自然面をもつ剥片を素材とし，打面調整を横方向から施している。下縁調整もわずかでなされ，側面は楔状に近い。主要剥離面側には調整はみられない。**344**は両面調整加工のブランク。末端には自然面を残しており，そうしたことからみて輪切り状の分厚い剥片を素材とするらしい。裏面に主要剥離面をごくわずか残している。調整加工は丁寧で，断面は凸レンズ状をなす。**345**は両面調整加工のブランク。**344**と比べてその調整は粗い。**346**は一見尖頭部をもつことから尖頭器とする向きもあるが，ブランクとして認識する。**344**と同じように主要剥離面を大きく残している。自然面は半分以上残っているものの，割と急斜な調整剥離が下縁と上縁に施され，尖頭部を作出している。主要剥離面側にも平坦剥離による調整が尖頭部を中心に施されている。牟田系黒曜石を素材とする。

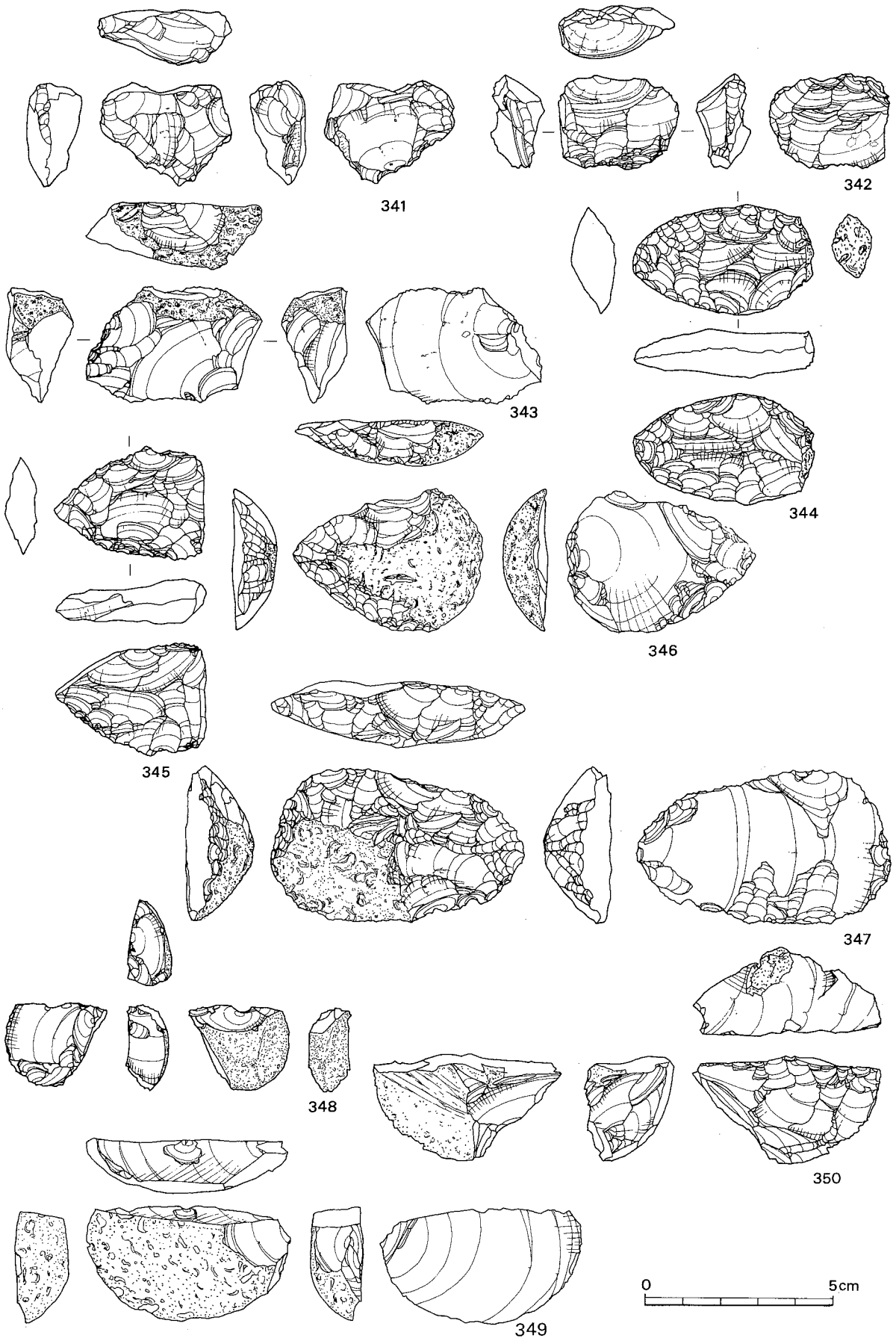
347は自然面を残した大形剥片を素材としており，裏面には主要剥離面を大きく残す。自然面側には自然面を除去するように丁寧な調整剥離が4分の3周する。主要剥離面側にも部分的に平坦剥離の調整剥離がみられる。**352**のようなスポールはこのてのブランクから剥出されたものと思われる。

348はⅢ類の細石核**328・329**の母型となるものである。打面調整は横方向から入り，西海技法の範疇にあることを示しているが，背面の自然面には調整を施さない。主要剥離面側には下縁調整がみられる。**349**は**348**の前段階にあたる。**349**には**367・368**が接合して，黒曜石の原礫を大きく打ち割った大剥片ともいえる状態になる。茶園遺跡にはこうした剥片の形で搬入されたと思われる。次の段階ではこれを二分割し，**348**のようなものを作り出すものと思われる。

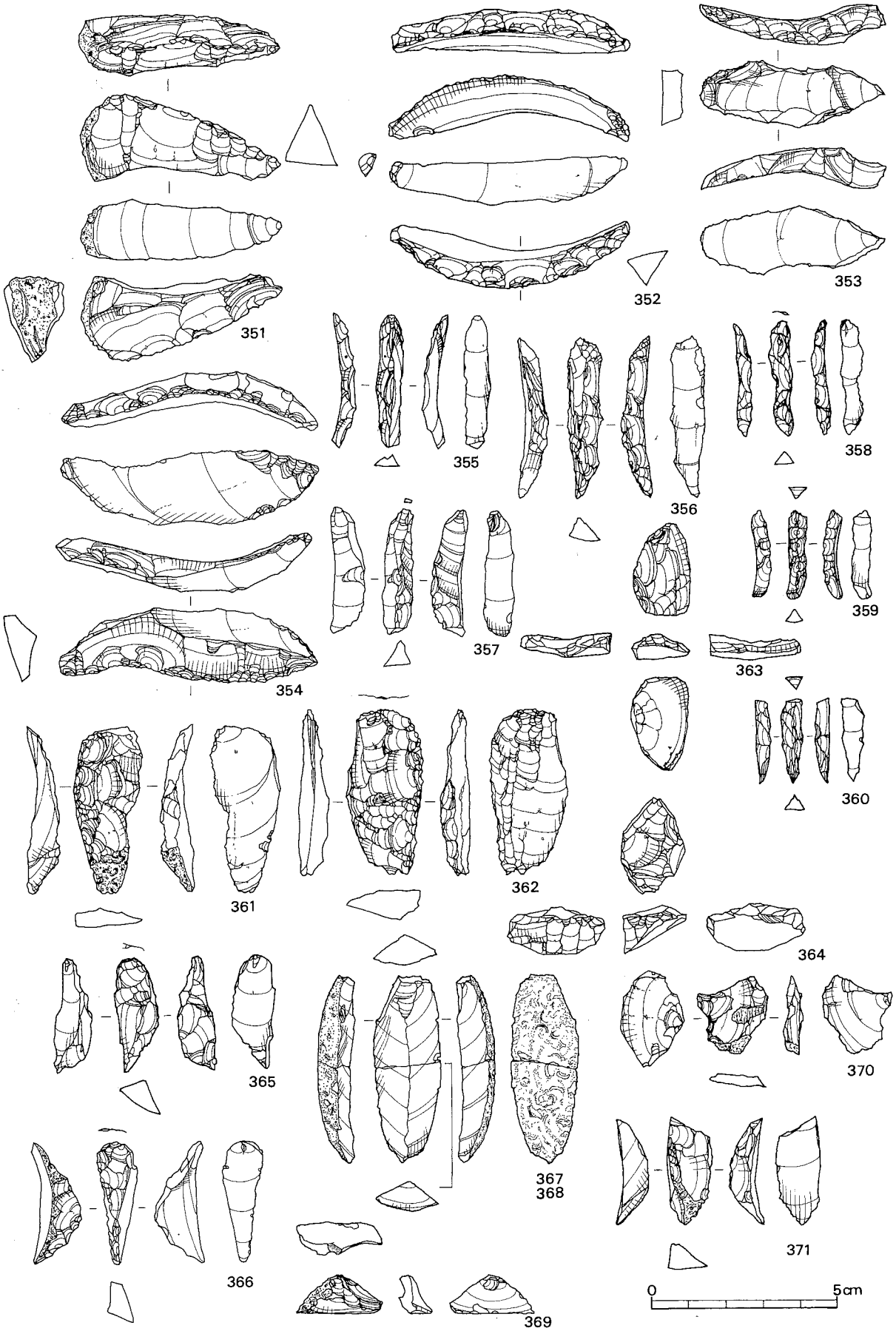
350はほとんど唯一といえる腰岳産黒曜石を素材とするものである。打面は単打面で調整はない。側面調整は打面から施され，片面は自然面である。いわゆる船野型のブランクとして位置付けたい。また出土地点はD－4区で遺物集中地点からはずれている。

④スポール（**351～357，367・368**）

351はやや粗い両面調整加工のブランクから剥出したもので，小口には自然面を残す。分厚い。**352**は片面調整のブランク（例えば**349**）から剥出したもので，調整は丁寧に施されている。**353**はセカンドスポール（スキースポール）で，先端部は掻器状の加工が付与されている。**354**もセカンドスポールと思われるが，ファーストスポールは図の右側から剥取されているが中央付近で終わっている。本例はスポールとして剥出した後，掻器に再加工されている。



第29図　第Ⅳ層石器群のブランク類



第30図　第Ⅳ層石器群の細石器関連石器

355～357はファーストスポールである。355・357は片面加工のブランクから，356は両面加工のブランクから剝出したものである。

367・368は349と接合する資料であることからスポールと認識した。

⑤細石刃剝離第一スポール（358～360）

細石刃剝離に先立って両面加工もしくは片面加工のブランクから剝取する最初のもの。稜線を有し，断面は三角形になる。総数では20数例出土しており，量的にもまとまっている。ここに図示した3例はいずれも両面加工と思われる。

⑥打面再生剝片（361～366・371）

361は細石刃剝離作業面側から加撃しており，横方向の打面調整が残る。側面は主要剝離面で，打面の先端部に自然面をもつ。362は361と同様な加撃・調整であるが，主要剝離面側に主軸方向に鱗状剝離が入っており，楔形石器に転用したものか。363は側面から剝取した横広の打面再生剝片である。横打調整が打面に残り，細石刃剝離作業面の一部がみられる。

364は小口に細石刃剝離作業面を入れるⅢ類の細石核の打面再生剝片である。加撃の位置は右側縁の上部であるが，剝離に失敗して斜めに剝離したものであろう。365・366は幅が薄い点が気になるが，いずれの例も横打の打面調整があり，スポール状に剝出して打面を再生したものと理解した。371は330の細石核に接合するスポール状のもの。打面には横打調整がみられ西海技法の範疇に含まれる。

⑦打面調整剝片（369・370）

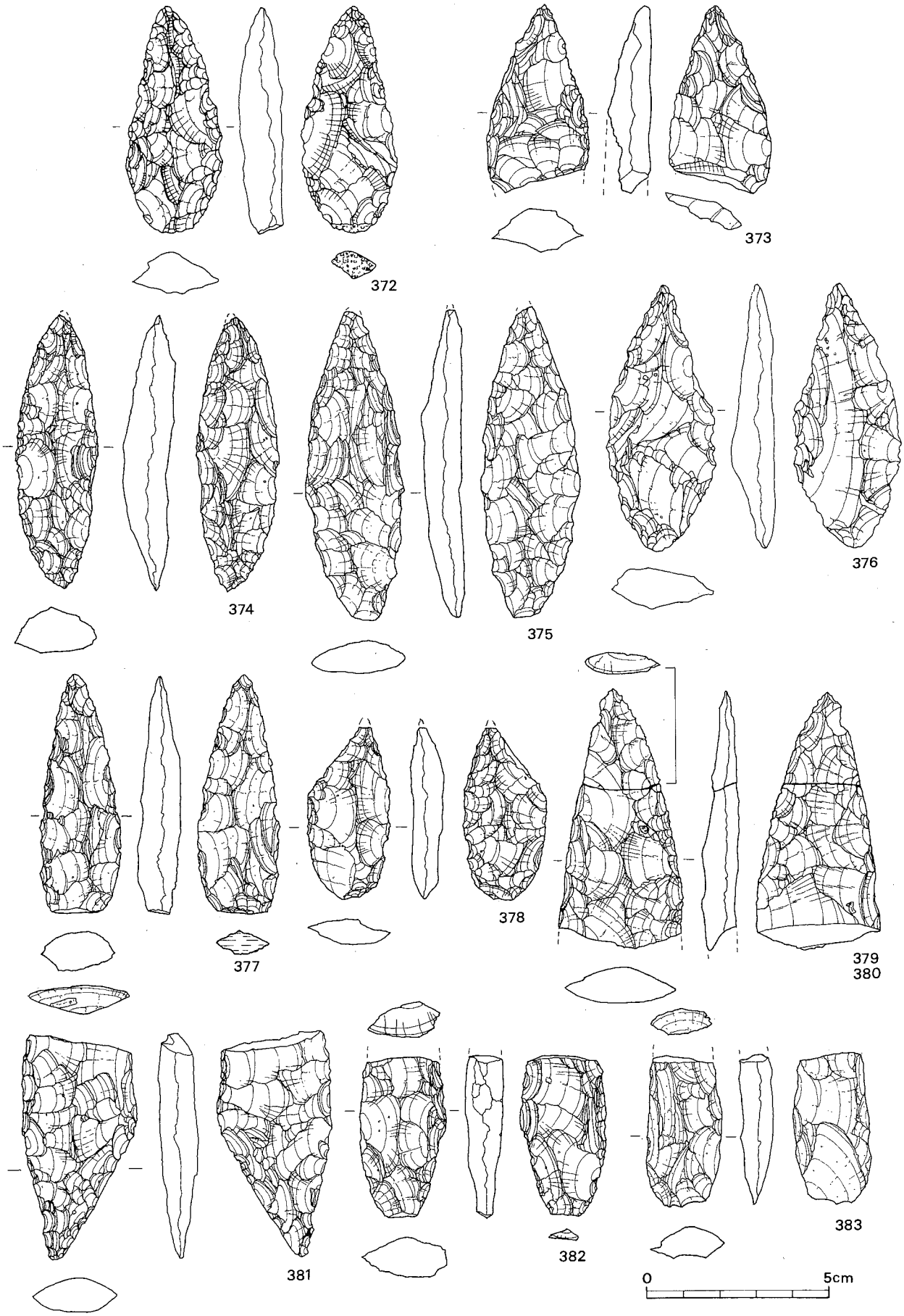
369・370はいずれも打面の横打調整の剝片である。側面から横打した横長の剝片もしくは砕片で西海技法に伴う調整剝片である。

⑧石槍（372～388）

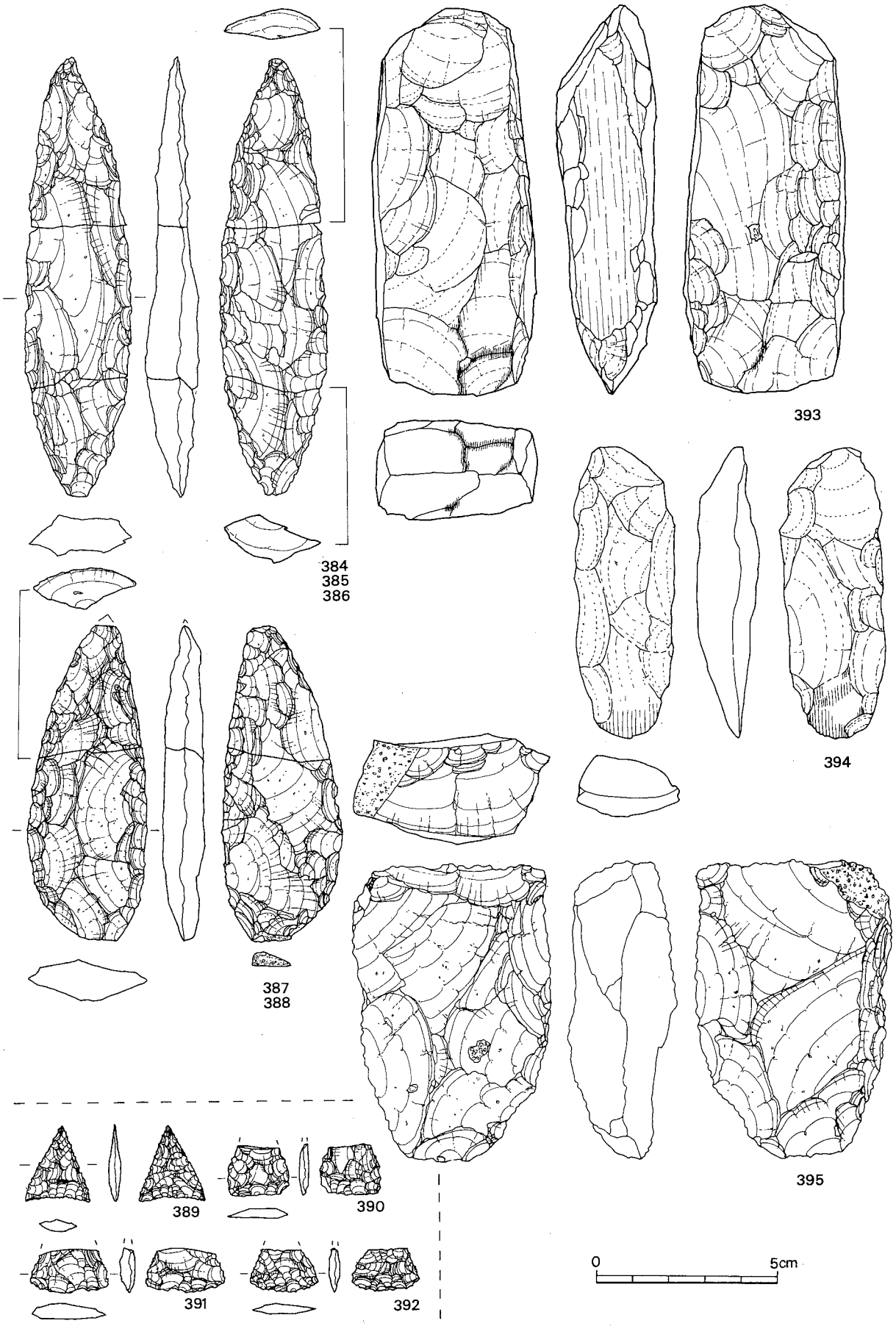
当該期の石器群の尖頭器を本報告書では石槍と呼ぶ。調整剝離はすべて鹿角などの軟質ハンマーと推測され，押圧による樋状剝離は認められない。

372・373は淀姫・針尾系黒曜石を素材とする。372は完形で，最大幅を胴下半部にもつ下膨れ状の木葉形を呈するが，基部に自然面を残している。長さに比して分厚い。373は肉眼的には亀岳産の黒曜石と思われる。本来は木葉形と思われるが，使用によって二折している。本例は折れた部分から先端部に向けて調整剝離が施され，機能的に異なったものに転用したものであろうか。その調整によって側面図からわかるように厚みが相当減じている。

374～388までは安山岩を素材とする。安山岩は一部に佐賀県多久周辺のものがあるが，大部分は県北吉井町福井洞穴周辺のものと思われる。374はわずかに先端を欠くもののほぼ完形である。最大幅を胴中心にもち，長さに比して分厚く細身の木葉形を呈する。375も先端部をわずかに欠するもの完形である。細身の断面が凸レンズ状をした木葉形で，最大幅を胴中央部にもつ。376はやや幅広の木葉形。最大幅の位置は胴下半部にあり，右側縁部は再調整によって若干内湾している。裏面には主要剝離面を大きく残しており，横長剝片を素材としている。377は細身の柳葉形で割に分厚い。基部は平坦な自然面である。378は折れた石槍のリダクションされた資料である。先端部は右に偏り対称とはならない。379・380は接合資料である。おそらく胴中央部で折損したものと思われる。残っている部分は先端部で二つに折れている。復元される姿は大形の木葉形石槍と推測される。381は基部。折損後の再調整を施した結果左右非対称となっている。382・383も基部。やや細身で丸みをもつ。384・385・386は接合によって完形となったもので，全長12.1cmを計り本遺跡で最長である。細身の木葉形を呈し，最大幅は胴中央部より若干基部側にとる。基部付近がやや肉厚になる傾向がある。387・388も接合で完形となったもので，先端部をわずかに欠する。左右非対称で半月形を呈する。基部には自然面を残す。



第31図　第Ⅳ層石器群の石槍①



第32図　第Ⅳ層石器群の石槍②，石鏃と局部磨製石斧

⑨石鏃（389～392）

草創期の石鏃として認識した石鏃は4点である。389は浅い凹基の石鏃で左側辺が若干膨らみ気味で左右非対称で二等辺三角形に近い形状のものである。丁寧な作りで，器厚は薄く，先端および脚部は尖り気味である。390～392は基部が丸みを帯びる浅い凸基の薄手の石鏃である。3点ともに先端部を欠損しているために全体の形状は不明である。

⑩局部磨製石斧（393・394）

393は頁岩製の石斧。両側縁は節理を利用しており，調整はみられない。表裏面ともに丁寧な調整剥離が施され，短冊状の平面形を作り出している。刃部は片刃で側面のほぼ中央の位置にある。調整剥離の稜線が潰れるような形で摩滅しており局部磨製石斧の範疇で理解することにした。394はC－2区第Ⅳ層からの表採品である。玄武岩を素材とするが相当に風化が進行しており，稜線や調整剥離の識別が困難である。福岡県門田遺跡に類品がある。

⑪礫器（395）

不純物を多めに含む質の余りよくない安山岩を素材とする。自然面をわずかに残す。交互にランダムな剥離を施して打製石斧のように仕上げるが，基部側にも裏面側から2回の調整剥離がみられる。

⑫掻・削器（396～403）

396は縦長の石刃状剥片を素材とする掻器。先端部の若干内湾気味の刃部を作り出しているが，定形的ではない。素材となった剥片は本遺跡でもっとも大きい。397は分厚い縦長剥片を使用した削器。素材は不純物を含む青灰色を呈する黒曜石である。398も縦長の刃部をもつ薄手の削器。自然面を大きく残す縦長剥片を用いている。399・400は縦長の削器。刃部は粗く，若干鋸歯状をなしている。401は若干尖頭状に仕上げた削器。402は刃部を上下両端にもつ削器。刃部の形成は丁寧である。403は裏面に上下から鱗状の剥離が入っているが，刃部はその後に施されている。404は自然面を残す縦長剥片を素材とする削器。上下両端は折断されている。405も自然面をもつ剥片を素材とする削器であるが，刃部の形成は弱い。406は若干幅広の剥片を使った削器。刃部の形成は弱い。

⑬オール（407・408）

両者ともに寸詰まりの剥片の先端部を折断して尖頭部を作りだしている。刃部は尖頭部にあり，その調整剥離は二辺からなされ，主要剥離面側には調整はなされず，先端の断面は三角形となる。407は淀姫・針尾系の，408は牟田系黒曜石を素材とする。

⑭楔形石器（409～411）

409はやや大形で，右側辺の加工は一見ブランクの打面調整にも見えるが，上下からの鱗状の剥離をもって楔形石器と判断した。410は楔形石器の使用時の剥片。右側辺には彫刀面のようなファシットがみえる。411は牟田系黒曜石を素材とする。上端は打面調整のために潰れている。

⑮加工痕のある剥片（412～414）

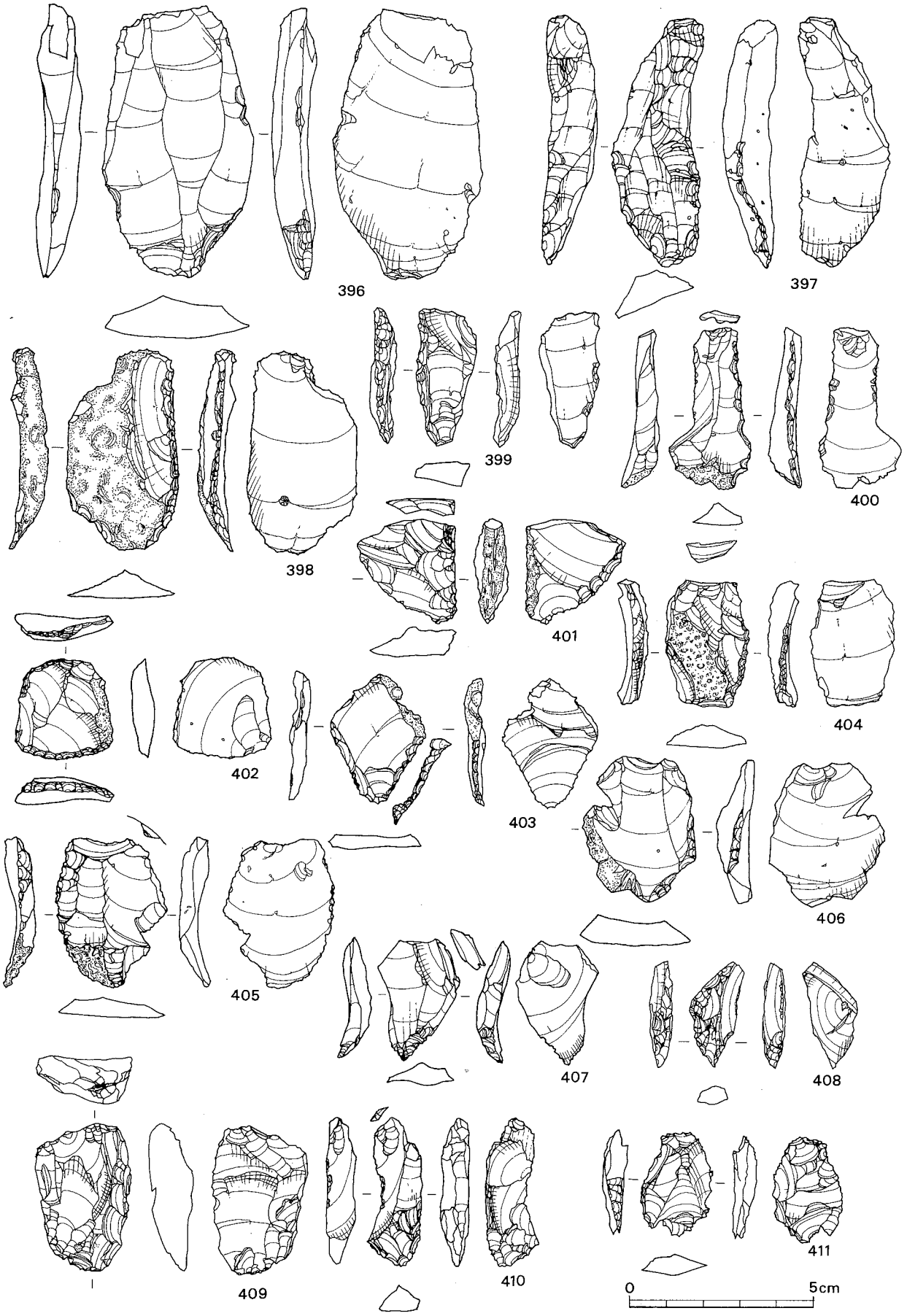
412は表面の大部分に自然面を残す縦長剥片で，右側辺先端部付近に削器状の加工痕がある。413は自然面を残す縦長剥片である。左側辺に加工痕が残る。414は縦長剥片を素材とし，剥片の先端部および左側辺に加工痕がみられる。

⑯使用痕のある剥片（415～417）

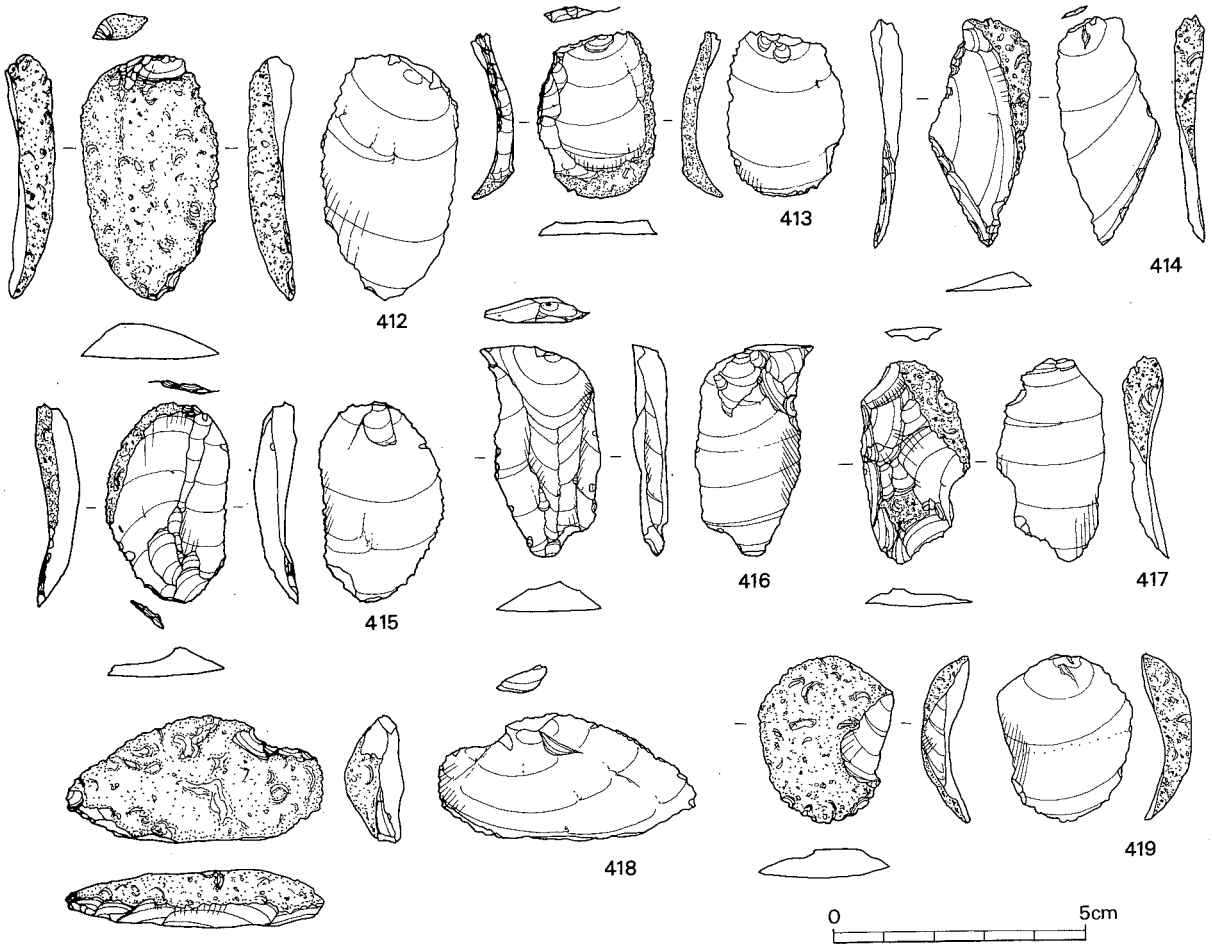
415は打面転移をした縦長剥片。左側辺に使用痕がある。416は牟田系黒曜石を素材とする。417は自然面をもつ縦長剥片を素材とする。

⑰剥片（418・419）

418は横長剥片。表面には自然面を残す。折断されている。419は自然面を大きく残す。



第33図　第Ⅳ層石器群のその他の石器①

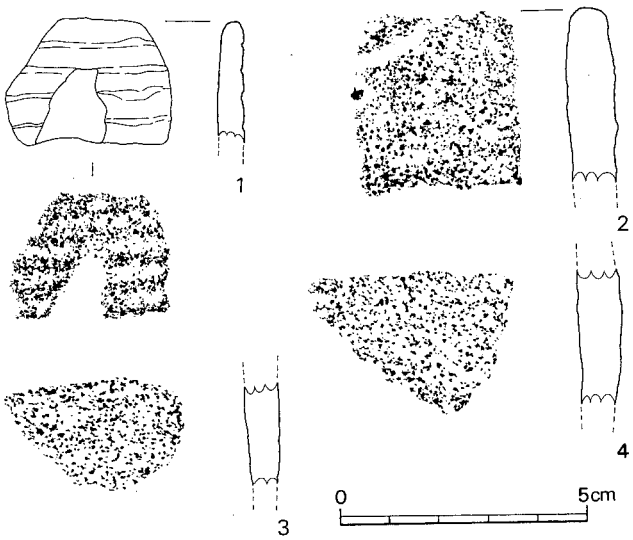


第34図　第Ⅳ層石器群のその他の石器②

(5)　縄文時代草創期の土器

縄文時代草創期のものと思われる土器が4点出土している。いずれも風化が激しく文様を識別することは困難だが，土器の胎土や焼成などの点から草創期のものと判断した。1は口縁部で，風化のためによくわからないが横走する幅の狭い沈線が看取される。器壁は薄い。2も口縁部破片であるが，文様はみられず無文部である。無文土器と呼ぶには資料が不足している。3・4は胴部破片である。いずれの土器も，色調は暗褐色を呈し，胎土には細かい砂粒を多く含む。その他角閃石や絹雲母などが混入する。

細石器と共伴した城ヶ岳平子遺跡の土器は，色調が暗褐色を呈し，胎土には砂粒を多く含んでいる。文様はやや幅広であまり高くない隆起線文や横走する押引文，無文などである。茶園遺跡には隆起線文らしきものはみられないが，横走する文様や無文は共通している。また胎土は瓜二つである。そうしたことから両遺跡の土器はほぼ同質・同時期のものとみられる。



第35図　縄文時代草創期の土器

番号	区	遺物番号	層位	標高(m)	器種	石材	部位	重さ(g)	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)
138	T3	1	IV	10.52	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	完形	0.47	3.54	0.65	0.15
139	C2	1217	IV	10.34	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	完形	0.67	3.27	0.68	0.25
140	C2	2224	IV	10.90	細石刃	牟田系黒曜石	完形	0.45	2.88	0.66	0.29
141	D3	289	IV	9.51	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	完形	0.38	2.71	0.69	0.23
142	C2	1946	IV	10.20	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	完形	0.29	2.53	0.74	0.23
143	D2	89	IV	9.83	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	完形	0.30	2.51	0.62	0.24
144	D2	575	IV	9.87	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	完形	0.51	3.13	0.81	0.22
145	C2	1033	IV	10.15	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	完形	0.33	2.88	0.78	0.13
146	C2	1997	IV	10.13	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	完形	0.55	2.46	1.04	0.28
147	C2	869	IV	10.43	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	完形	0.54	2.59	0.76	0.25
148	C2	1250	IV	10.37	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	完形	0.13	2.28	0.48	0.12
149	T3	47	IV	10.44	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	完形	0.13	1.89	0.39	0.16
150	D2	556	IV	10.03	細石刃	牟田系黒曜石	頭部	0.51	2.77	0.92	0.24
151	C2	2442	IV	9.95	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	頭部	0.61	3.05	0.76	0.28
152	C2	2047	IV	9.94	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	頭部	0.47	2.52	0.60	0.33
153	D4	25	IV	9.63	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	頭部	0.35	2.72	0.62	0.25
154	C2	1506	IV	10.15	細石刃	牟田系黒曜石	頭部	0.49	2.48	0.84	0.31
155	T3	86	IV	10.25	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	頭部	0.36	2.35	0.63	0.19
156	C2	1207	IV	10.37	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	頭部	0.26	2.18	0.70	0.17
157	C2	1323	IV	10.33	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	頭部	0.15	2.18	0.64	0.22
158	C2	1050	IV	10.26	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	頭部	0.27	2.12	0.62	0.22
159	C2	1910	IV	10.12	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	頭部	0.23	2.07	0.61	0.16
160	C2	1840	IV	10.19	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	頭部	0.14	2.10	0.48	0.13
161	C2	671	IV	10.43	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	頭部	0.22	2.10	0.62	0.20
162	C2	897	IV	10.30	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	頭部	0.16	2.07	0.52	0.16
163	T3	10	IV	10.50	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	頭部	0.44	2.89	0.62	0.21
164	D2	372	IV	9.74	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	頭部	0.49	2.69	0.65	0.28
165	D3	7	IV		細石刃	淀姫針尾系黒曜石	頭部	0.52	2.53	0.82	0.27
166	D3	283	IV	9.53	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	頭部	0.66	2.46	1.02	0.23
167	D2	175	IV	9.82	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	頭部	0.51	2.61	0.75	0.18
168	C2	787	IV	10.49	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	頭部	0.43	2.44	0.77	0.28
169	T3	50	IV	10.38	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	頭部	0.18	1.96	0.51	0.13
170	C2	1829	IV	10.21	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	頭部	0.29	2.26	0.80	0.14
171	D3	286	IV	9.56	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	頭部	0.31	2.32	0.59	0.29
172	C2	1311	IV	10.34	細石刃	牟田系黒曜石	頭部	0.29	2.18	0.79	0.21
173	C2	1763	IV	10.13	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	頭部	0.45	2.27	0.75	0.28
174	C2	1302	IV	10.34	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	頭部	0.33	2.02	0.84	0.19
175	C2	2217	IV	10.03	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	頭部	0.12	1.69	0.48	0.14
176	C2	889	IV	10.34	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	頭部	0.10	1.60	0.42	0.16
177	C2	921	IV	10.45	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	先端部	0.77	2.85	0.80	0.34
178	D3	873	IV	9.53	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	先端部	0.63	3.22	0.63	0.33
179	T3	52	IV	10.36	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	先端部	0.43	1.41	0.77	0.19
180	D2	291	IV	9.67	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	先端部	0.58	2.76	0.65	0.35
181	C2	1875	IV	10.18	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	先端部	0.41	2.56	0.78	0.24
182	C2	702	IV	10.34	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	先端部	0.32	2.25	0.63	0.16
183	C2	2079	IV	10.17	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	中間部	0.36	2.48	0.57	0.19
184	C2	1140	IV	10.31	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	中間部	0.44	2.70	0.77	0.17
185	C2	1085	IV	10.38	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	中間部	0.47	2.13	0.93	0.34
186	C2	2112	IV	10.08	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	中間部	0.46	2.34	0.69	0.23
187	C2	1453	IV	10.28	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	中間部	0.25	2.14	0.58	0.22
188	C2	2179	IV	9.93	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	中間部	0.28	1.95	0.72	0.19
189	C2	1965	IV	10.15	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	中間部	0.23	2.23	0.54	0.18
190	C2	2111	IV	10.12	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	中間部	0.27	1.99	0.68	0.23
191	T3	4	IV	10.46	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	中間部	0.28	2.02	0.65	0.15
192	D3	740	IV	9.64	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	中間部	0.35	1.82	0.61	0.27
193	C2	1234	IV	10.33	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	中間部	0.27	1.82	0.69	0.20
194	D2	361	IV	9.71	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	中間部	0.36	1.66	0.80	0.19
195	C2	971	IV	10.45	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	中間部	0.27	1.68	0.88	0.21
196	C2	1108	IV	10.41	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	中間部	0.14	1.60	0.53	0.15
197	C2	1811	IV	10.10	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	中間部	0.33	2.11	0.85	0.19
198	C2	1388	IV	10.09	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	中間部	0.21	1.76	0.72	0.14
199	C2	2491	IV	9.90	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	中間部	0.32	1.64	0.70	0.26
200	C2	1172	IV	10.39	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	中間部	0.21	1.72	0.59	0.22
201	D2	400	IV	9.75	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	中間部	0.13	1.59	0.65	0.16
202	C2	1256	IV	10.32	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	中間部	0.24	1.69	0.45	0.24
203	T3	23	IV	10.56	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	中間部	0.08	1.55	0.45	0.11
204	C2	2093	IV	9.99	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	中間部	0.27	1.62	0.85	0.20
205	C2	1765	IV	10.15	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	中間部	0.45	1.32	1.06	0.28
206	T3	33	IV	10.46	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	中間部	0.21	1.69	0.62	0.16
207	C2	1858	IV	10.07	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	中間部	0.22	1.48	0.70	0.19
208	C2	1244	IV	10.35	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	中間部	0.20	1.29	0.81	0.17
209	C2	2193	IV	10.14	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	中間部	0.05	1.51	0.39	0.13
210	C2	798	IV	10.41	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	中間部	0.08	1.20	0.47	0.13
211	C2	1658	IV	10.22	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	中間部	0.31	1.46	0.92	0.22
212	C2	2451	IV	9.95	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	中間部	0.27	1.55	0.72	0.21
213	C2	1167	IV	10.18	細石刃	牟田系黒曜石	中間部	0.27	1.53	0.78	0.22
214	C2	2020	IV	10.07	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	中間部	0.11	1.50	0.58	0.12
215	C2	1034	IV	10.18	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	中間部	0.16	1.33	0.62	0.19
216	C2	1486	IV	10.19	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	中間部	0.21	1.12	0.73	0.23
217	C2	2059	IV	10.06	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	中間部	0.12	1.01	0.55	0.20
218	C2	1498	IV	10.12	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	中間部	0.12	1.24	0.61	0.17
219	C2	1704	IV	10.27	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	中間部	0.05	1.13	0.47	0.14
220	C2	1408	IV	10.32	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	中間部	0.05	1.13	0.54	0.12
221	C2	2081	IV	10.13	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	中間部	0.04	0.81	0.46	0.12
222	D2	269	IV	9.78	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	中間部	0.09	0.91	0.59	0.16
223	T3	40	IV	10.42	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	中間部	0.08	0.97	0.52	0.13
224	T3	14	IV	10.48	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	中間部	0.06	0.95	0.47	0.12
225	C2	1977	IV	9.94	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	中間部	0.12	0.92	0.57	0.17
226	C2	973	IV	10.46	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	中間部	0.17	1.43	0.77	0.11
227	C2	795	IV	10.52	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	中間部	0.20	1.66	0.64	0.21
228	C2	1869	IV	10.15	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	中間部	0.10	1.31	0.58	0.20
229	C2	991	IV	10.34	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	中間部	0.17	1.27	0.62	0.17
230	C2	1701	IV	10.25	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	中間部	0.18	1.12	0.64	0.21
231	C2	1817	IV	10.22	細石刃	牟田系黒曜石	中間部	0.07	0.98	0.62	0.10
232	C2	1294	IV	10.27	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	中間部	0.03	0.82	0.55	0.10

第5表　遺物計測表③

番号	区	遺物番号	層位	標高(m)	器種	石材	部位	重さ(g)	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)
233	T3	81	IV	10.24	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	中間部	0.29	1.47	0.87	0.18
234	T3	73	IV	10.41	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	中間部	0.24	1.45	0.95	0.15
235	C2	1508	IV	10.16	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	中間部	0.26	1.48	0.74	0.22
236	C2	1201	IV	10.37	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	中間部	0.16	1.35	0.69	0.20
237	C2	738	IV	10.55	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	中間部	0.15	1.23	0.81	0.16
238	C2	735	IV	10.55	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	中間部	0.13	1.25	0.63	0.18
239	D2	305	IV	9.75	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	中間部	0.14	1.02	0.72	0.15
240	C2	1320	IV	10.31	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	中間部	0.32	1.74	0.82	0.21
241	T3	6	IV	10.48	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	中間部	0.15	1.33	0.78	0.15
242	T3	53	IV	10.52	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	中間部	0.22	1.41	0.77	0.19
243	C2	1402	IV	10.30	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	中間部	0.25	1.20	0.80	0.22
244	C2	1031	IV	10.22	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	中間部	0.15	1.31	0.67	0.20
245	C2	1644	IV	10.18	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	中間部	0.05	1.00	0.55	0.11
246	C2	1238	IV	10.35	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	中間部	0.09	1.18	0.58	0.12
247	C2	839	IV	10.49	細石刃	牟田系黒曜石	中間部	0.30	1.73	1.07	0.18
248	C2	1950	IV	10.19	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	中間部	0.26	1.44	0.79	0.27
249	C2	748	IV	10.42	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	中間部	0.11	1.48	0.77	0.12
250	C2	962	IV	10.13	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	中間部	0.13	1.06	0.69	0.18
251	C2	767	IV	10.54	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	中間部	0.10	1.39	0.54	0.19
252	C2	1020	IV	10.30	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	中間部	0.10	1.10	0.59	0.14
253	C2	1130	IV	10.36	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	中間部	0.06	1.05	0.62	0.13
254	C2	951	IV	10.19	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	中間部	0.19	1.52	0.68	0.17
255	C2	1778	IV	10.07	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	中間部	0.21	1.33	0.87	0.20
256	C2	948	IV	10.18	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	中間部	0.16	1.18	0.93	0.22
257	C2	2054	IV	10.00	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	中間部	0.09	1.33	0.56	0.15
258	C2	1019	IV	10.32	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	中間部	0.13	1.28	0.66	0.18
259	C2	1876	IV	10.19	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	中間部	0.09	1.21	0.54	0.16
260	C2	1285	IV	10.31	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	中間部	0.15	0.94	0.73	0.23
261	T3	41	IV	10.53	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	頭部	0.45	2.03	1.03	0.22
262	D3	131	IV	9.41	細石刃	牟田系黒曜石	頭部	0.46	2.10	0.88	0.22
263	D3	857	IV	9.63	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	頭部	0.54	1.78	1.14	0.27
264	C2	1307	IV	10.34	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	頭部	0.40	1.63	1.08	0.30
265	C2	1820	IV	10.21	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	頭部	0.25	1.52	0.77	0.19
266	C2	857	IV	10.47	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	頭部	0.22	1.38	0.77	0.19
267	D4	41	IV	9.41	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	頭部	0.35	2.24	0.70	0.22
268	C2	979	IV	10.44	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	頭部	0.33	1.84	0.89	0.24
269	T3	77	IV	10.37	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	頭部	0.39	2.01	0.90	0.30
270	D3	725	IV	9.66	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	頭部	0.79	1.98	1.00	0.32
271	D2	402	IV	9.69	細石刃	牟田系黒曜石	頭部	0.30	1.71	0.97	0.16
272	C2	750	IV	10.47	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	頭部	0.33	1.79	0.73	0.22
273	T3	65	IV	10.40	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	頭部	0.38	1.92	0.87	0.20
274	C2	2120	IV	10.15	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	頭部	0.26	1.82	0.77	0.20
275	C2	965	IV	10.09	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	頭部	0.34	1.65	0.88	0.26
276	D3	761	IV	9.85	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	頭部	0.26	1.78	0.72	0.20
277	C2	1973	IV	10.04	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	頭部	0.35	1.60	0.83	0.19
278	C2	662	IV	10.58	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	頭部	0.21	1.41	0.86	0.24
279	C2	730	IV	10.54	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	頭部	0.11	1.22	0.74	0.14
280	C2	1715	IV	10.21	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	頭部	0.33	1.59	0.93	0.22
281	T3	59	IV	10.38	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	頭部	0.24	1.60	0.60	0.25
282	C2	930	IV	10.41	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	頭部	0.25	1.62	0.66	0.24
283	C2	2180	IV	9.95	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	頭部	0.20	1.19	0.81	0.21
284	C2	2048	IV	9.96	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	頭部	0.16	1.62	0.62	0.20
285	C2	1409	IV	10.29	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	頭部	0.15	1.47	0.68	0.16
286	C2	1953	IV	10.19	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	頭部	0.12	1.31	0.62	0.20
287	T3	74	IV	10.29	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	頭部	0.41	2.16	0.75	0.28
288	T3	2	IV	10.48	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	頭部	0.40	2.09	0.68	0.28
289	C2	1774	IV	10.07	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	頭部	0.16	1.60	0.69	0.16
290	C2	1802	IV	9.98	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	頭部	0.17	1.41	0.77	0.17
291	C2	1660	IV	10.20	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	頭部	0.13	1.57	0.62	0.16
292	C2	982	IV	10.45	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	頭部	0.09	1.17	0.68	0.16
293	C2	2122	IV	10.12	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	頭部	0.20	1.60	0.57	0.24
294	T3	16	IV	10.54	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	頭部	0.19	1.84	0.69	0.14
295	T3	69	IV	10.41	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	頭部	0.13	1.79	0.53	0.12
296	T3	15	IV	10.54	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	頭部	0.20	1.78	0.77	0.15
297	C2	1043	IV	10.16	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	頭部	0.12	1.45	0.61	0.18
298	C2	1326	IV	10.36	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	頭部	0.15	1.40	0.64	0.17
299	T3	37	IV	10.43	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	頭部	0.13	1.34	0.65	0.12
300	C2	745	IV	10.43	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	頭部	0.20	1.19	0.71	0.19
301	C2	1596	IV	10.26	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	頭部	0.11	1.01	0.68	0.17
302	D3	784	IV	9.61	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	頭部	0.14	1.26	0.61	0.19
303	C2	1005	IV	10.42	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	頭部	0.05	1.14	0.55	0.12
304	C2	609	IV	10.60	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	頭部	0.13	1.31	0.54	0.20
305	C2	2114	IV	10.03	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	頭部	0.23	1.54	0.45	0.33
306	C2	769	IV	10.59	細石刃	牟田系黒曜石	頭部	0.09	1.56	0.47	0.15
307	C2	2077	IV	10.17	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	頭部	0.05	1.05	0.45	0.13
308	C2	2080	IV	10.16	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	先端部	0.24	1.90	0.79	0.16
309	D3	718	IV	9.73	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	先端部	0.46	1.58	0.93	0.34
310	C2	708	IV	10.29	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	先端部	0.22	1.44	0.83	0.22
311	D3	18	IV	9.78	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	先端部	0.28	1.33	0.76	0.33
312	C2	1844	IV	10.19	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	先端部	0.21	1.32	0.72	0.25
313	C2	1904	IV	10.06	細石刃	牟田系黒曜石	先端部	0.14	1.16	0.77	0.16
314	C2	606	IV	10.62	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	先端部	0.11	0.89	0.68	0.19
315	C2	1002	IV	10.35	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	先端部	0.18	1.76	0.63	0.22
316	C2	1243	IV	10.36	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	先端部	0.22	1.66	0.59	0.31
317	C2	1344	IV	10.32	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	先端部	0.24	1.64	0.57	0.31
318	C2	959	IV	10.26	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	先端部	0.09	1.69	0.48	0.15
319	C2	895	IV	10.27	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	先端部	0.19	1.57	0.69	0.18
320	C2	1090	IV	10.27	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	先端部	0.10	1.38	0.55	0.18
321	D2	123	IV	9.78	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	先端部	0.20	1.99	0.85	0.16
322	C2	969	IV	10.07	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	先端部	0.15	1.99	0.46	0.13
323	D3	754	IV	9.74	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	先端部	0.14	1.51	0.58	0.22
324	C2	1667	IV	10.19	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	先端部	0.09	1.59	0.39	0.18
325	C2	1947	IV	10.21	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	先端部	0.05	1.19	0.50	0.09
326	C2	1072	IV	10.44	細石刃	淀姫針尾系黒曜石	先端部	0.07	1.23	0.40	0.13

第5表　遺物計測表③（つづき）

番号	区	遺物番号	層位	標高(m)	器種	石質	重さ(g)	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	備考
327	T1	14	IV		細石核	淀姫針尾系黒曜石	7.77	2.81	1.08	2.56	
328	D3	760	IV	9.83	細石核	牟田系黒曜石	9.35	2.19	2.74	1.39	C2-1116＋C3-223と接合・自然面
329	C3	619	IV	9.61	細石核	牟田系黒曜石	5.24	2.56	1.10	1.92	D3-253と接合・自然面
330	C2	1576	IV	10.19	細石核	淀姫針尾系黒曜石	8.06	3.36	1.45	1.60	C2-696＋C2-1771と接合・自然面
331	C3	186	IV	9.83	細石核	淀姫針尾系黒曜石	2.88	2.50	0.99	1.37	背縁調整・打面調整なし
332	D2	134	IV	9.70	細石核	淀姫針尾系黒曜石	23.58	4.36	1.84	3.06	打面調整は面取端から・自然面
333	D2	80	IV	9.86	細石核	淀姫針尾系黒曜石	9.04	2.57	1.36	2.18	背面は主要剥離面
334	D3	499	IV	9.32	細石核	淀姫針尾系黒曜石	9.30	3.43	1.05	2.22	小口に面取端・自然面
335	C3	504	IV	9.75	細石核	淀姫針尾系黒曜石	4.14	2.59	1.18	2.15	片面は主要剥離面・自然面にはスクレイパーエッジ
336	C2	834	IV	10.51	細石核	牟田系黒曜石	2.88	1.76	1.67	1.38	自然面
337	C2	1158	IV	10.13	細石核	淀姫針尾系黒曜石	2.93	1.74	1.75	0.89	自然面
338	C2	2040	IV	9.89	細石核	淀姫針尾系黒曜石	14.70	2.71	2.48	2.23	野岳型・打面調整あり・自然面
339	C2	1734	IV	10.09	細石核	淀姫針尾系黒曜石	14.57	2.68	2.47	2.88	被熱
340	C2	1442	IV	10.27	細石核	淀姫針尾系黒曜石	7.52	2.18	1.84	2.54	自然面
341	C2	910	IV	10.49	ブランク	淀姫針尾系黒曜石	11.53	3.54	2.68	1.34	下端調整あり
342	C2	766	IV	10.35	ブランク	淀姫針尾系黒曜石	9.28	2.50	1.24	3.19	
343	C2	1474	IV	10.23	ブランク	淀姫針尾系黒曜石	19.60	4.45	3.21	1.37	自然面
344	C3	408	V	9.78	ブランク	淀姫針尾系黒曜石	15.76	4.78	2.93	1.18	両面調整で丁寧
345	D2	75	IV	9.84	ブランク	淀姫針尾系黒曜石	12.30	4.10	2.86	1.17	自然面
346	C2	1291	IV	10.23	ブランク	牟田系黒曜石	20.91	3.92	5.04	1.12	自然面
347	C3	表採			ブランク	淀姫針尾系黒曜石	45.55	6.79	4.12	1.59	
348	C3	333	IV	9.64	ブランク	牟田系黒曜石	6.29	2.60	2.49	1.04	自然面
349	C2	2531	IV	9.95	ブランク	牟田系黒曜石	24.79	5.43	3.17	1.28	自然面
350	D4	51	IV	9.30	ブランク	腰岳産黒曜石	25.24	3.38	4.92	2.58	自然面・船野型
351	C2	2455	IV	9.90	スポール	淀姫針尾系黒曜石	13.87	5.48	1.64	2.11	自然面
352	C2	678	IV	10.54	スポール	淀姫針尾系黒曜石	6.51	6.47	1.18	0.92	調整は片面
353	D3	92	IV	9.55	スポール	淀姫針尾系黒曜石	7.18	5.00	1.71	0.93	スクレイパーに再加工・セカンドスポール
354	C2	2131	IV	10.06	スポール	淀姫針尾系黒曜石	11.02	6.91	1.99	0.86	スポールをスクレイパーに転用・先端はドリルか
355	D3	554	IV	9.31	ファーストスポール	淀姫針尾系黒曜石	0.89	3.58	0.71	0.42	
356	D2	283	IV	9.78	ファーストスポール	淀姫針尾系黒曜石	1.86	4.31	0.93	0.56	
357	C2	837	IV	10.54	ファーストスポール	淀姫針尾系黒曜石	1.90	3.38	0.77	0.72	
358	C2	797	IV	10.41	ファーストスポール	淀姫針尾系黒曜石	0.47	3.08	0.53	0.33	
359	C2	1921	IV	10.99	ファーストスポール	淀姫針尾系黒曜石	0.39	2.38	0.44	0.34	
360	D3	548	IV	9.34	ファーストスポール	淀姫針尾系黒曜石	0.40	2.28	0.50	0.50	
361	D3	338	IV	9.40	打面再生剥片	淀姫針尾系黒曜石	4.81	4.56	1.81	0.90	面取端から
362	D3	540	IV	9.36	打面再生剥片	淀姫針尾系黒曜石	6.44	4.53	2.20	0.77	長軸方向
363	C2	2235	IV	10.12	打面再生剥片	淀姫針尾系黒曜石	2.14	2.55	1.58	0.46	面取端の一部をもつ
364	C2	723	IV	10.57	打面再生剥片	淀姫針尾系黒曜石	3.97	0.93	2.61	1.64	背面側から
365	C2	2565	IV	9.90	打面再生剥片	淀姫針尾系黒曜石	1.95	3.08	1.08	0.73	スポール的
366	C2	1969	IV	10.09	打面再生剥片	淀姫針尾系黒曜石	2.17	3.23	1.02	1.01	自然面
367	D3	363	IV	9.38	スポール	牟田系黒曜石	3.95	2.44	1.85	0.88	D2-574と接合・自然面
368	D2	574	IV	9.79	スポール	牟田系黒曜石	3.48	2.84	1.79	0.84	D3-363と接合・自然面
369	D3	253	IV	9.35	打面調整剥片	牟田系黒曜石	1.01	1.23	2.27	0.42	接合・自然面
370	C2	696	IV	10.4	打面調整剥片	淀姫針尾系黒曜石	0.94	1.89	2.22	0.33	
371	C2	1771	IV	10.11	打面再生剥片	淀姫針尾系黒曜石	2.09	2.89	1.25	0.68	
372	T3	64	IV	10.32	石槍	淀姫針尾系黒曜石	17.69	6.35	2.64	1.21	
373	C2	1133	IV	10.35	石槍	淀姫針尾系黒曜石	12.65	5.13	2.93	1.16	折損した後再生
374	C2	2289	IV	10.37	石槍	安山岩	20.16	7.57	2.26	1.40	断面は三角形に近い
375	C2	IV層表採	IV		石槍	安山岩	22.25	8.50	2.68	1.09	
376	C2	2128	IV	10.15	石槍	安山岩	19.87	7.36	3.04	1.11	多孔質
377	D3	396	IV	9.30	石槍	安山岩	15.33	6.57	2.27	1.00	分厚い・基部は自然面
378	C2	2683	IV	9.78	石槍	安山岩	9.12	4.84	2.36	0.80	非対称・先端部再生
379	D2	328	IV	9.77	石槍	安山岩	3.18	2.89	2.03	0.68	先端部・C2-1209と接合
380	C2	1209	IV	10.33	石槍	安山岩	17.92	4.60	3.36	1.04	中間部・D2-328と接合
381	C3	表採			石槍	安山岩	19.03	6.06	3.19	0.96	基部
382	B3	263	IV	10.75	石槍	安山岩	13.88	4.60	2.41	1.13	基部
383	D3	329	IV	9.49	石槍	安山岩	9.21	4.16	2.06	0.93	基部
384	D2	11	IV	10.05	石槍	安山岩	8.38	4.63	2.59	0.79	先端部・C2-1292（中間）＋C2-2096（末端）と接合
385	C2	1292	IV	10.33	石槍	安山岩	22.34	4.72	3.00	1.30	中間部・C2-2096（末端）＋D2-11と接合
386	C2	2096	IV	9.95	石槍	安山岩	7.87	3.73	2.65	1.21	D2-11＋C2-1292と接合
387	C2	650	IV	10.61	石槍	安山岩	9.18	3.70	2.78	1.10	先端・CHA-3-7と接合して関係・半月形
388	T3	7	IV	10.50	石槍	安山岩	23.94	5.32	3.26	1.13	
389	C3		III		石鏃	淀姫針尾系黒曜石	0.70	2.04	1.77	0.33	
390	D3	30	IV	9.59	石鏃	淀姫針尾系黒曜石	0.64	1.37	1.65	0.24	
391	C3	141	IV	9.89	石鏃	淀姫針尾系黒曜石	1.00	1.19	2.13	0.35	
392		表採			石鏃	牟田系黒曜石	0.52	1.13	1.82	0.27	
393	C1	47	IV	10.26	局部磨製石斧	頁岩	198.33	10.57	4.37	2.74	
394	C2	表採	IV		局部磨製石斧	玄武岩	37.43	7.94	2.70	1.39	
395	T3	表採	IV		礫器	安山岩	140.52	8.18	5.23	2.70	
396	D2	18	IV	10.14	スクレイパー	淀姫針尾系黒曜石	29.29	7.39	4.01	1.01	
397	C2	1165	IV	10.22	スクレイパー	淀姫針尾系黒曜石	15.00	6.87	2.54	1.05	
398	D2	577	IV	9.88	スクレイパー	淀姫針尾系黒曜石	10.99	5.60	3.02	0.67	自然面
399	C2	1492	IV	10.12	スクレイパー	淀姫針尾系黒曜石	3.75	3.70	1.62	0.58	サイド
400	C2	929	IV	10.43	スクレイパー	淀姫針尾系黒曜石	4.72	4.42	2.21	0.72	サイド自然面
401	D3	126	IV	9.40	スクレイパー	淀姫針尾系黒曜石	6.00	3.27	2.61	0.81	自然面
402	C2	1069	IV	10.44	スクレイパー	淀姫針尾系黒曜石	5.08	2.63	2.74	0.67	サイド・二側辺に自然面
403	C2	2061	IV	10.11	スクレイパー	淀姫針尾系黒曜石	3.13	3.53	2.63	0.45	自然面
404	C2	1523	IV	10.32	スクレイパー	淀姫針尾系黒曜石	5.44	3.42	2.29	0.54	サイド自然面
405	T3	39	IV	10.44	スクレイパー	淀姫針尾系黒曜石	6.63	4.02	3.02	0.67	
406	C2	1317	IV	10.35	スクレイパー	淀姫針尾系黒曜石	9.26	3.90	3.01	0.81	自然面
407	C2	2072	IV	10.15	オール	淀姫針尾系黒曜石	3.41	3.44	2.24	0.53	
408	D2	179	IV	9.76	オール	牟田系黒曜石	1.94	2.93	1.28	0.63	
409	C2	1987	IV	10.14	楔形石器	淀姫針尾系黒曜石	11.79	4.14	2.54	1.13	
410	C2	1735	IV	10.17	楔形石器	淀姫針尾系黒曜石	3.94	4.10	1.36	0.74	
411	C2	1477	IV	10.24	楔形石器	牟田系黒曜石	2.49	2.95	1.91	0.56	
412	C2	2143	IV	10.03	加工痕のある剥片	淀姫針尾系黒曜石	9.38	4.89	2.67	0.88	自然面
413	C2	1957	IV	10.16	加工痕のある剥片	淀姫針尾系黒曜石	3.64	3.36	2.39	0.51	自然面
414	C2	1697	IV	10.21	使用痕のある剥片	淀姫針尾系黒曜石	2.54	4.53	1.91	0.49	自然面
415	C2	1114	IV	10.37	使用痕のある剥片	淀姫針尾系黒曜石	4.97	3.97	2.43	0.50	自然面
416	C2	1120	IV	10.19	使用痕のある剥片	牟田系黒曜石	5.64	4.31	2.08	0.65	
417	C2	987	IV	10.43	使用痕のある剥片	淀姫針尾系黒曜石	3.69	3.99	2.21	0.64	縦長・自然面
418	C2	2117	IV	10.13	剥片	淀姫針尾系黒曜石	13.29	2.49	5.13	1.10	自然面
419	C2	2223	IV	10.12	使用痕のある剥片	牟田系黒曜石	5.05	3.32	2.66	0.64	自然面

第5表　遺物計測表③（つづき）

第４章　縄文時代早期文化

第１節　土　　器

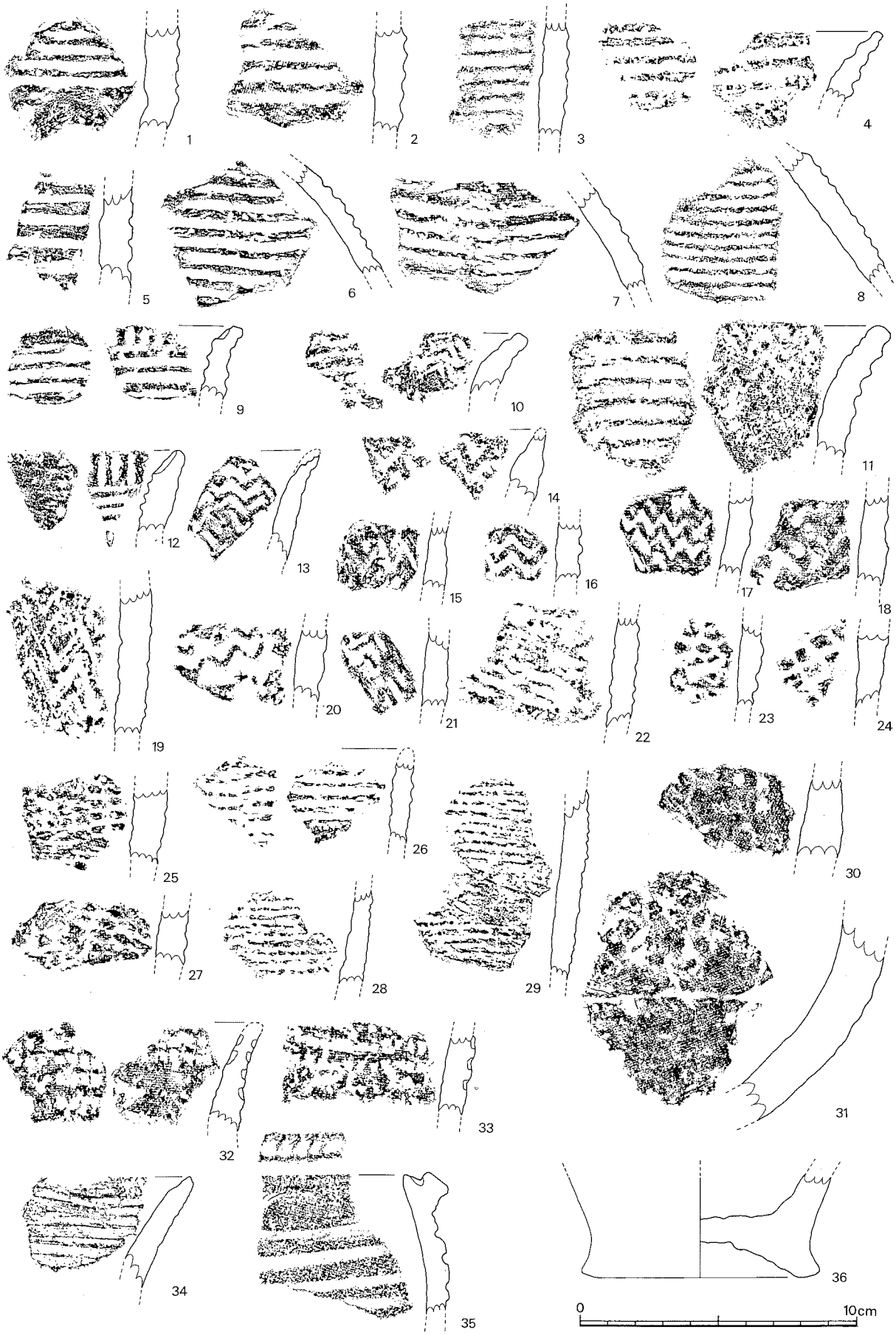
総数1,842点が出土した。大半は摩耗，剝落が著しく文様の判別できる資料は249点（約14％）に過ぎない。包含層は第Ⅲ層を主体とするが，第Ⅱ層および第Ⅲ′層上部からも混在的な出土がある。グリッド別ではＣ－３区が860点と圧倒的に多く，全体の約47％を占める。時期的には後期に属するものもあるが微量であり，大部分は胎土・焼成に強い共通性が認められる。これは平面分布における偏在性とともに時間的な限定性を示唆しているものと思われ，押型文土器が少なからず含まれていることから早期に帰属させることができよう。

この土器群の色調は，赤褐色，暗赤褐色，橙褐色，淡褐色，灰褐色など変化に富むが，内部は灰褐色～暗黒褐色である。胎土は良質の粘土を用いており，焼成は良好なものが多い。淘汰された石英粒や角閃石を含む資料もみられるが総じて混和剤は少ない。最大の特徴は多孔質になっている点である。内外面ともに虫食い状の間隙が多く，なかには豆粒大の凹みをなすものもある。いわゆる繊維土器の可能性が高いが，現時点での断定は避けたい。以下，沈線文系土器群（第Ⅰ類）と押型文土器群（第Ⅱ類）とに大別して記述する。

第Ⅰ類：外面に沈線または結節沈線が施文されるものを一括する。文様の識別できる資料としては最も多い。内面の施文によりⅠａ～Ⅰｄ類に細別される。Ⅰａ類（**4**）は内面に横走沈線を施すもの。Ⅰｂ類（**9**・**12**）は口縁内面に原体条痕と思われる縦走短沈線を，その下位に横走沈線を施すものである。**12**は外面の傷みが激しく，沈線が拓影に表現されていない。Ⅰｃ類（**10**・**11**）は口縁内面に山形押型文を施文するものである。11は大きく外反する口縁部で内面に比較的粗雑な山形文を，10は繊細な山形文を施している。いずれも原体条痕は施されず押型文のみの施文である。Ⅰｄ類（**1**～**3**，**5**～**8**）は胴部破片のため内面文様の有無が不明なものである。基本的に横走施文だが，**3**のように沈線の間隔が密で沈線間が微隆起状をなすものや，**5**のように間の空いたものなど変化に富む。**1**は現存４条の沈線が描かれており，その下位は無文であることから文様帯は口縁部～胴上半部に限られている可能性がある。**6**～**8**は拓影での沈線が緩い弧状を呈するもので，かなり内傾する部位と思われる。断定はできないが，壺形土器の肩部になる可能性もあろう。いずれも器面の風化が進んでいるため施文についての観察は正確性を欠くが，**2**・**8**は沈線が微波状を呈しており押引き状の技法による結節沈線と思われる。また他の沈線も貝殻や原体による擦過条痕である可能性は否定できない。

第Ⅱ類：押型文土器を一括する。山形文をⅡａ類（**13**～**22**），楕円文をⅡｂ類（**23**・**24**・**30**・**31**），連珠文をⅡｃ類（**25**～**29**），格子目文をⅡｄ類（**32**・**33**）とする。**13**・**14**は口縁部片で**13**は外面のみに，**14**は内外面に山形文が横走施文されている。**15**～**22**は胴部片である。**16**・**17**・**20**は比較的整然とした山形文だが，それ以外はやや崩れており明瞭ではない。**22**は若干の起伏が見られる程度の直線に近い山形文である。**23**・**24**は楕円文。両例とも比較的雑で肥大化した文様を横位に施文している。**25**～**29**は連珠文としたが円形の数珠状ではなく，横長の細い文様が連続するものである。このほか**36**に示した底部片も胎土・焼成の類似性から押型文土器と思われるが，文様は観察できない。浅い上げ底状を呈しており，押型文のなかでも後半～終末に近いものであろうか。

縄文後期の土器（**34**・**35**）。**35**は外面に貝殻条痕，内面にナデ調整を施した粗製深鉢形土器の口縁部片である。外反口縁で口唇部には拓影には反映しない軽い刻目が施されている。器面は黒褐色を呈し胎土中には貝殻粉末を多く含む。**36**も深鉢形土器の口縁部片で，口唇部に連続刺突文を，胴部には沈線文を描いているが，風化のため沈線間の文様は確認できない。**35**は北久根山式に，**36**は広義の鐘崎式に比定されよう。この他坂の下式と思われる阿高系も１点あるが，細片で文様は不明である。



第36図　縄文時代の土器

第2節　石　　器

総数3,156点が出土し，押型文土器を主体とする第3層，早期に伴うものである。概要を述べる。

漆黒色黒曜石製石核30点，剝片221点，砕片638点。灰色黒曜石製石核29点，剝片490点，砕片1,089点。玄武岩製石核13点，剝片188点，砕片329点である。剝片石器として玄武岩製石槍1点，石鏃34点のうち局部磨製石鏃1点，鍬形鏃15点，玄武岩製掻削器類3点である。礫石器は，礫器が尖頭状のものを含め3点，敲石45点，凹石6点，磨石3点。その他に敲石で凹みをもつものが14点，磨石として使用されたものが7点。台石3点，石皿2点，両者の使用痕がみられるのが5点ある。

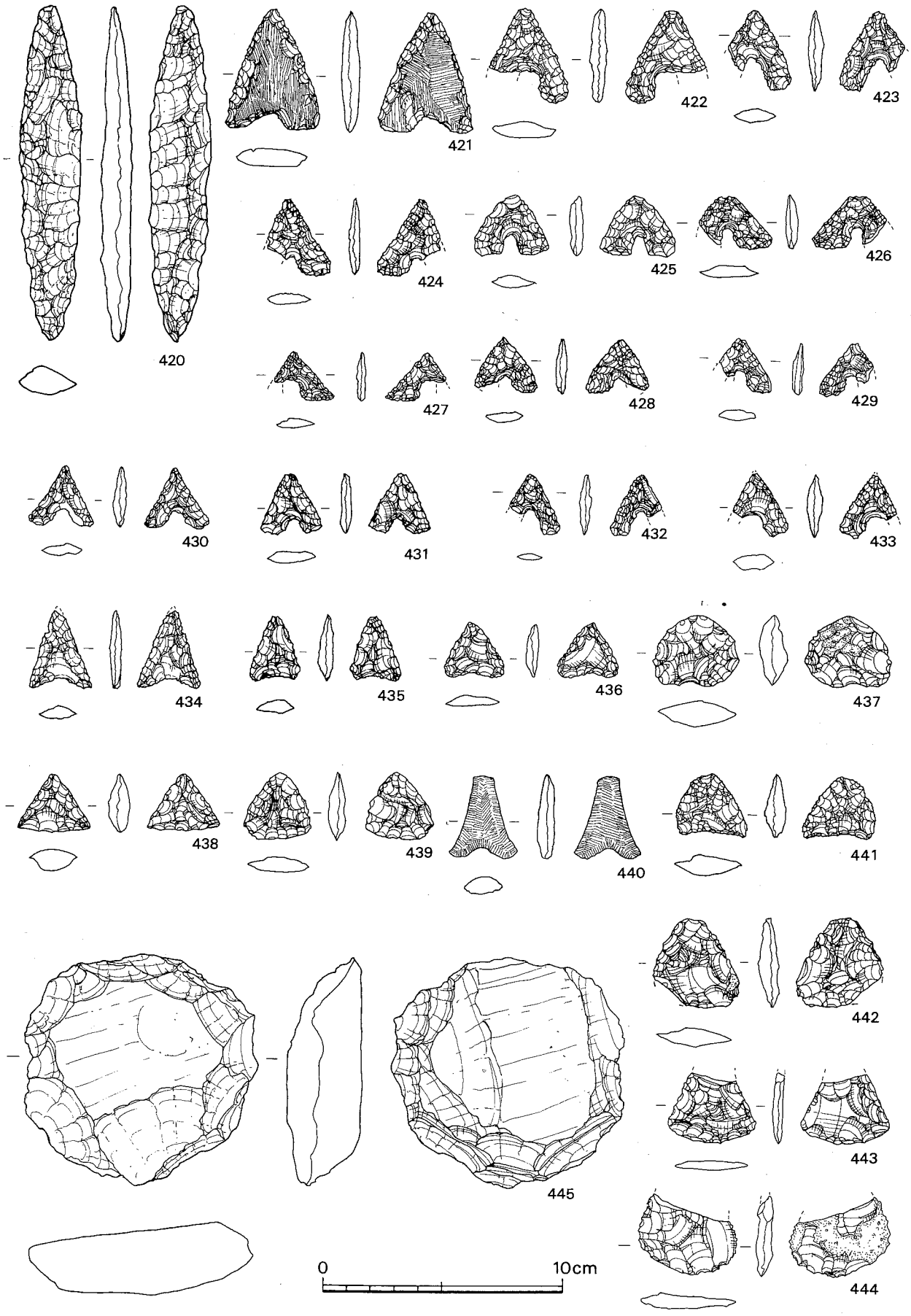
420は玄武岩製の柳葉形をした完形の石槍である。樋状剝離が全面にわたり丁寧に施されているが，裏面には除去できなかった若干部分が残る。

421は玄武岩製の局部磨製石鏃で，鍬形鏃のような角状の大きな脚部をもつ。ほぼ全面にわたり研磨がおこなわれており，わずかに側縁に剝離面を残している。**422**～**433**は漆黒色黒曜石製の鍬形鏃で，**430**・**433**は灰色のものである。片脚欠損のものが多い。極端に先端部が鋭角なものはなく，正三角形，あるいは先端部が鈍角な二等辺三角形をしたものが多く，茶園遺跡の鍬形鏃の大きな特徴であると思われる。**434**～**437**は凹基無茎鏃である。**434**は玄武岩製のもので浅い抉りをもち，脚部は左右対称である。両面とも平坦に仕上げられている。**435**は灰色黒曜石製で，弧状の抉りをもつ。裏面はほぼ平坦に仕上げられているが，正面には若干瘤状に残る部分がある。**436**は灰色黒曜石製で，やや浅い抉りをもつ。ほぼ正三角形をしているが，脚部は左右非対称である。調整剝離は雑で，裏面には側縁と抉入部だけにみられる。**437**は黒曜石製で全体的に丸みを帯び肉厚なもので，裏面には自然面を残している。やや浅い抉りをもち剝離調整は雑で，正面は縁辺から中心に向かう剝離痕がみられる。**438**・**439**は平基無茎鏃である。**438**は灰色黒曜石製で基部が若干ふくらんではいるがほぼ正三角形をなし，肉厚な石鏃である。**439**は灰白色黒曜石製で，側縁部，基部がやや丸みを帯びているがほぼ正三角形をしている。剝離調整は雑であるが，全体的に薄く仕上げられている。**440**はトロトロ石器である。石英を利用しており正面は丁寧に研磨されているが，裏面は正面と比較すると雑である。側縁は脚部に向かって外側に開き，脚部先端はやや丸みを帯び，弧状の抉りをもつ。先端部はやや角をもち，ほぼ平坦に仕上げられている。**441**は黒曜石製の凹基無茎鏃であるが，不定形なものである。一側縁は先端部から脚部にかけて緩やかなカーブをもち，もう一つはほぼ直線的に斜行する。側縁部は正面・裏面とも丁寧な押圧剝離であるが，中央には瘤状に残った部分がある。基部の抉りはやや浅い。**442**は灰色黒曜石製。先端部，片脚ともに尖ってはいない。わずかに自然面を残す。剝離調整は雑で，中央に瘤状に残った部分がある。**443**は黒曜石製で上半部を欠失。調整剝離は雑であるが，薄く仕上げられている。基部はやや丸みを帯びている。**444**は上半部を欠失し，裏面には自然面を残している。基部はやや丸みを帯び，薄くなってはいるが，全体的に調整剝離は雑である。黒曜石製。

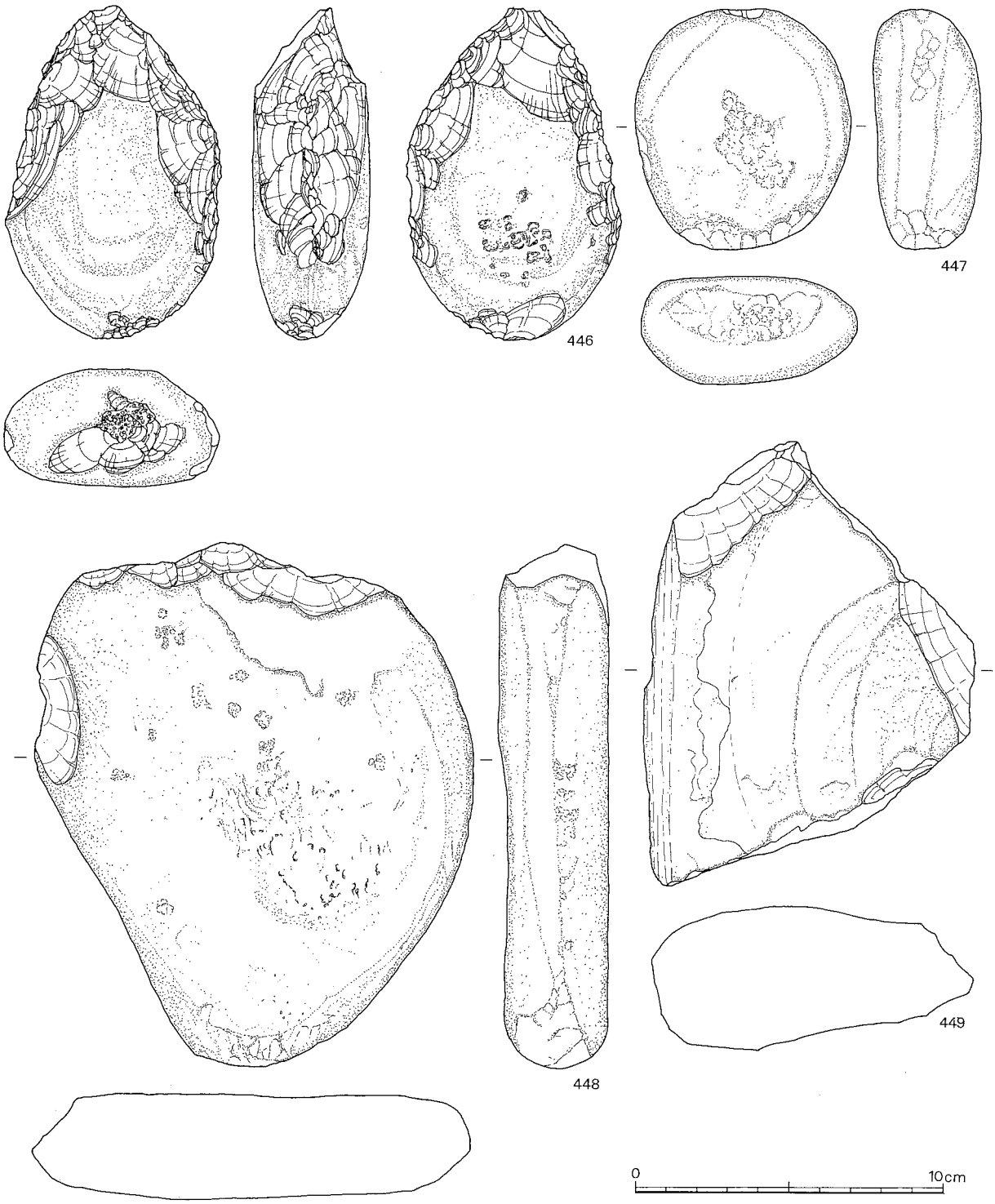
445は環状石斧の未成品と思われる。玄武岩の原石を円盤状に整形している。裏面はほぼ平坦にされ，刃部の調整加工もおこなわれているが，中央の穿孔までには至っていない。

446は円礫を利用した尖頭状礫器で，両面からの加工により尖頭部を作り出している。また敲石として利用したと思われる敲打痕もみられる。裏面はストーンリタッチャーとしての痕跡を有している。重さ372g。**447**は扁平な円礫を利用した敲石である。周縁のほとんどに敲打痕がみられ，特に正面図の下端部は顕著である。重さ292g。

448・**449**は台石または石皿である。**448**は両面とも中央に敲打痕がみられる。また敲打痕の周辺には，研磨面がみられる。重さ3,830g。**449**は両面とも凹レンズ状をしており，裏面には敲打痕がみられる。重さ2,730g。



第37図　縄文時代早期石器①



第38図　縄文時代早期石器②

第５章　茶園遺跡に関する考察

第１節　茶園遺跡石器群の編年

(1)　茶園遺跡石器群の分析

茶園遺跡では，下層から第Ⅵ層石器群（ナイフ形石器石器群）→第Ⅴ層石器群（細石器石器群）→第Ⅳ層石器群（縄文時代草創期）→縄文時代早期という４枚の文化層が連綿と続いていることが判明した。本稿では，第Ⅵ層から第Ⅳ層石器群までを取り上げて分析の対象としたい。まず最初に各石器群の組成を明らかにする。

石器	素材類			狩猟具							細石器類							加工具類							礫石器類			総計
層位	石核	剥片	砕片	ナイフ形石器	台形石器	角錐状石器	尖頭器	細石刃	石槍	石鏃	細石核	ブランク	スポール	第一スポール	打面再生剥片	打面調製剥片	作業面再生	掻・削器	オール	彫器	楔形石器	加工痕剥片	使用痕剥片	不明石器	礫器	局部磨製石斧	敲石	
第Ⅳ層	9	391	1218 (1)	(3)	(1)	(1)		738	18 (7)		1	16	6	8	24	29	8	3	47	2		43	18	49	(13)	1	1	2630
第Ⅴ層	6	400	797 (5)					422				28	9	2		9	8	11	50	3	2	49	24	82	3	1	1 (5)	1907
第Ⅵ層	1	33	74	3		2	1	(17)									3					4	3		3		(17)	127
合　計	16	824	2089 (6)	3 (3)	2 (1)	1 (1)	(17)	1160	18 (7)		1	44	15	10	24	38	16	14	100	5	2	96	45	134	3	2	1 (35)	4664

第６表　層位別遺物組成表

茶園遺跡第Ⅵ層石器群

この石器群には，ナイフ形石器が表採を含めて11点，台形石器５点，角錐状石器３点，尖頭器１点のほか掻・削器類，加工痕のある剥片，楔形石器などからなる。特徴的な石器としては，今峠型ナイフ形石器（第10図４～８）がある。大分県今峠遺跡を指標とするナイフ形石器(註1)で，主要剥離面で観察すると打点の位置が左側縁に位置しており，斜軸になることが特徴である。それらの長幅比は，長さ：幅が1.5：１前後で若干幅よりも長さがわずかに優越する。今峠型ナイフ形石器および基部裏面加工の柿崎型ナイフ形石器や平坦剥離調整が施される大形の台形石器などが組成されていることから萩原編年のナイフ形石器後期段階２におくことができようか。しかし角錐状石器が組成されていることや，百花台型台形石器などもみられるところから段階２を中心とするものの，その前後を若干含むと理解しておきたい。

茶園遺跡第Ⅴ層石器群

第Ⅴ層石器群は，扁平細石核を主体とする石器群である。その組成は細石刃422点，細石核28点，ブランク９点および打面再生剥片，打面調整剥片，細石刃剥離作業面再生剥片などの細石器製作に係わる資料の他，掻・削器類，オール，彫器，楔形石器など総計1907点からなる石器群である。細石核の多くは扁平な形状で，作業面の幅が打面の長さに比べて圧倒的に大きい。本地域の扁平細石核としては位牌塔型が知られてきたが，茶園遺跡では背面を自然面で構成する茶園型が主体を占める。これらの細石核に伴う稜柱状を呈する細石核は，いわゆる本来の野岳・休場型細石核とは若干おもむきを異にする。第17図104～107は，斉一性はみられないもののそれらを野岳・休場型細石核の範疇に含めることには異論はあるまい。茶園遺跡第Ⅴ層石器群では，茶園型や位牌塔型という扁平細石核を主体とし，野岳・休場型を客体とする組み合わせが考えられよう。野岳遺跡では逆に野岳・休場型が主体で，

位牌塔型，茶園型を客体とするらしい。このように当該期の細石器石器群は，遺跡によって入手可能な石材の形状にも左右されて扁平細石核が主体となったり，野岳・休場型が主体となったりというようにモザイク状を呈することが指摘されよう。

西北九州では，旧石器時代における細石器の遺跡の発掘調査例に乏しく，表採資料である野岳遺跡に依拠せざるをえなかった。確かに野岳遺跡の細石核は表採とはいえ一括性が高く，鈴木忠司による詳細な分析を通して静岡県休場遺跡の細石核と並称されて野岳・休場型細石核として市民権を確立している（鈴木1972）。従来の研究はこの「野岳」の資料を基準にして進められてきた。

位牌塔遺跡から出土した扁平細石核は，背面に水平方向の調整剝離が施され，打面は素材獲得段階で得られたもので打面調整はほとんどない。調査担当者の下川達彌や萩原博文らはこの細石核がナイフ形石器文化の系譜をひくこと(註2)を指摘し，細石器の始源期においた編年を組み立てている（下川1982，下川・萩原1983・97）。その先進的な見通しには敬服するところであるが，残念ながら位牌塔遺跡の資料はいずれも表採であり，遺物も少なく石器群は明らかではなくその位置づけについてあまり触れられなかった。また発掘による出土例も少なく，諫早市鷹野遺跡など数遺跡にすぎない。

茶園遺跡第Ⅴ層の細石器石器群は野岳・休場型と茶園型＋位牌塔型の組み合わせであり，野岳遺跡と共通するあり方といえよう。打面調整が施される頻度が高いことから位牌塔遺跡に後出するという見方もできようが，細石核の形態変異のなかに収まるものとみることもできよう。ともあれ西北九州の旧石器時代終末段階の細石器石器群のあり方の一端を明らかにするものである。

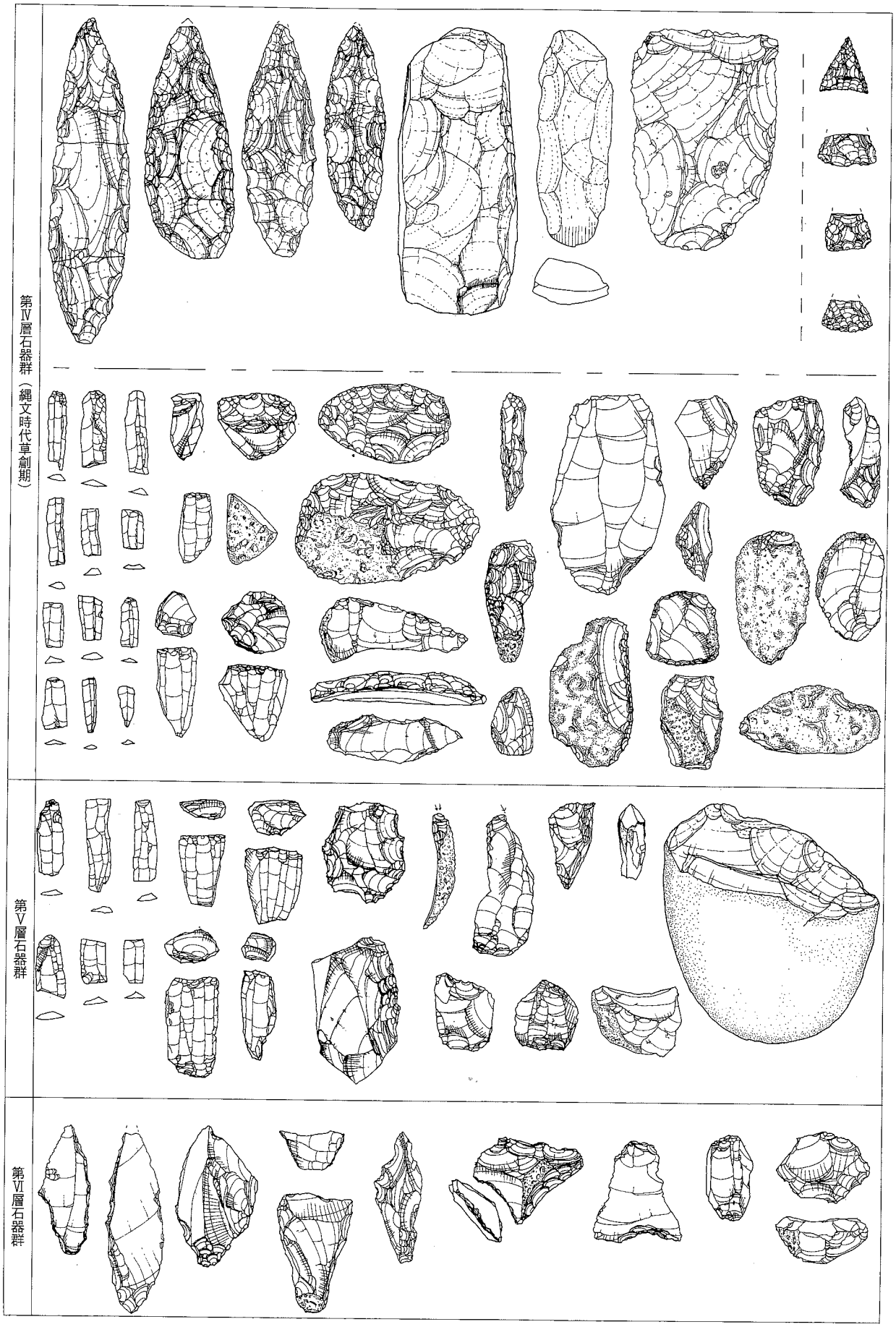
茶園遺跡第Ⅳ層石器群

細石器に「神子柴型」石槍・局部磨製石斧，石鏃や土器などが組成しており，縄文時代草創期に位置付けられる。細石核は3種類ある。一つはいわゆる西海技法の範疇に入る横打調整をもつ(註3)グループ。二つ目は両面加工ブランク・縦長削片・スキースポールなどから前述のグループとは異なる純正の西海技法(註4)をもつグループ（細石核は出土していない）。こうした土器出現期の特徴である西海技法をもつ一群と，いわゆる野岳・休場型が組み合わされる。細石器石器群の中に，石槍・局部磨製石斧をもついわゆる「神子柴」の一群が客体としてではなく，一方の主体として量的にも保障されて伴う(註5)。この石器群には，厚手の無文土器，薄手の横走する沈線を文様とする土器が量的にはわずかであるが共伴している。またおそらく終末段階には「南九州」的な石鏃も組み合わされる。

西北九州では土器出現後の細石器は両面加工（片面加工）のブランクに横打調整による打面形成を行う西海技法が一般的であるとされるが，いわゆる野岳・休場型なども共伴するなど単純ではない。さて縄文時代草創期の土器編年は泉福寺洞穴の成果から，細石器を伴う土器型式として古い方から，豆粒文土器→隆線文土器→爪形文土器→押引文土器が確認されている。細石核も特徴的なものがあり，なかでも小口の両端に作業面をもつものは織笠昭によって「泉福寺10層類型」として西海技法初源期を特徴づけるものという評価がある（織笠1991）。茶園遺跡第Ⅳ層にはこれはみられない。また織笠が提示した泉福寺洞穴の細石刃の分析では，時代が下がるにつれて細石刃の長大化傾向が認められるという。泉福寺洞穴では5層の爪形文土器になって「有舌尖頭器」が出土する。それまでは石槍は全く姿を見せない。また爪形文土器から押引文土器段階では縦長のスポールが多くなるなど削片的色彩が濃くなる。こうした種々の要素を考えあわせていけば，茶園第Ⅳ層石器群の編年的位置は泉福寺洞穴5層から4層（爪形文土器から押引文土器）段階に位置付けて大過ないであろう。

「神子柴系」遺物の問題

九州における「神子柴文化」に最初に注目したのは横田義章である。横田の神子柴型石斧の集成は，今日でもバイブル的価値を有している（横田1981・90・91）が，「神子柴型」石斧の問題の一つはその出土状態が不明な点が多く，石器組成が不明であったことである。近年，九州地方の「神子柴文化」



第39図　茶園遺跡編年図

の問題を積極的に取り上げたのは栗島義明・綿貫俊一である。両氏が神子柴文化の遺跡としてあげたのは，大分県市ノ久保遺跡・同松山遺跡・同上下田遺跡，長崎県福井洞穴4層などである（栗島1993，綿貫1992など）。ところで神子柴文化はその組成として局部磨製石斧・石槍・石刃掻器などをもつとされるが，九州地方では，完全な組成で出土した例は皆無で，市ノ久保では石斧だけ，松山では石槍だけというように欠落した姿が一般的である。福井4層は，石槍と細石器の共伴ひいては神子柴系文化の九州地方への波及という問題を提起するものの，報告資料はわずかで，その全容を知りえず，石器群の性格を把握することは不可能に近い。一刻も早く報告書の刊行をのぞみたい。

ここでいう「神子柴系」という「　」つきの表記は，九州地方の石槍・局部磨製石斧が東からの神子柴文化の波及という単線的な理解を避けるために使用した。確かに東からの神子柴文化の影響下に福井洞穴4層の石槍が誕生した，あるいは市ノ久保の石斧が生まれたという考えは魅力的ではあるが，現段階ではその評価を保留しておきたい。

西北九州では当該期の石槍や局部磨製石斧が多く出土している。東彼杵町松山A遺跡は，茶園遺跡と共通する石槍がまとまって出土しており，地点が異なるものの局部磨製石斧も検出されている。石槍だけをみると発掘例として諫早市鷹野遺跡，国見町百花台遺跡があり，表採になれば五島列島では十指を数えるほどであり，それが稀なものであるという認識は薄れつつある。

茶園遺跡第Ⅳ層石器群の石槍は基本的には安山岩製の木葉形でやや細身である。鹿児島県帖地遺跡や熊本県柿原遺跡などと類似する。局部磨製石斧は一例は福岡県門田遺跡のものときわめてよく似ている。凝灰岩質の肉厚な石斧の類例はないが，局部磨製石斧の範疇に収まるものだろう。さらに図示できなかったもう一点の石斧は，より「神子柴」的である。こうした点からみると，それはそれだけでは神子柴文化と評価できるかもしれない。系統問題を論じる際に，九州西端に位置する茶園遺跡は中国・朝鮮半島と至近距離にあることから，それらとの関連も無視できないが，現時点では中国・朝鮮半島の該期の実態が不明であり，彼の地との系統問題を論じることはできない。しかしこうした石器群はシベリア・沿海州には存在しており，可能性としては朝鮮半島経由も否定できない。

石鏃の位置

縄文時代草創期の石鏃の問題は，石槍から石鏃へという狩猟具の変化として説明されてきた。鹿児島県では加栗山遺跡の調査以来細石器と石鏃の共伴は既成事実となり，類例は増加の一途をたどっている。加栗山遺跡では薩摩火山灰の下層で細石器と共伴しており，熊本県白鳥平B遺跡ではこの種の石鏃は量的にも多く組成の上で安定した地位を占めている。同遺跡では爪形文土器が大量に出土しており，石器には細石刃もあり，石槍の基部も出土している。こうしたことからこの石鏃の時間的な位置としては，草創期後半段階と考えられよう。

茶園遺跡の草創期の石鏃には二つの形態がみられる。一つは前述の加栗山遺跡や白鳥平B遺跡から出土している二等辺三角形で脚部が尖るものと，基部が平基かもしくは若干凸基になる薄いいわゆる「南九州の草創期」的な石鏃である。こうした石鏃は，西北九州ではあまり注目されなかった。ところで県内の細石器と石鏃が共伴した遺跡としては平戸市田崎遺跡がある（田川1982）。その組成は，舟底形細石核と石槍，彫器それに定形的な薄手の二等辺三角形の石鏃である。石鏃は茶園遺跡第Ⅳ層と類似する。これらがブロックにまとまっており，細石器と石鏃の共伴は確実である。また文様は不明ながら土器も2点出土している。胎土などから城ヶ岳平子・茶園第Ⅳ層のものと類似する。西北九州では泉福寺洞穴4層や岩下洞穴Ⅸ層の条痕文土器段階の平基の小形二等辺三角鏃をもっとも古い段階としてきた。今回茶園遺跡や田崎遺跡の再評価から細石器の終末に石鏃の出現を確認できたことは大きい。

以上述べてきたように茶園遺跡では旧石器時代から縄文時代草創期にかけての石器群が都合3枚検出されたことになる。ところで第Ⅳ層石器群については複数の理解が可能と思われる。一案は第Ⅳ層

石器群を一括のものとする考え方。二案は細石器と石槍が共伴し，石鏃が後出するという考え方。三案は細石器が先行し，石槍と石鏃が後出するという考え方などである。これに土器が絡んで事態は輻輳するが現時点では一案を採用しておくことにしたい(註7)。

第2節　茶園遺跡第Ⅴ層石器群の扁平細石核について

(1)　扁平細石核研究史

日本の細石器研究は，長野県矢出川遺跡に始まるが，扁平細石核についてその報文のなかですでに戸沢充則が指摘している(戸沢1964)。戸沢は矢出川遺跡の細石核を3つに分け，第3のグループに扁平石核をおき，「これらの中には扁平な板状の素材を，第2のグループ(筆者註　板状の素材を用いて作業面を小口にもつグループ）とは対照的に，広い平らな面に対して剝離作業を加える方法をとったと推測される資料もあるが，それは作業の実際から想像して合理的ではない。多くのものは第一のグループ（筆者註　半円錐形細石核）の作業の進行の結果生みだされたもの」という作業面の進行論を唱えた。鈴木忠司は，矢出川遺跡の細石核を分類し，扁平な形状をした細石核をＡⅠ類とした。「正面の幅に比して側面の幅（奥行き）が短い，横長の偏平な一群である。フルーティングは原則として，打面の長辺の一端において実施される。打面は傾斜する。側面・背面は，水平・垂直方向の打撃によって形づくられている」とし，さらに「ＡⅠ～Ⅲ類までの差を横長から縦横等比，そして縦長にと変化している石核の体形の変異を区分したにすぎないと言うこともできる。またこれを作業進行過程の中においてみること」もできる（鈴木1979）として，慎重な言い回しながら扁平細石核を認識した。

これに対し，安蒜政雄は，矢出川技法を分析する中で残核の打面を，縦長状の打面，横長状の打面，方形状の打面という三つに分け，横長状をⅡ形残核とした。そして注目すべきは「これら三者は，細刃器剝離作業の進展に応じて残されたものとは考えがたい。つまり，湧別技法・峠下技法・西海技法・ホロカ技法のように画一的な石核原形から生みだされた残核の形状差ではなく，残核の形状差に対応するかたちの複数の石核原形が存在していたと予測される」として，細石刃剝離進行論を否定する見解を示した（安蒜1979)。

視点を九州に転じると扁平細石核の検出例は，枚挙にいとまはない。しかし扁平細石核を野岳・休場型の半円錐細石核の細石刃剝離作業の進行段階と考える剝離進行論が大勢を占めてきた。1978年に調査された諫早市位牌塔遺跡から出土した扁平細石核は新たな問題を投げかけた。調査を担当した下川達彌はその形態的な類似からナイフ形石器群にその系譜を求め，位牌塔遺跡から出土した細石核を「位牌塔型細石核」として細石器文化のなかでも比較的古い型式とした（下川1982)。その後，位牌塔型細石核は，下川達彌・萩原博文両氏によって論じられてきた経緯がある（下川・萩原1983・97)。その論点は変わっておらず，最新の論文によれば「これらの扁平石核は西北九州のナイフ形石器文化の石刃技法を代表する磯道技法のカテゴリーに含まれる」とし，ナイフ形石器文化のなかから細石器が生まれたとする自生説の根拠ともなっている。

小畑弘己も早い段階で扁平細石核に注目した一人である。九州地方の扁平細石核を集成するとともに，位牌塔遺跡および平草遺跡の資料をもとにして扁平細石核をａ・ｂの二者に分ける。ａは本報文でいう茶園型に，ｂは位牌塔型にあたる。ａ・ｂタイプともに「ナイフ形石器の石核との類似性が強く，細石器文化のなかでもナイフ形石器文化に近い比較的古い細石核と考えられる」として半円錐形細石核のバリエーションの中でも古い段階に位置付けられる可能性を指摘した（小畑1982)。

宮田栄二は南九州の細石器編年を3期に区分するがそのⅠ期として「野岳・休場型細石刃核を単純に出土する遺跡。この時期の野岳・休場型細石刃核は，打面幅（作業面幅）が広く，打面を工法に傾

斜したものが大部分を占める。」（宮田1993）として，この時期の細石核の打面幅が広いことを指摘している。しかしそれは全般的な傾向を指すもので，扁平細石核を特定するものではなさそうである。

松浦五輪美は西南日本の細石刃文化の問題を論じ，特に「野岳・休場型」細石核について詳細に論述している。松浦は「野岳・休場型」を大村市野岳遺跡の資料をもとにその形状から4類に区分した（松浦1993）。そのIII類が本稿でいう茶園型にあたり，IV類が位牌塔型に該当する。

1997年九州旧石器文化研究会は〝九州の細石器文化〟～細石器文化の開始と編年研究～というテーマを掲げて九州各県の細石器文化編年の構築を企図した。各県の状況は旧石器段階の細石器として野岳・休場型細石核を位置付けるという大枠は一致している。扁平細石核の編年的位置については若干の前後関係はあるものの，古い段階におく考え方が大勢であった（杉原1997，桑波田1997）。村崎孝宏は熊本県の細石器文化編年を3期に区分し，I・II期を旧石器段階，III期を土器出現期とした。礫素材の野岳・休場型を最古におき，次第に剝片素材の使用・扁平化の進行するとして，茶園型を含む扁平細石核をもつ西原B遺跡をII期においた（村崎1997）。

このように位牌塔型を含む扁平細石核は，先行するナイフ形石器文化の石核との類似性から，それとの連続性が指摘されて細石器自生説の根拠の一つとされてきたところである。その当否はここでは論じないが，これらの編年的位置が旧石器段階の古い細石器の一群と理解して差し支えないことを示しているといえよう。

(2) 扁平細石核の分布

手元にある『細石刃文化研究の新たなる展開I　列島諸地域における細石刃文化の諸相』（佐久考古学会・八ヶ岳旧石器研究グループ）および『九州の細石器文化』（九州旧石器研究会）をもとにして扁平細石核の出土遺跡を網羅してみる。

作成した分布図を見ると，この種の扁平細石核は地域的に偏在することはなさそうで，関東以西の西南日本に広く分布している。関東地方から長野県・静岡県といった，旧石器段階の野岳・休場型細石核を出土する遺跡が数多く知られているところに扁平細石核も多く検出される傾向にある。つまり扁平細石核と野岳・休場型の分布域とが合致していることが指摘できよう。このことは従来，野岳・休場型と呼んできたなかに，普遍的な存在として茶園型なり位牌塔型という扁平細石核が組成されていることを意味し，共存しているといえよう。すべての原典に当たったわけではないので遺漏も多いかと思うが，大枠を崩すことはないだろう(註8)。

茶園型・位牌塔型の扁平細石核は，それだけが単独で組成されることはほとんどなく，基本的には野岳・休場型と組み合わされている。その組み合わせとしては，

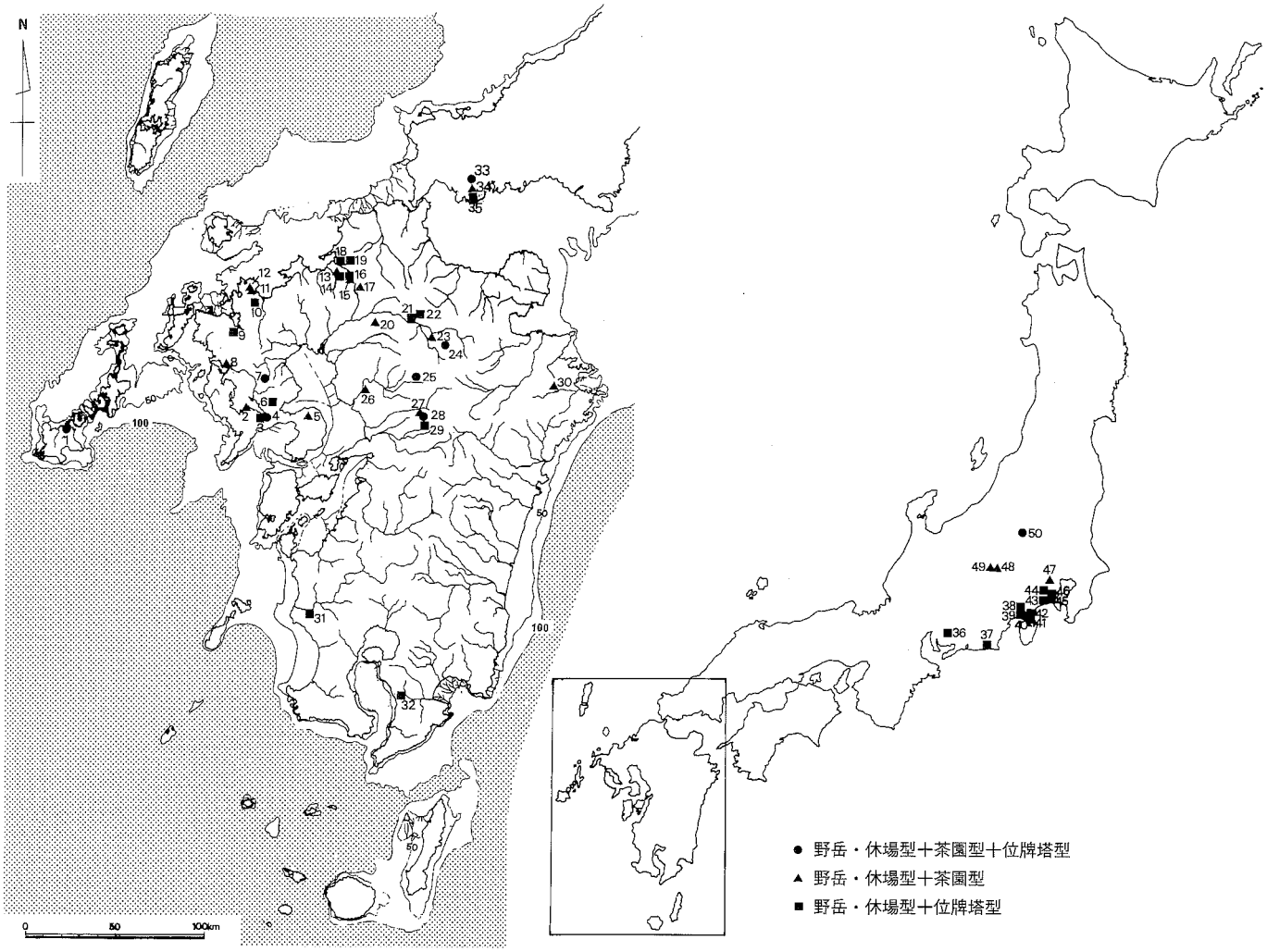
①茶園型＋位牌塔型＋野岳・休場型，

②茶園型＋野岳・休場型，

③位牌塔型＋野岳・休場型，

がある。基本的には，茶園型・位牌塔型という扁平細石核は野岳・休場型と組成される。扁平細石核が茶園型になるか位牌塔型になるかは，編年的な時間差の問題ではなくて，使用できる石材の形状にかかわっている。つまり自然面を有する原石が入手できれば，背面を自然面で省略することが可能であり効率的であったのではないだろうか。

西海技法を伴う土器出現期の細石核とは分離できそうである。このことは近年問題になっている「新しい野岳・休場型」の問題，つまり土器出現期以降の野岳・休場型と，旧石器時代の野岳・休場型を見分けるメルクマールとなりうる。野岳・休場型の概念が拡大し，旧石器時代から縄文時代草創期まで通時的に存在するとされるとすれば，扁平細石核は旧石器時代の細石器を判断する切り札的存在となる可能性を秘めている。



第40図　扁平細石核の分布

番号	遺跡名	所在地	野岳・休場型	茶園型	位牌塔型	番号	遺跡名	所在地	野岳・休場型	茶園型	位牌塔型
1	茶園	長崎県南松浦郡岐宿町	○	◎	○	26	中原	熊本県玉名郡菊水町		○	
2	長与堂崎	長崎県西彼杵郡長与町	○	○		27	西原B	熊本県阿蘇郡西原町	○	○	
3	鷹野	長崎県諫早市	○		○	28	西原A	熊本県阿蘇郡西原町	○	○	○
4	西輪久道	長崎県諫早市	○	○	○	29	牧原B	熊本県上益城郡矢部町	○		○
5	百花台S	長崎県南高来郡国見町	○	○		30	聖嶽洞穴	大分県南海郡本庄村		○	
6	位牌塔	長崎県諫早市			○	31	成岡	鹿児島県川内市	○		○
7	野岳	長崎県大村市	◎	○	○	32	西丸尾	鹿児島県鹿屋市	○		○
8	雨池	長崎県佐世保市		○		33	南方	山口県宇部市	○	○	○
9	川原田	佐賀県東松浦郡肥前町	○		○	34	長桝第1地点	山口県宇部市	○	○	
10	菅牟田黒龍	佐賀県唐津市	○	○		35	長桝第2地点	山口県宇部市	○	○	
11	竹木場前田	佐賀県唐津市	○	○		36	五本松	愛知県岡崎市	○		○
12	境木場	佐賀県東松浦郡鎮西町	○	○		37	広野北	静岡県磐田郡豊田町	○		○
13	柏田	福岡県春日市	○	○		38	休場	静岡県沼津市	○		○
14	門田	福岡県春日市	○		○	39	中見代第三	静岡県沼津市	○		○
15	萩原	福岡県筑紫野市		○		40	中村C	静岡県三島市	○		○
16	野黒坂	福岡県筑紫野市	○		○	41	大奴田場A	静岡県田方郡函南町	○		○
17	春園	福岡県三井郡大刀洗町		○		42	柳沢B	静岡県田方郡函南町	○		○
18	戸原	福岡県粕屋郡粕屋町	○		○	43	かしわ台駅前第Ⅰ文化層	神奈川県海老名市	○		○
19	蒲田	福岡県福岡市	○		○	44	中村南	東京都練馬区	○		○
20	大草平	福岡県八女郡星野村	○	○		45	報恩寺	神奈川県綾瀬市	○		○
21	萩尾	大分県日田市			○	46	上野第Ⅲ文化層	神奈川県大和市	○		○
22	田代A	大分県日田市			○	47	下里本邑	東京都東久留米市	○	○	
23	五馬大坪	大分県日田郡天瀬町	○	○		48	矢出川	長野県南佐久郡南牧村	○		○
24	平草	大分県日田郡天瀬町	○	○	○	49	鷹山	長野県小県郡長門町	○		○
25	伊野A	熊本県菊池市	○	○	○	50	市之関前田	群馬県勢多郡宮城村	○		○

第7表　扁平細石核出土遺跡地名表

(3) 茶園技法と茶園型細石核

茶園型細石核の工程を復元してみることとするが，接合資料によるものでないことを明らかにしておく。

第1段階：素材獲得の段階で，その作業は黒曜石原産地での円礫の分割であろう。2ないし3分割された剝片を基本とするものと思われる。ただし牟田産黒曜石の場合には原石の大きさが小さく扁平なものも多い。その大きさは，淀姫・針尾系黒曜石の分割剝片と変わらないところから原石での遺跡搬入もあった。しかし淀姫・針尾系黒曜石の場合は概して大形の原石が多く，長距離運搬の利便性等から，分割剝片が一般的であったと思われる。石核の僅少さがそのことを如実に物語っている。

第2段階：こうして遺跡に搬入された分割剝片を，さらに二つに分割してブランクを形成する段階。

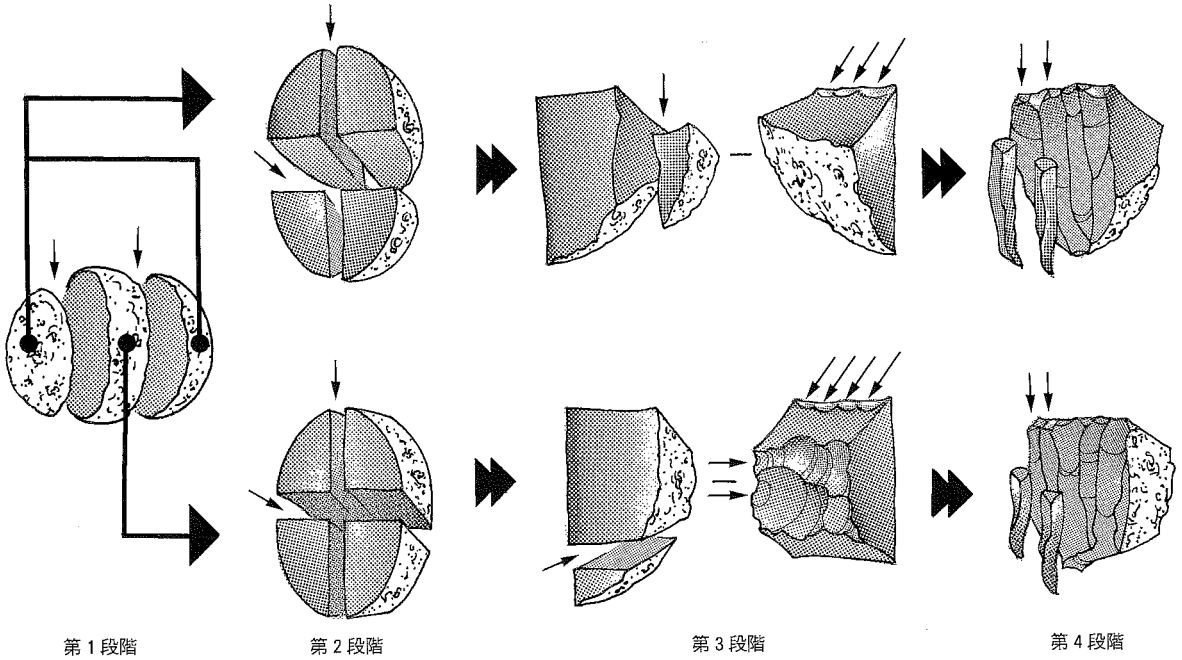
第3段階：剝片の両サイドを面的に確保するために加工が施される。ブランクの大まかな姿は，正面観は打面側が下端よりも幅が広く逆台形状を呈する。側面観は下端側がすぼまる楔状を呈する。打面はブランク形成時点ですでに確保されており，急斜な例が一般的である。両側面は一概にはいえないが，平坦面を作出する場合が多い。

第4段階：打面調整はそれほど顕著ではないが施されることを原則とするらしい。

第5段階：こうしてできあがったブランクから細石刃を剝出する段階。作業面が打面より長いことが最大の特徴である。剝出される細石刃は，西海技法の細石核からのものよりも長大である。

扁平細石核が背面をもつことは細石刃剝離の際の細石核固定法と密接に関連するものであろうか。扁平細石核の両側面を挟んで固定することは不可能ではないかもしれないが現実的とは思えない。背面を押さえつけて固定したとすれば，その摩擦力を大きくするためには礫面をそのまま利用することが効率的である(これが茶園型)。背面がカーブしたり主要剝離面となるような場合には調整剝離を施してグリップ力を確保したことが考えられよう。その際の剝離は細石刃剝離の方向と直交するように水平方向に施されることもその傍証となるだろう(これは位牌塔型)。そうしたことからすれば茶園型と位牌塔型は不即不離の関係で一体のものと理解できよう。

扁平細石核を軸にして，野岳・休場型を理解できないかというのが本稿のテーマであった。稜柱形



第41図　茶園技法（上段）と位牌塔技法（下段）

の野岳・休場型は型式としての保守性から旧石器時代から縄文時代草創期にいたるまで連続することが指摘されて久しい。教科書的に野岳・休場型だから旧石器時代とはいかなくなってきた。他地域におけるような発掘例の乏しい西北九州では，どちらに属する野岳・休場型なのかを判断する基準が求められていた。今回層位的にも扁平細石核が旧石器時代に属することが確認できたことの意味はきわめて重要であろう。

［註］

註１　綿貫俊一は大分県日田郡天瀬町五馬大坪遺跡の報文で，今峠型ナイフ形石器について，その分布と地域差について論じている。綿貫は今峠型を，打面の性状によって，今峠類型と大坪類型の二つに分類する。大坪類型は，打面調整や打面調整状の二次加工の著しいグループ。大坪遺跡の大部分と西北九州の当該石器が相当する（綿貫1989）という。この分類に従えば茶園遺跡から出土する今峠型ナイフ形石器は，遺跡の位置や打面調整の点などから大坪類型に該当するといえよう。

註２　下川・萩原らは，位牌塔遺跡の細石核を「西北九州のナイフ形石器文化の石刃技法を代表する磯道技法のカテゴリーに含まれる」とし，ナイフ形石器文化との近縁性を指摘し，細石器文化の始源期に位置付けている。

註３　本地域における土器共伴期の細石器石器群の最も重要な問題の一つは西海技法の問題である。当該技法については，橋本勝雄や織笠昭の論考があり，その内容が把握できるようになった。本報告書では拠点的な大遺跡である福井洞穴・泉福寺洞穴の西海技法と，茶園遺跡の西海技法の比較検討を行うつもりであったが紙数も尽きたので後日稿を改めたい。

註４　茶園遺跡第Ⅳ層には，両面加工もしくは片面加工品からスポールをとったのちに横打調整を施す標準的な西海技法が存在したことはブランクやスポールなどからみて確実である。また細石刃第一スポールという稜付削片も20数例という多さにのぼっており，多くの福井型細石核が作られ，細石刃が剝出されたと思われるが，肝心の福井型（泉福寺型）の細石核は一点も出土していない。

註５　茶園遺跡の石槍を主体と考えた理由としては，量的に多いことが最大の理由であるが，破損した後のリダクションがみられること，破損後の放棄がみられることなどである。

註６　松山Ａ遺跡からは様々な形態の石槍（尖頭器）が出土しているが，茶園遺跡に類似する石槍は遺跡のほぼ中央部に集中して分布することが判明した。そのあり方は折損したものが多いことなど，消費地遺跡として茶園遺跡とほぼ同じ内容であろう。

註７　茶園遺跡の縄文時代草創期の編年は，土器をどう認定するかよってその編年的位置が決まってくるものと思われるが，類例に乏しく文様も不明なものが多く，現時点では多くを語れない。

註８　本来は報告書にあたって検討するのが当然であるが，今回は時間的制約のためやむを得ず各集成に頼らざるをえなかった。忸怩たるものがあり，できうれば再検討の機会をもちたいと考えている。

【引用・参考文献】

麻生　優1965「細石器文化」『日本の考古学』Ⅰ　先土器時代　河出書房新社

麻生優編1985『泉福寺洞穴の発掘調査記録』佐世保市教育委員会

綿貫俊一1989『五馬大坪遺跡』天瀬調教幾委員会

安斎正人1994「縄紋文化の発現―日本旧石器時代構造変動論（３）―」『先史考古学論集』第３集

安蒜政雄1984「日本の細石器文化」『駿台史学』60

稲田孝司1986「縄文文化の形成」『岩波講座日本考古学』６

稲田孝司・絹川一徳・光石鳴巳1993「西日本の湧別技法」『岡山大学文学部紀要』18

稲田孝司編1996『恩原２遺跡』岡山大学文学部考古学研究室

牛ノ濱修他1981『加栗山遺跡・神ノ木山遺跡』鹿児島県教育委員会

岡本東三1979「神子柴・長者久保文化について」『研究論集』Ⅴ　奈良国立文化財研究所

岡本東三1993「縄紋文化移行期石器群の諸問題」『環日本海における土器出現期の様相』日本考古学協会新潟大会資料集

小野ゆかり1990『寄神貝塚周辺遺跡』（岐宿町文化財調査報告書第２集）岐宿町教育委員会

小畑弘己1982「百花台遺跡S地点の石器群」『赤レンガ』第2号
小畑弘己1983「九州の細石刃文化」『物質文化』41　物質文化研究会
小畑弘己1989「西南日本の楔形細石核とその系譜について」『東アジアの考古と歴史』(中)
織笠昭1984「細石器文化組成論」『駿台史学』60
織笠 昭1993「細石刃研究の最も基礎的な形態」『細石刃文化研究の新たなる展開II』佐久考古学会・八ケ岳旧石器研究グループ
織笠　昭1991「西海技法の研究」『東海大学文学部紀要』54
賀川光夫1971「西日本における礫器の問題」『第四紀研究』第10巻第4号
鎌木義昌・芹沢長介1965「長崎県福井岩陰」『考古学集刊』3－1
木崎康弘1981「九州地方の細石核」『熊本史学』55・56合併号
栗島義明1993「細石器文化の終焉」『細石刃文化研究の新たなる展開II』佐久考古学会・八ケ岳旧石器研究グループ
小林達雄1970「日本列島に於ける細石刃インダストリー」『物質文化』16
下川達彌1979
下川達彌1982「旧石器時代の長崎」『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』
下川達彌・立平　進1983『城ケ岳平子遺跡第1次調査概報』長崎県立美術博物館
下川達彌・萩原博文1983「西北九州における旧石器石器群の編年（上・下）」『古代文化』35-6・9
下川達彌・萩原博文1997「細石刃石器群の出現・展開と泉福寺洞穴」『人間・遺跡・遺物3—麻生優先生退官記念論文集—』
白石浩之1992「細石器文化の研究—西南日本の細石器文化について」『人間・遺跡・遺物—わが考古論集2—』
白石浩之1993「細石器石器群の終末と神子柴型・長者久保系石器群の関連性について」『細石刃文化研究の新たなる展開II』佐久考古学会・八ケ岳旧石器研究グループ
杉原荘介・小野真一1965「静岡県休場遺跡における細石器文化」『考古学集刊』3-2
鈴木忠司1971「野岳遺跡の細石核と西南日本における細石刃文化」『古代文化』23-8
鈴木忠司1979「中部地方南部の細石器文化」『駿台史学』第47号
鈴木忠司1993「細石刃文化と生業」『細石刃文化研究の新たなる展開II』佐久考古学会・八ケ岳旧石器研究グループ
芹沢長介1961「日本における細石刃文化」『歴史教育』9-3
副島和明・伴耕一朗1986『諫早中核工業団地造成に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書III』(長崎県文化財調査報告書第85集)
田川　肇1982「田崎遺跡」『長崎県埋蔵文化財調査集報IV』(長崎県文化財調査報告書第55集)
橋　昌信1975「宮崎県船野遺跡における細石器文化」『考古学論叢』3
堤　隆1998「氷期の終末と細石刃文化の出現」『科学』68-4
萩原博文1989「西日本の細石器文化」『考古学ジャーナル』306
萩原博文1996「第2章　平戸の旧石器時代」『平戸市史　自然・考古編』長崎県平戸市
橋本勝雄1983「長崎県福井洞穴の細石刃生産技術について—第2・3層を中心にして」『考古学論叢I』
林　謙作1970「福井洞穴における細石刃技術とその東北アジア・北アメリカにおける位置づけ(上)(下)」『考古学研究』16-4，17-2
松浦五輪美1993「西南日本の細石刃文化について—特に「野岳・休場型」「船野型」細石核を中心に—」『潮見浩先生退官記念論集』
宮田栄二1993「九州地方南部の細石刃文化」『細石刃文化研究の新たなる展開I』佐久考古学会・八ケ岳旧石器研究グループ
横田義章1981「いわゆる神子柴型石斧の資料」『九州歴史資料館研究論集』7
横田義章1990「いわゆる神子柴型石斧の資料（二）」『九州歴史資料館研究論集』15
横田義章1991「いわゆる神子柴型石斧の資料（三）」『九州歴史資料館研究論集』17
綿貫俊一1992「長者久保・神子柴文化並行段階の九州」『古文化談叢』28
綿貫俊一1993「九州北部の細石刃文化」『細石刃文化研究の新たなる展開I』佐久考古学会・八ケ岳旧石器研究グループ

付編

岐宿町，茶園遺跡の年代測定

株式会社　古環境研究所

1．試料と方法

遺　跡	試料の層位	種　類	前処理・調整	測 定 法
茶　園	第Ⅴ層下部	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄・石墨調整	AMS 法

2．測定結果

試料	^{14}C 年代	δ^{13}C (年 BP)	補正^{14}C 年代 (‰)	暦年代 (年 BP)	測定No.
第Ⅴ層下部	15470±190	−26.5	15450±190	交点：— 2 σ：— 1 σ：—	beta-107730 (WHOI)

1）^{14}C年代測定値

試料の^{14}C/^{12}C比から，単純に現在（1950年 AD）から何年前（BP）かを計算した値。^{14}Cの半減期は5,568年を用いた。

2）δ^{13}C測定値

試料の測定^{14}C/^{12}C比を補正するための炭素安定同位体比（^{13}C/^{12}C）。この値は標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。

3）補正^{14}C 年代

δ^{13}C測定値から試料の炭素の同位体分別を知り，^{14}C/^{12}Cの測定値に補正値を加えた上で算出した年代。

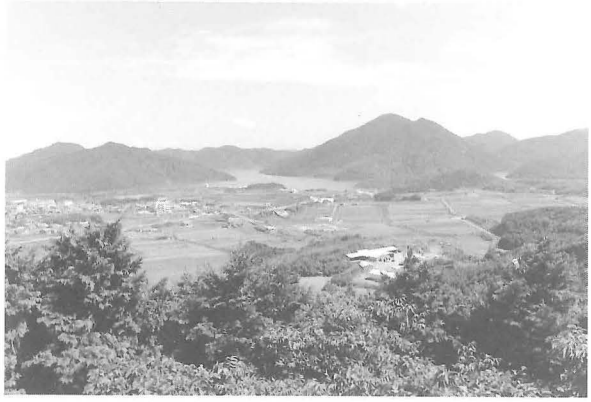
4）暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中^{14}C濃度の変動を補正することにより，暦年代（西暦）を算出した。補正には年代既知の樹木年輪の^{14}Cの詳細な測定値を使用した。この補正は10,000年 BP より古い試料には適用できない

5）測定No.

beta は，アメリカの β（ベータ）社の測定番号を示す。加速器は，アメリカのウッズホール海洋研究所（Woods Hole 0ceanographic Institute）の機器（WHOI）が利用された。

図　　版



遺跡遠景

調査風景

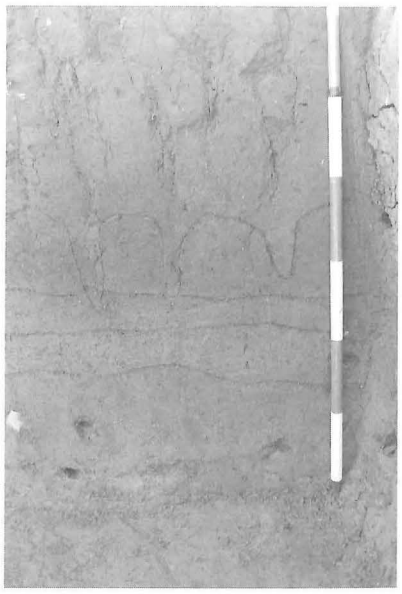
調査状況

完掘状況

D— 3 区西壁

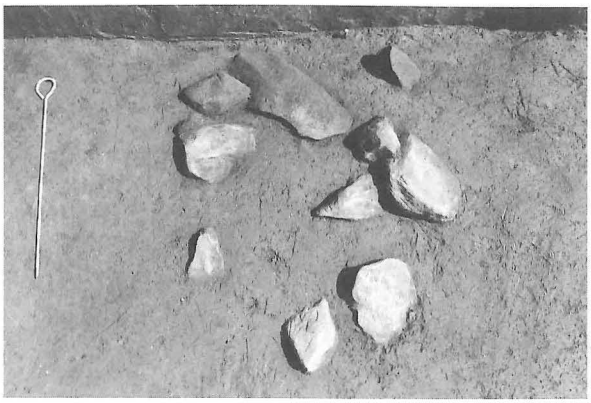
D— 3 区北壁

D— 2 区西壁

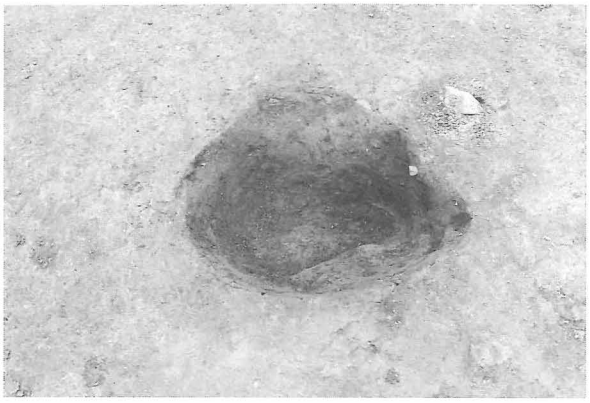


C— 2 区東壁

図版 1　遺跡遠景，調査風景，土層断面



配石遺構



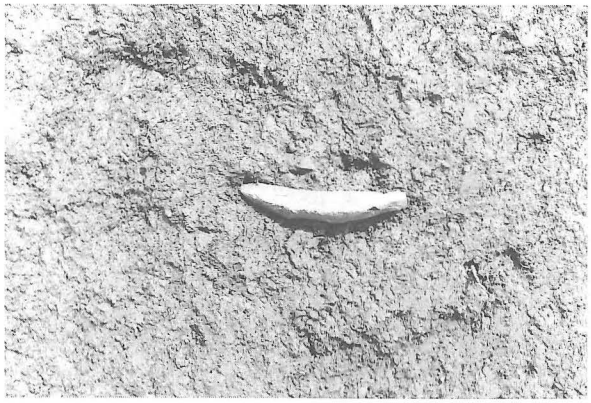
土　　壙

細石核出土状態

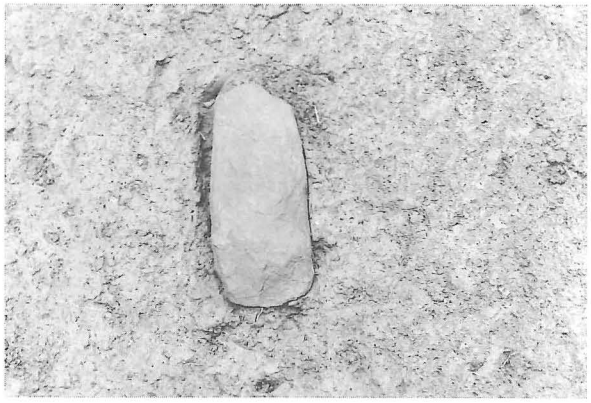
細石核出土状態

スポール出土状態

細石核と打面再生剝片

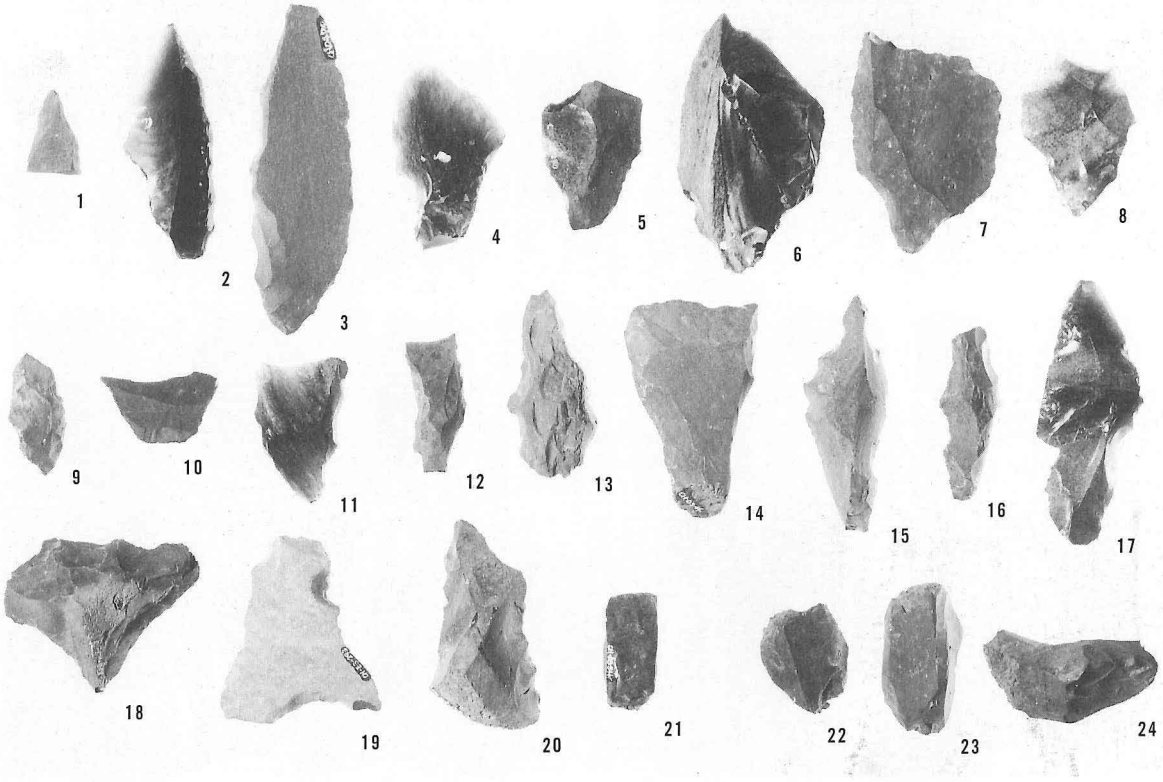


スポール出土状態

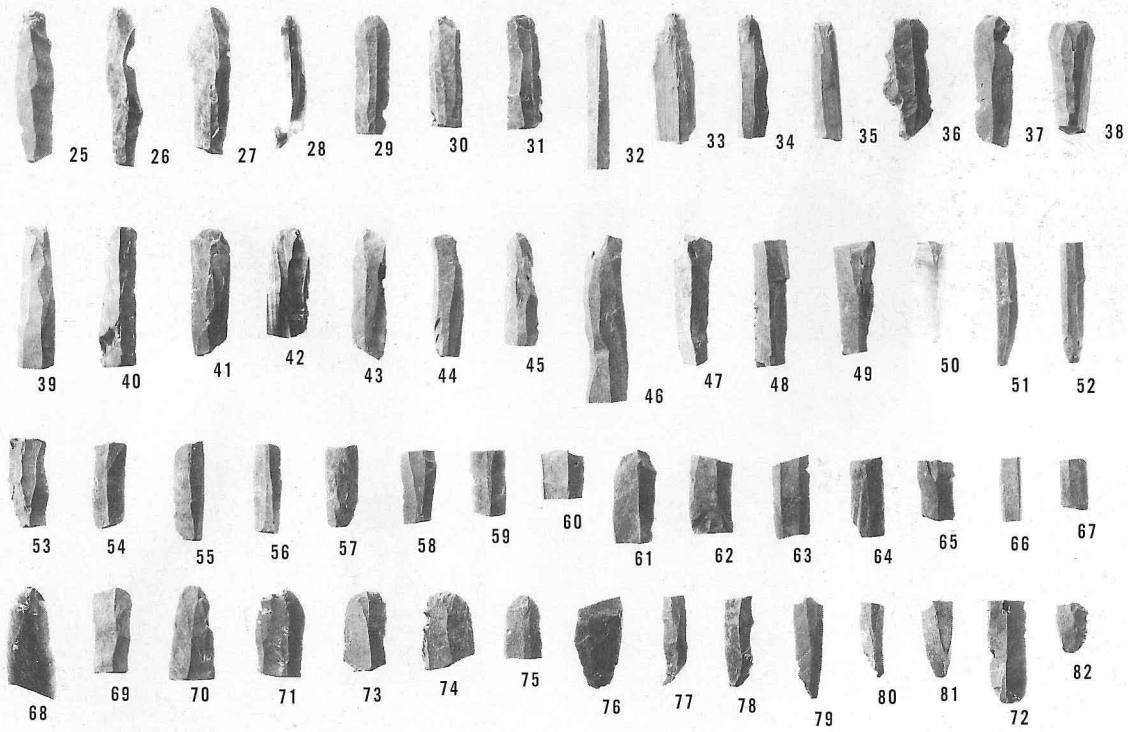


局部磨製石斧出土状態

図版 2　遺構，遺物出土状態

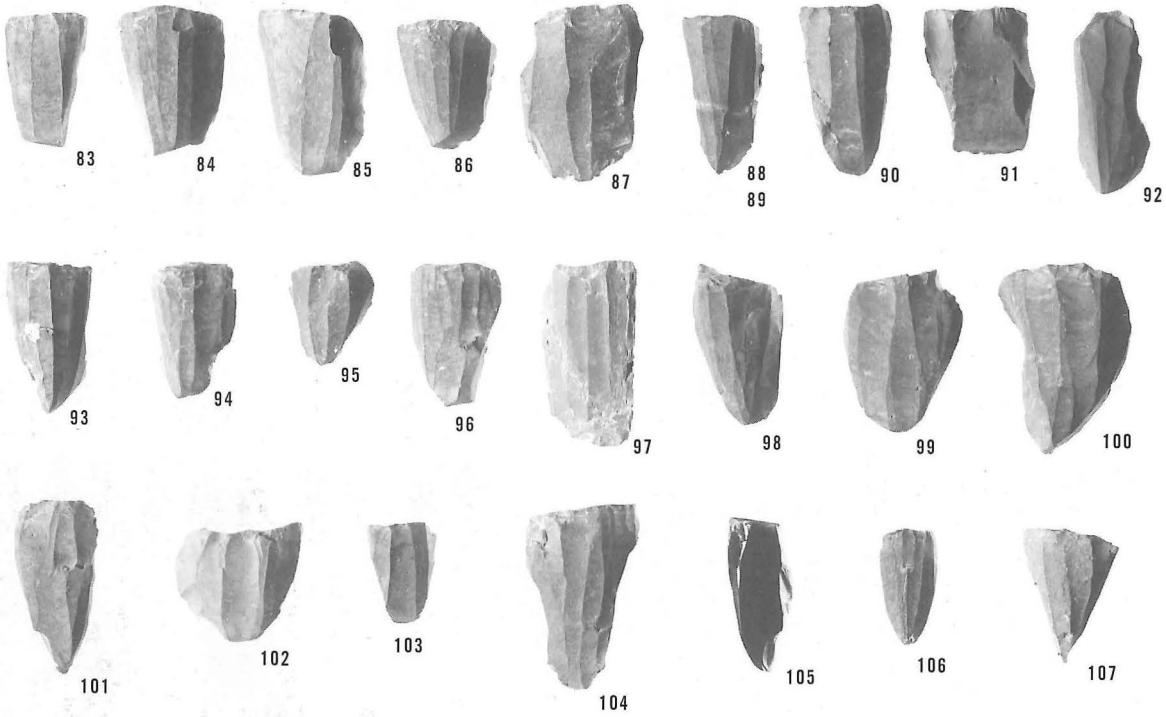


第Ⅵ層石器群の石器

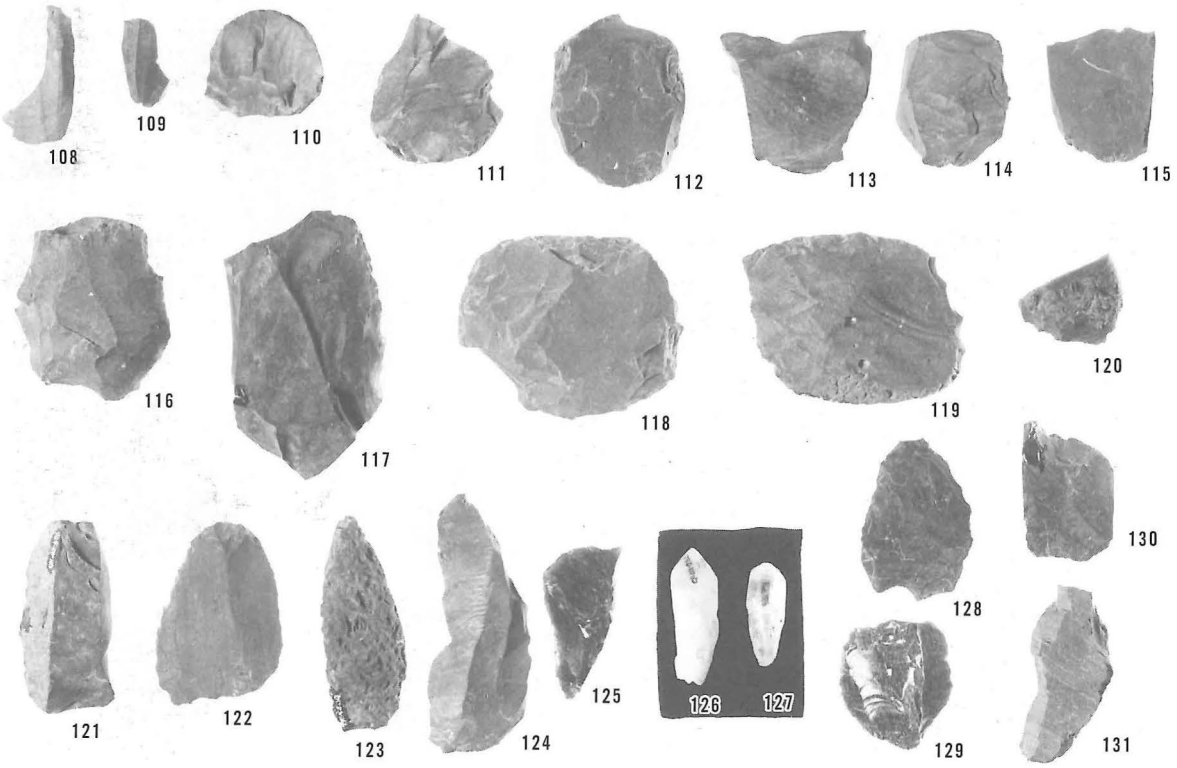


第Ⅴ層石器群の細石刃（72は天地逆）

図版 3　第Ⅵ層石器群の石器（上段），第Ⅴ層石器群の細石刃

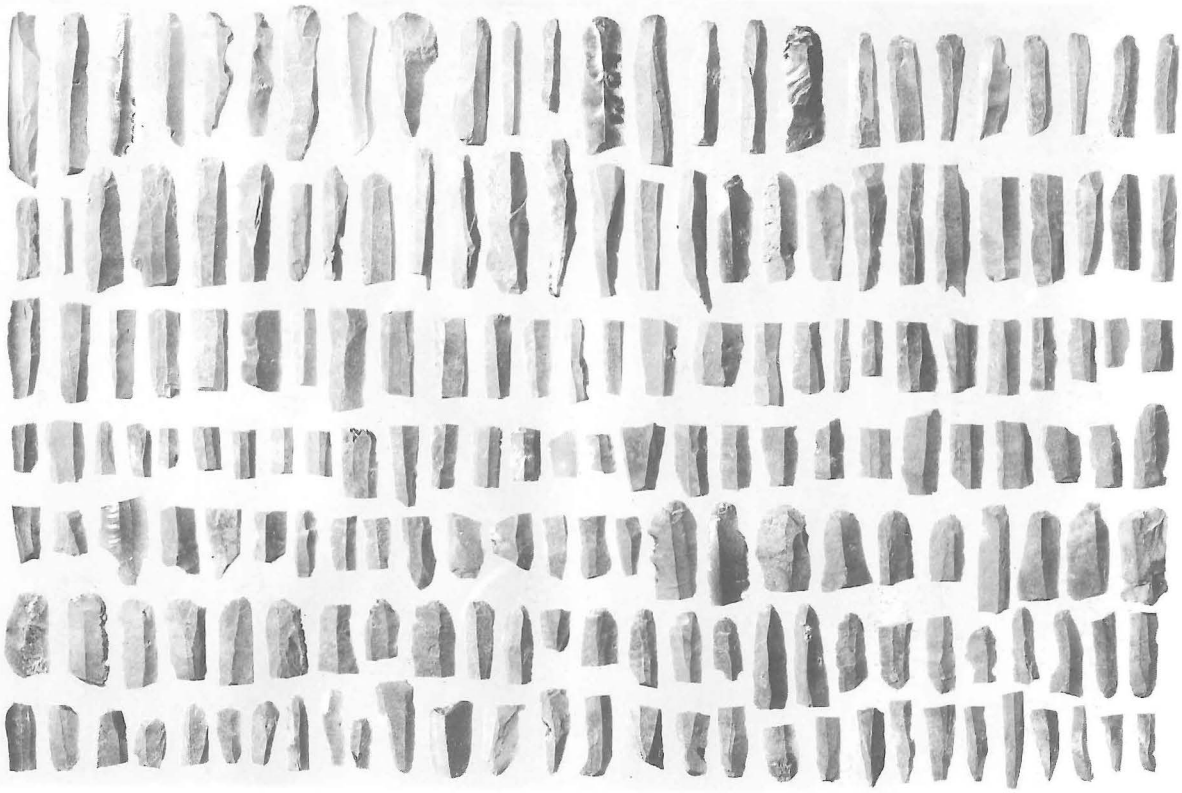


第Ⅴ層石器群の細石核

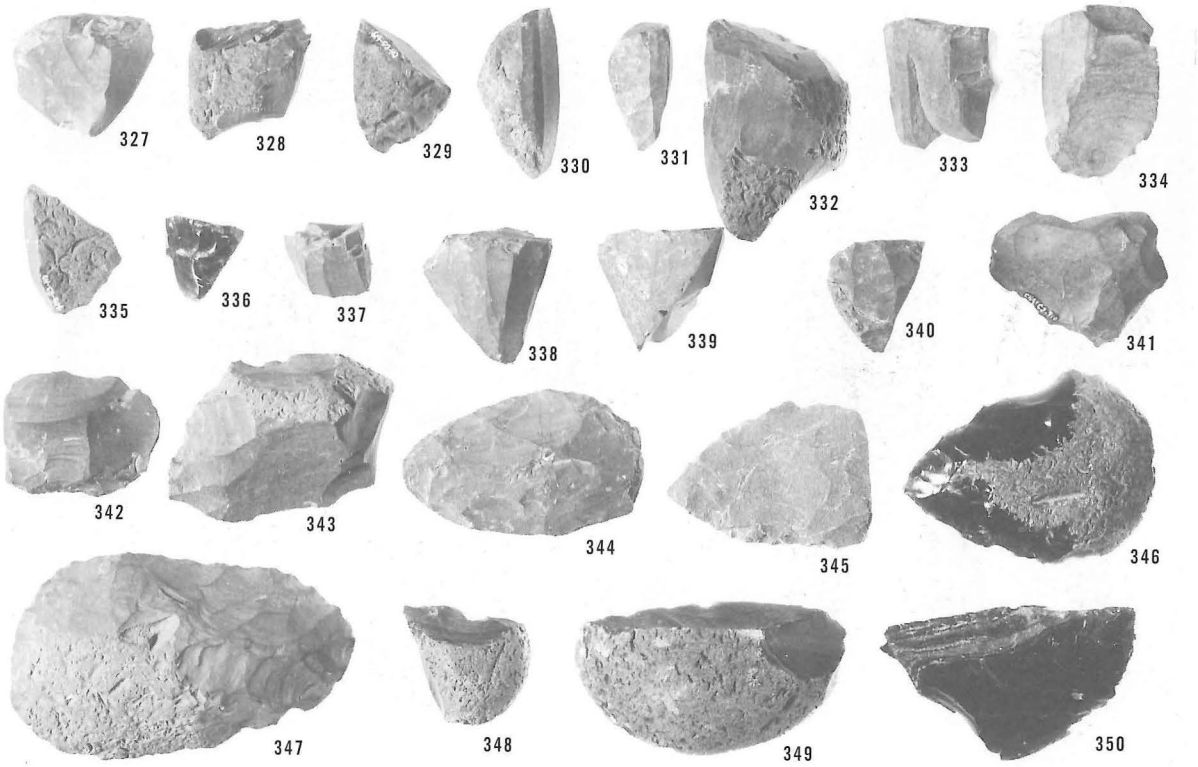


第Ⅴ層石器群の細石器関連石器とその他の石器

図版 4　第Ⅴ層石器群の細石核，第Ⅴ層石器群の細石器関連石器とその他の石器

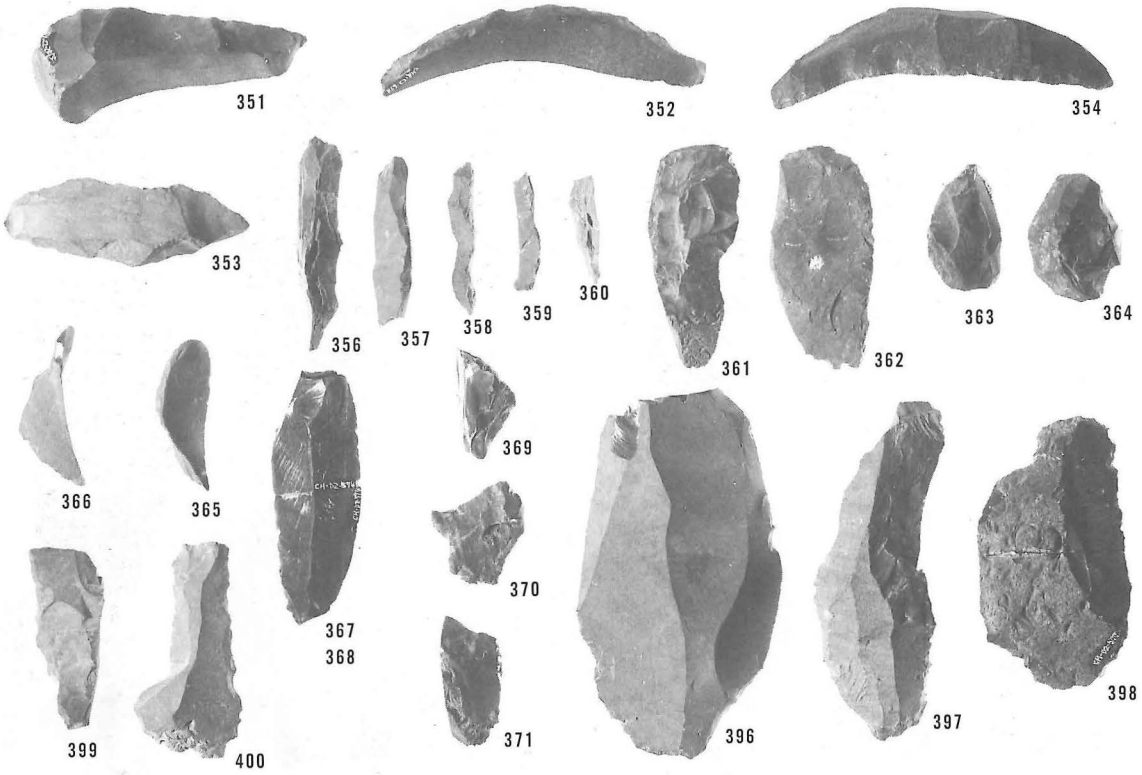


第Ⅳ層石器群の細石刃（番号省略）

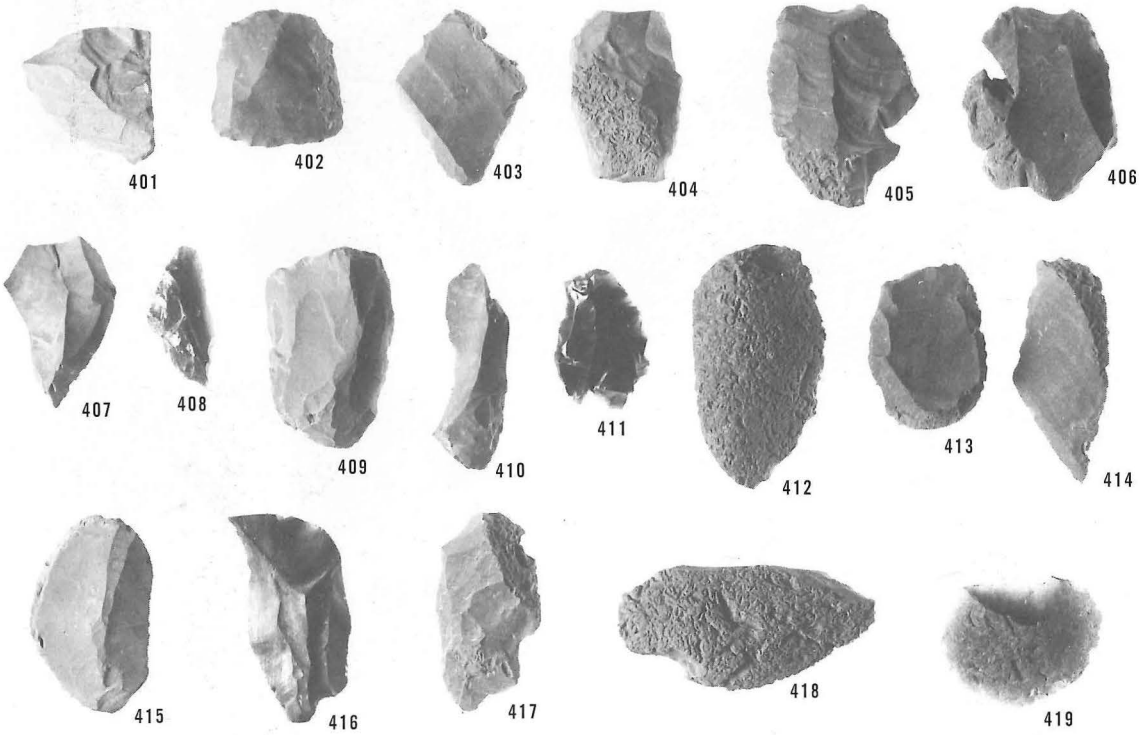


第Ⅳ層石器群の細石核とブランク

図版 5　第Ⅳ層石器群の細石刃，第Ⅳ層石器群の細石核とブランク

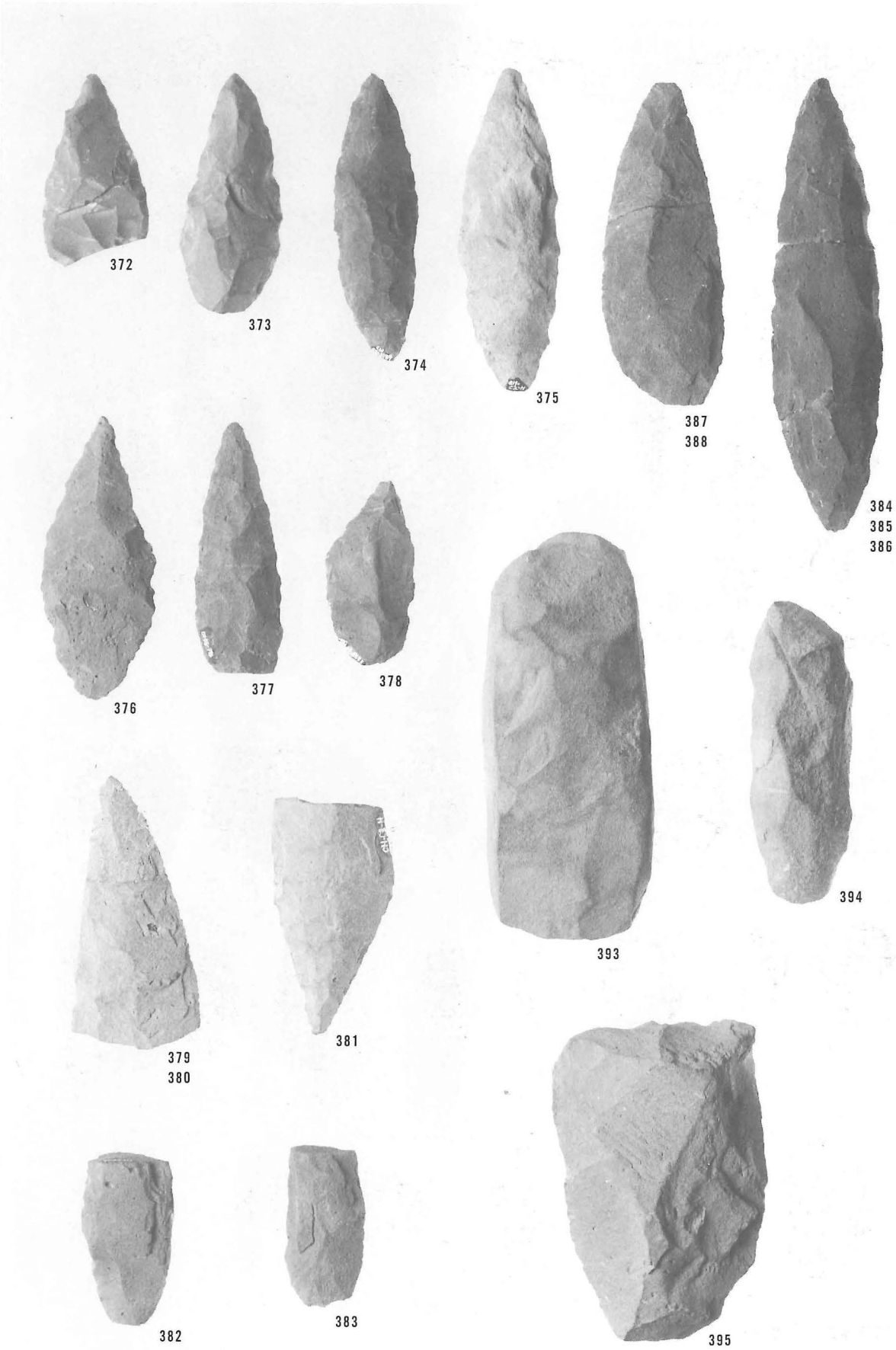


第Ⅳ層石器群の細石器関連石器とその他の石器

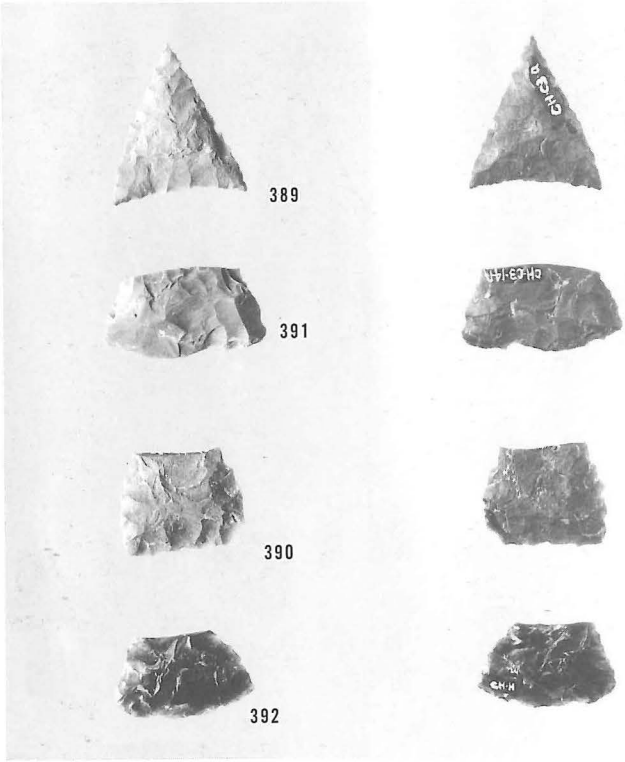


第Ⅳ層石器群のその他の石器

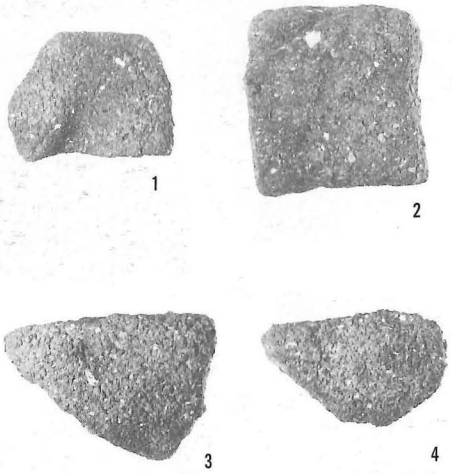
図版 6　第Ⅳ層石器群の細石器関連石器とその他の石器

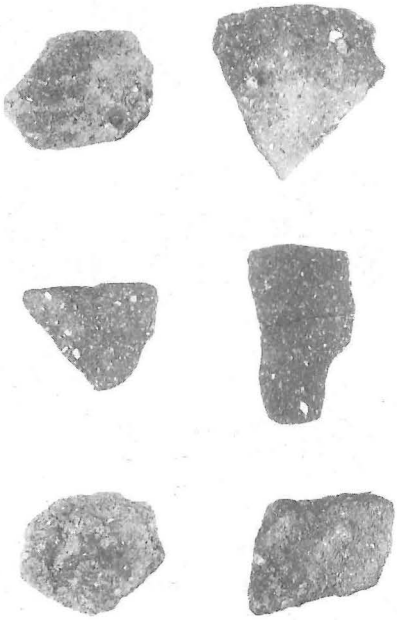


図版 7　第Ⅳ層石器群の石槍，局部磨製石斧，礫器



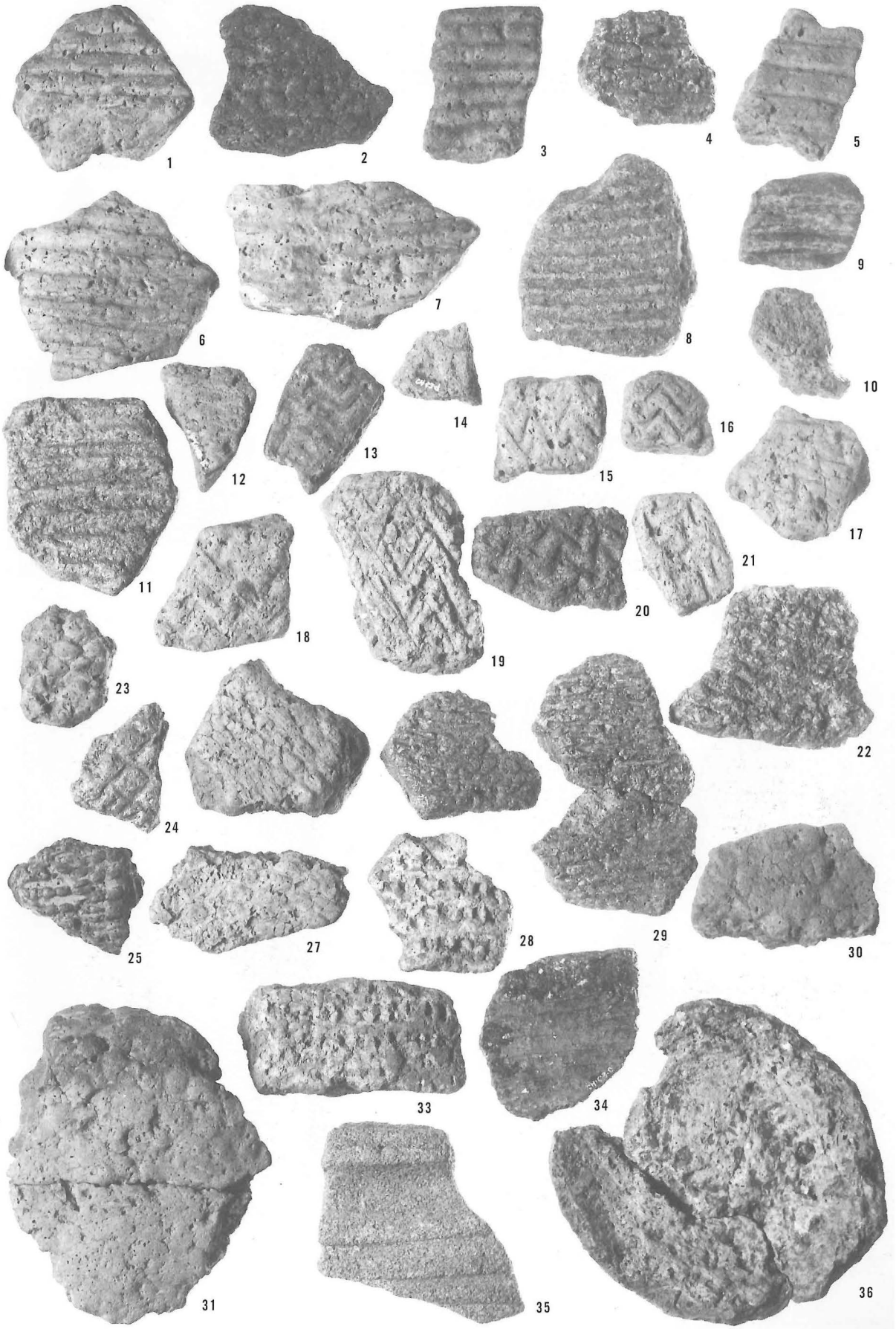
第Ⅳ層石器群の石鏃



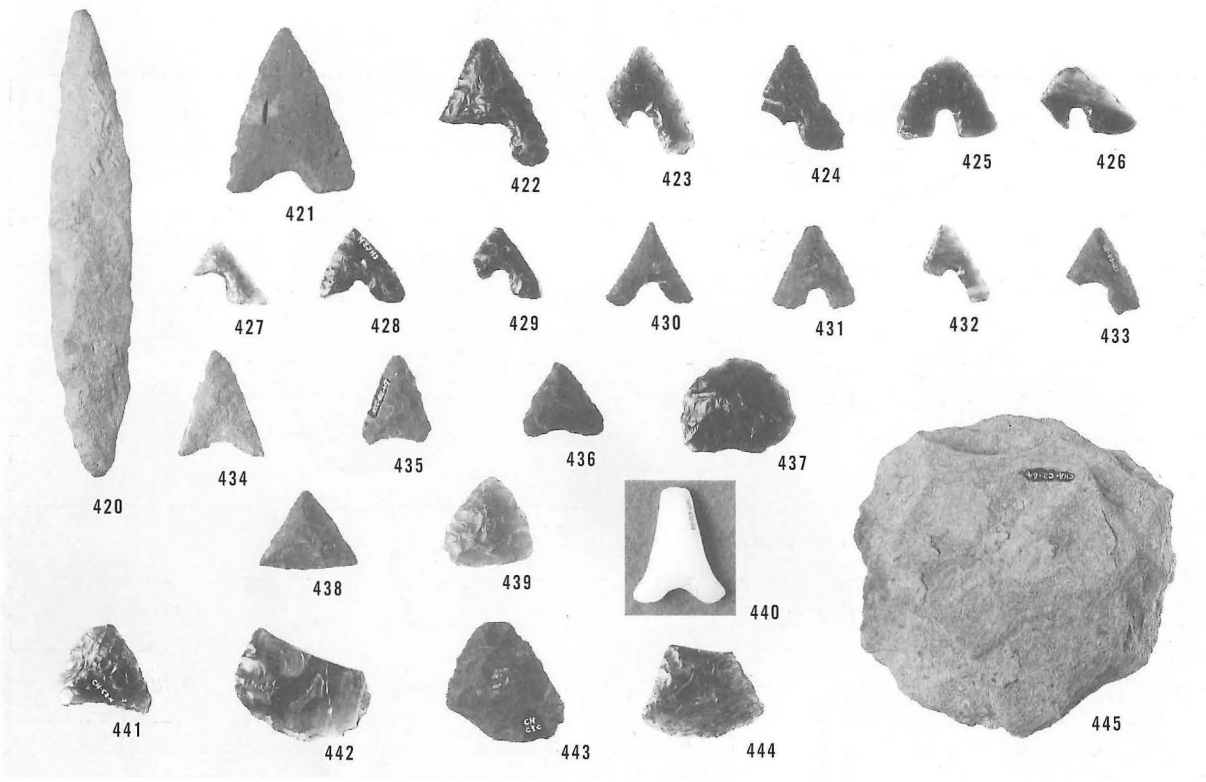


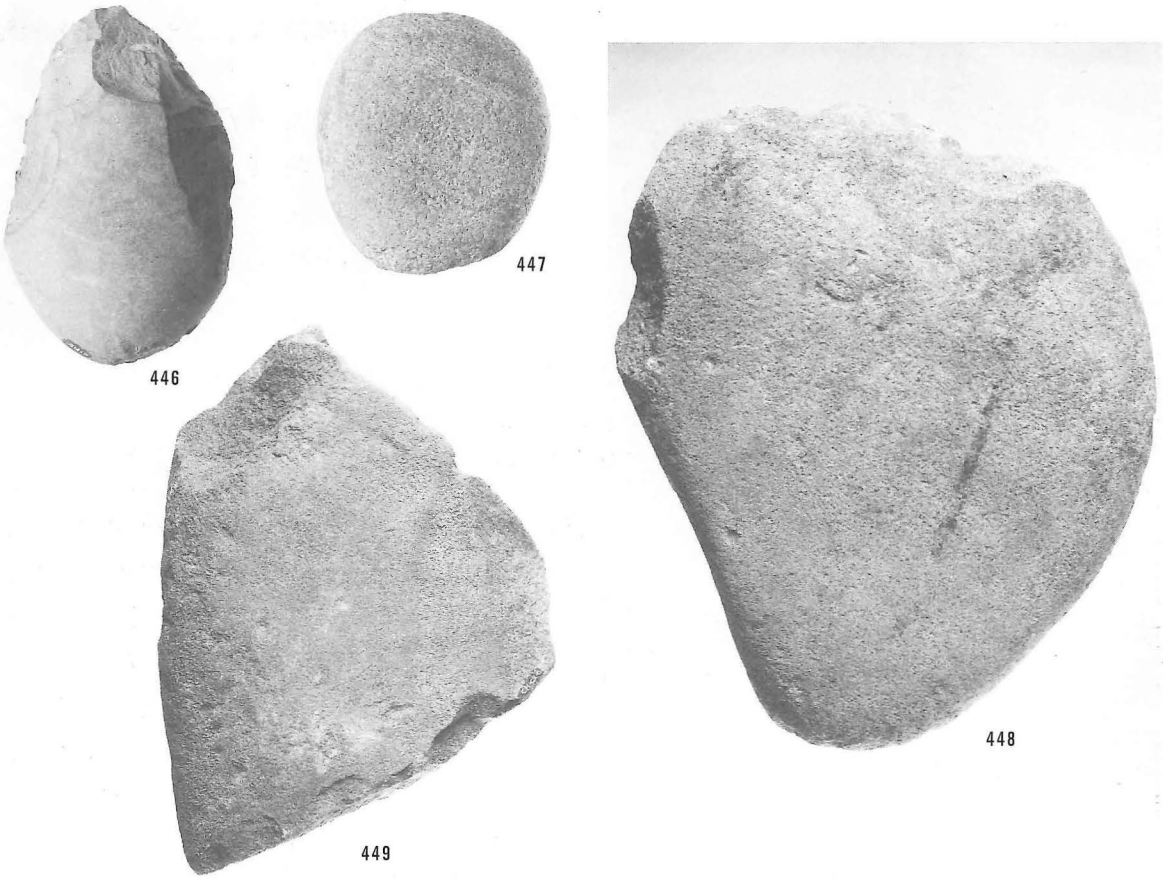
縄文草創期の土器，（右 6 点は城ケ岳平古遺跡）

図版 8　第Ⅳ層石器群の石鏃，縄文時代草創期の土器


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
27
28
29
30
31
33
34
35
36

図版 9　縄文時代の土器





図版10　縄文時代早期の石器

報告書抄録

ふりがな	ちゃえんいせき
書名	茶園遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	岐宿町文化財調査報告書
シリーズ番号	第3集
編著者名	川道　寛・荒木伸也
編集機関	長崎県岐宿町教育委員会
所在地	〒850-0701　長崎県南松浦郡岐宿町岐宿郷2535番地　ＴＥＬ(0959)82-1111
発行年月日	西暦　1998年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
茶園遺跡 (ちゃえんいせき)	長崎県南松浦郡岐宿町 (ながさきけんみなみまつうらぐんきしくちょう)	404	63－6	32° 44′ 15″	128° 46′ 03″	19970506 ～ 19970618 19970929 ～ 19971025	350m²	圃場整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
茶園遺跡	包蔵地	旧石器時代 縄文時代 草創期 早期	配石遺構 土壙	ナイフ形石器 細石器 石槍 縄文時代草創期土器 他	・旧石器時代の細石器と縄文時代草創期の細石器を層位的に検出した。 ・縄文時代草創期の細石器と石槍・局部磨製石斧の共伴を確認した。

岐宿町文化財調査報告書第３集

茶園遺跡

1998年３月31日

発　行　岐宿町教育委員会
長崎県南松浦郡岐宿町岐宿郷2535番地
TEL 0959-82-1111

印　刷　㈱昭和堂印刷
長崎県諫早市長野町1007-2
TEL 0957-22-6000